「日本語教育学特殊研究」の一カ月

学び手の日常と教育研究を結ぶ

レポート集

日本語教育学特殊研究
北京日本学研究センター
2017年4月13日

この冊子を手にとられた方へ―まえがきにかえて

この冊子は、2017 年春学期の 1 か月間に北京日本学研究センター「日本語教育学特殊研究」という集中講義でつくりあげたレポート集です。

科目のねらいとしては、主に外国語教育の歴史と現状を実践研究の立場から批判的に検討するもので、なぜことばを学び／教えるのか、ことばを学び／教えるとは何か、ことばを学び／教えることは、人にとってどんな意味があるのか、といった課題を参加者との議論を通して考える場を提供しました。

このことにより、参加者それぞれにとっての納得解を形成し、自らの言語活動の姿勢を自ら生成することを目的としました。

学び手たちの日常の自己意識が，教育研究という領域に載せられて，どのように変容するのか。なぜ日本・日本語を学ぶのかという問いから始まる作業は，学び手自身の興味・関心の掘り起こしから，やがて問題意識の記述へと高まりました。

この過程は，日本語教育の実践研究としても，また興味・関心から研究テーマへ，そして将来の職業へと続くキャリアデザインを考えるうえでも，きわめて重要なプロセスであると考えます。

日本語および日本学の学び手である学生たちの日常と教育研究を結ぶ試みとして、その過去・現在・未来をつなぐ糸の紡ぎを、参加者たち自身のことばから受け取っていただければ幸いです。

細川　英雄

2017 年 4 月 10 日

目　次

1.　私の学習パートナー：メディア

袁　通衢・北京日本学研究センター　……1

2.　出会いから一生まで

王　麗紅・北京日本学研究センター……12

3.　「今ここにいる私」の声を聞く

五藤　絵里加・北京日本学研究センター……22

4.　日本語との出会いを振り返る

斉　瓊芝・東北師範大学……35

5.　私と「日本語」・「教師」を結ぶもの

秦　小聡・北京日本学研究センター……42

6.　十年育树，百年育人

段　文晶・北京日本学研究センター……53

7.　理解し合うために「異文化」への興味関心

張　尋・北京日本学研究センター……62

8.　新たな自己の発見

張　満霞・河南大学……69

9.　コミュニケーション能力を補うもの

鄧　潔・湖南大学……76

10.　アニメ好きから教師へ――趣味は職業になれるか

ホウ　レンギ・チベット民族大学……83

11.　日本語教育の再考

雷　林・北京日本学研究センター……91

12.　私の日本語世界への旅

呂　亜君・中国海洋大学……105

編集後記（参加者からの一言）……110

私の学習パートナー：メディア
―メディア・リテラシーの育成に向けて―

北京日本学研究センター　教育コース
袁　通衢

１．パートナーのメディアとの出会い

●『となりのトトロ』から日本語の世界へ

私はこのテーマに関心を持ったのはやはり自分の体験から考えたからである。まだ大学に入る前の夏休み中、『となりのトトロ』というアニメーションを観て、その中に一番印象残ったのは、やはり主人公のメイとサツキの友達になったトトロたちが母のお見舞いに行く途中で道に迷ったメイを一生懸命探したシーンだった。そのシーンから日本人の自然観の中心となる人間と自然との調和が私たちにどれほど重要なものかとつくづく感じ取った。無邪気な子供のメイとサツキがまさしく一番純粋な人間として捉え、そしてトトロなどの「奇妙な」生き物が自然の代表としてメイたちとともに仲良くて楽しく暮らせることが今の世界の理想像ではないかと思った。そこから「日本はこんなに魅力的な国だったのか」とか、「そこの世界行きたい」とかの気持ちがあって日本語を主専攻とすることにした。

大学に入った後、だんだん自分の日本語力が向上し続けるうちに、もはや日本に行きたいことだけではなく、日本語が自分にとってどのような意味があるかという問題が出てきた。そのような疑問を抱きながら、私は日本語教育を院生コースにして今まで自分が歩んできた日本語とともに生きてきた人生をもう一度振り返ってみたい。自分が果たしてどのようにして日本語を学ぶかのことがこの先に大きな影響を与えると考え、これからのテーマ探しも自分の学習経験と関連付けたほうがいいのではないかと決めた。

●メディア・リテラシーを思いついた理由

こういう考えに基づき、また最初の「となりのトトロ」の話が浮かび上がってきた。どうして自分がそのアニメを見た後日本語を専攻としたかったのか、と自分に問い直した。アニメの魅力か、それともほかに何らかの理由があるのか。これを答えられるため、そのアニメの実質としての「メディア」と思いつき、「メディア」から日本語教育への影響はどのようなものなのかについてもっと知りたくなった。それで、メディアと日本語教育に関する色々な論考を参考した上で、「メディア・リテラシー」というキーワードが目に入った。メディア・リテラシーとは、情報化社会に控え、多数のメディアから得た情報をクリティカルに読み解く能力の育成を目指している一種のリテラシーである。確かに、当時自分が『となりのトトロ』に現れた日本人の自然観や日本の美しい風景などの「情報」を

受けたが、それは実際にアニメというメディアによって伝わってきたのが事実であった。

●メディア・リテラシーの自己解釈

こうして、私自身にとって、『となりのトトロ』に限らなく、今までの日本語学習経験でこのようなメディア情報を積極的に接触し、自分の日本又は日本語に関する知識システムを充実させた感じがある。つまり、メディア情報を能動的に利用し、自らの学習内容を拡充することができたと思う。

しかし、ただ一方的に何も選択しなくてそのまま取り入れるとしたら、恐らく自分に必要がないまた害をもたらす情報からの悪影響を及ばされる可能性がある。一方、自分の学習力や時間に限界があるため、全てのメディア情報を読み解くことができないと思う。そこで、メディア情報をいかに自らで有効的かつ批判的に読み解く能力を開発するかという自己啓発が重要であり、さらに学習者側が日本語学習に用いるメディア・リテラシーの利用実態の解明が必要である。

２．対話（対話相手：朱　桂栄先生）

●朱先生を選んだ理由

まず、一学期にわたって朱先生の授業を受け、先生が中国の日本語教育実態を長く研究されている経験に非常に感心している。これからの研究に実態調査を導入するつもりで、経験豊富の朱先生から素晴らしいヒントをいただけると思ったため、対話相手になっていただくことにした。さらに、朱先生が指導したある先輩が自分のテーマと何らかの共通点があるので、自分のテーマに大きな助かりになると信じている。

●対話文

対話１『となりのトトロ』の再発見

朱	袁さんが書いたテーマ動機文を一応前もって読みましたが、つまり細川先生がこれを書いてもらう目的は君自身の研究動機を探し出すため考えられたよね。
袁	そうです、実はこのテーマを選んだのは、やはり自分がなぜこういう研究したかの最も純粋な考えをはっきりさせることで、たぶん先行研究とそれほど深く関わらなくてもいいと思います。本当に自分がこれを研究したい気持ちのことじゃないかと。
朱	なるほど、私これを読んだ後、袁さんがメディア・リテラシーに興味があるのはそういう自分自身の体験があったわけだとわかった。『となりのトトロ』というアニメーションを見て、その中の幾つかのシーンに感動されて、それから日本に

	好感を抱けるようになることですか？
袁	好感というより、端的に言えば、もともと知らない「モノ」を突然目の前に現れて一種の好奇心というものがふさわしいんじゃないかな…
朱	じゃ、そういう好奇心は日本に対したのか、それとも、日本のアニメですか？
袁	そうですね、実は私は日本のアニメに対してそれほど好きというか、あるいはそんな高いテンションを持つことじゃないと思ったが、この「トトロ」を観てその中に私の国文化と違うところがあって、例えば、人間と自然とどういうふうに付き合ったか、また子供の無邪気さをどういうふうに表現するか、大人としての「お父さん」はどうやって子供に自然との付き合い方を教えたかなどといった日本人の思想だったか、やはり日本人の心の奥に秘められているものに好奇心を持って、もっとそれを知りたいという気持ちがあったと思いますね。
朱	そうですか、つまりこれを通して日本人の考え方を知るようになったことですね。
袁	はい、これはまるで切り口のようなもので、そのアニメの中に出てきた多くのことが今の私たちの世界に必要なものだと思ったわけなんです。

対話をしながら考えたこと

まず、先生からの質問で自分が一体「となりのトトロ」の中に何か感動されたかがもう一度確認した。やはりアニメを通して日本人の特別なところに一番印象があるのではないかと気づいた。そして、こういう感動はわたしにとってどういうような存在なのかにもはっきりした気がする。全てのものに対する興味はまず好奇心から始まり、自分自身のテーマもそうではないかなと悟った。

対話2　日本語専攻を選んだきっかけ

朱	その時もう日本語を専攻として選びたかったんですか。
袁	これを観たのはちょうどセンター試験の結果発表直後で、まだ出願していなかったのです。実は、私は浪一なので、どうしても外国語専攻をしたいけど二度目の成績がまた思うようにならなくてくよくよしていたのです…
朱	その時も外国語に興味津々なのか？
袁	はい、そうです。私は理系苦手で成績一番良いのは英語だったから、ずっと外国語に興味があります。でも、その時英語以外の言語を全然触れたことないので、大学で英語に近いフランス語やドイツ語などのヨローパ言語を志向したんで、ア

	ジア系言語をも考えたことなくて、だから大学に入る前に日本語に全く知らない状態でした。
朱	そうか、じゃ一回目の試験で出願学校が全て落ちたことですか？
袁	いや、受かたんですが、専攻の国際ビジネスが自分に向いていないと思ってとうとうやめてやり直しようと決めました。今から振り返ってみれば、自分の受験能力がやはり低かったので、受験日の前日緊張しすぎで全然眠れなくて母に寝薬を買ってもらいたいほど辛かったのです。
朱	普段の成績が良いが、いざ試験になると…
袁	そうですね、試験になると心がもやもやしてて落ち着かなくて、特に二度目なのでストレスがとりわけいっぱい溜まってて集中できなくなっちゃいますね。
朱	じゃ、浪一の一年間、自分がどの大学を目指すかなどのことを考えたことありますか？
袁	まあ、実は北京外大を志望したんですが、５人しか受からない上に、合格基準も高いなどの理由があって諦めるしかないです。それに、他の外国語大学に出願しましたが、結局一つも受からずに今の大学に入りました。ですけど、最後に日本語を専攻になってよかったなあと思ってて。まあ、前も宮崎駿監督のアニメが素晴らしいって聞いたんだけど、もともと二次元の世界に興味ない私は人生の迷ってる時、偶然「トトロ」を見て案外悪くない気がしました。
朱	あっ、何か別のアニメと違って深さがあることですね。
袁	そうですね、本当にそこの世界に行きたいという一瞬の衝動があって、日本語を選んだらどうっていう考えが思わずに浮かび上がったんです。でも、それは 2012 年だったかな、ちょうど魚釣島問題が話題になった頃、新聞記事で日本にマイナス的な報道が流されたが、私にはこんな奥行きがある作品を作られる国ではきっと特別でいいところがあるはずだと信じて日本語専攻がある大学を探し始めました。やっと今の学部生の大学を受かったんです。で、夏休み中自分が宮崎駿監督の全ての作品を見ました、それに今でもたまたま見ることですよ。

対話をしながら考えたこと

これは自分が偶然「となりのトトロ」との出会いの話で、最初は「となりのトトロ」を見たくて見るつもりではなく、一つのストレス解消法として接触したことがわかった。実はこれがまさにメディアの一つのメリットとして、人の精神状態を良くなるところだと考えた。さらに、「となりのトトロ」がきっかけにして日本語専攻とすることがおそらく

自分にも思わなかったことで、その作品から与えてくれた潜在的な力の役割ではないかと思っている。

対話3　日本語学習経験の振り返り

朱	じゃ、大学に入った後はどうやって日本語を勉強してたの？
袁	最初は仮名の覚えから始まって、まるで絵みたいな感じでとても面白いなあと思って、まあ、別に特別な勉強法がないですけど、ネットでも日本語がだんだん難しくなるよっていう投稿もあったから、やはり先生からの宿題をちゃんとクリアして、真剣に一歩一歩踏み続けていくことですね。もちろん、最初も困難いっぱいあって、日本人先生に何度も尋ねたことがあって私のことを支えてくれたりするとか、自分の家まで誘ってくれたりするとか、本当に先生たちに色々お世話になりました。実は、私は内気な性格であんまり校内の活動を参加する気が無くて、でも、三年生になるともうこんな自分が嫌だって自分に強いて全国日本知識大会の校内選抜を参加させて、意外に校内選抜に合格して最後は個人戦二等賞を収めて訪日機会をもらいました。
朱	いいですね。やはり精一杯努力した結果ですね。で、こういう経験をどのようにこれからの人生に活かそうとするんですか？
袁	そうですね、今までの体験では、最初の見た「トトロ」とこれから日研センターに入って教育コースを選んだことと一見して大した関係がなさそうに見えるですが、これはステップバイステップで段階的に上がってきたことだと思っています。
朱	そうですよね、一歩一歩歩んできたものだね。じゃ、何か特別な方法を使って知識大会を準備したのか？
袁	うちの大学は初めて参加するので、まだ初心者の私たちは大会 HP で過去問題集をチェックして、一人一人の担当分野を分けて進めたが、私は個人戦も出場しますから、先輩からまとめた知識をよく身につけて正直に言えばその時大変だったね。幸いなことに、やっと乗り越えて自分の実力を挑戦しました。
朱	そうですね、じゃこれを経験した後、自分に何か新しい発見を得たか？
袁	えっと、まず自分が努力した結果を見て、やっぱり努力すればきっと報われるって思います。そして一番気づいたことは、自分が日本語を選んだことです。日本語を勉強するうちに、自分のいろんな方面が成長できたと思って、仕事の態度とか相手との付き合い方とか、沢山のところで勉強になりました。

対話をしながら考えたこと

「となりのトトロ」のおかげで、日本語の世界に歩んできた。そのあとの日本語学習では、自分の日本語力の向上を目指すため何回の挑戦をした結果、新しい自分を見つけた気がするように思える。自分の大学時代では、日本語を学習するから日本語で学習する転換を果たしたのは自分に大きなチャレンジでもあったし、大きなチャンスでもあった。

対話4　日本語学習にあるメディアの存在

袁	私の周りでは大学の四年間ずっと言語知識を重視している人が多くいたけど、二年生もＮ1合格した私には…
朱	うわ、二年生の時もうＮ1合格したの？すごいね、やはり真面目に勉強してきたわね。
袁	まあ、それはまだ一年生の時、初めて基礎日本語の担当先生から『ゼロから学ぶというのは無限な可能性があることですよ。ただ上がる可能性もあって、下がる可能性もあるから、ちゃんとしっかりしてね』と励ましてくれました。日本語学習においてみんな同じスタートラインに立っているので、大学入試二度失敗の私にとってこれぞチャンスだって
朱	そうだね、みんな同じなんだよ、これから自分の努力次第だね。自分の努力したことは具体的に何かあるか？
袁	そうですね、私にとって外国語学習は自分を赤ちゃんとして扱って外国語の練習を繰り返すことだと思います。二年生の下半期から私はNHKの聞き取りを練習し始めて、最初は本当に難しくて言った意味全然わからなかったんですけど、一年ぐらいにわたってやっと大体的にニュースの全体意味がわかるようになります。
朱	聞き取りってどうやってするの？ただ聞くだけですか？
袁	いいえ、一日中同じニュースを何回も繰り返して聞くことで、わからない単語の場合、ネットで調べて確認することです。
朱	ああ、そういう練習法はいいね。記憶の定着に大きく助かりますね。
袁	まあ、確かにこういう練習を通して効果的だと思って、実はさっき話した知識大会の幾つかの出題の内容は NHK から聞き取ったものでとても役立ちます。なので、NHKもいいし、「トトロ」もいいし、こう言ったメディアは本当に私に大きな影響を与えてくれた。なぜなら、メディアが二次元の文字から脱皮して三次元の立体の世界を提供してくれたので、前より何倍以上の学習効果があると思ってい

	ます。まあ、確かに今の日本語教室でもメディアを利用したケースも少なくないんですが、それはあくまでも授業導入のためあるいは学習者に動機付けのため敢えて使うことにすぎないです。要するに、メディアの重要性を知るべきことが大事だと思って、それにどのように利用することも無視できないことです。私たちの周りに数えられないほどのメディアが存在していて、それを全部取ることがまず時間的にも精力的にも無理じゃないかなと、さらに、害をもたらしやすいメディアを捨てて、そういう主体的能力をも考えたのです。個性の育成に重要な役割を果たすことができると思います。

対話をしながら考えたこと

今まで自分の日本語学習経験では、果たしてメディアはどのような存在だったのかについて振り返ってみた。もちろん、最初はメディアの役割は言語知識の構築するためであったが、言語知識が徐々に豊富になるうち、メディアの役目も次第に変わっていくのである。その時、もはや言語そのものに関する知識ではなく、言語の裏に秘められている社会や文化といった内的理解上の必要性があると思う。

対話5　メディア・リテラシーに移す理由

朱	今の多くの学生達がこういうメディアを使っているうち、個々の単語についての意味重視が多いですね。
袁	私最初もそうなんです。やはり一定の理解の上で、あるいはわからないところで推論を通して読み解くことが普通です。ただ、もう少し上に行くと、意味理解に大きな障害がなければ、そのテクストの裏にある全体構造や核心的な情報の理解能力が必要じゃないかと思います。
朱	袁さん自身が自律的に学習できることが重要な役割を果たしたわけね。
袁	まあね、実際の授業時間は割と少ないため、授業後の自主的な学習をちゃんとやらないといけないと思って、そもそも大学生は自主的な学習能力を育むことが大事じゃないんですか。
朱	だから、メディアを自律学習の一つの素材として捉えることですね…
袁	そうですね、細川先生のおかげでこういう機会をもらえて自分が今までどうやって勉強してきたかを振り返ることができてよかったなぁ。自分にとって核心的なものはメディアではないかとやっと気づくことができた感じです。それにメディアの一つのメリットとして、学習に行き詰まっている時に…

朱	気分転換できるよね、いろんなメディアがあるわけで、調節作用がありますね。それに、さっき気づいたのが私たちは日本語を勉強しているが、実は最も重要視すべきなのはそこからもらった情報のことですね。社会や文化などの事情があって、自分のことを豊かにさせる役割があってどうやら多方面的に促すことができるみたいですね。それに、袁さんの場合で、知識大会の準備とか大きな助かりあるのは確実なことだね。
袁	そうですね、ですから、メディアによって私を変えることがきっかけにして、もっとメデイアの役割などについて研究したいと思います。それから、自分と同じ学習経験を持つ人はまたどういうふうに思っているかについても知りたいです。今では、中国で日本語を学びたい人の中にアニメやドラマなどのサブカルチャーに興味を持つきっかけとしたのは少なくないようで、こういう学習者の中にメディアをどう認識するか、また本番の日本語学習にメディアを使うかどうか、どう使うかどうかという一連の疑問解決は多分メディア・リテラシーを育成するための動機だと思います。
朱	もしこれを本当に研究テーマになったら、研究対象の方は？
袁	やはり日本語専攻生が研究対象としたかったのですね…
朱	そうか、まあ、確かに今は大学生向けのリテラシー教育を重視すべきだという考えもありますね。

対話をしながら考えたこと

自分がどうしてメディア・リテラシーを研究したいかというと、メディア利用のメリットは私に大きな助かりがあることから始まる。そこで、もし自分と同じ学習経験とか、こういうようなメディアを利用して上達したい学習者がいれば、メディア・リテラシーの育成の重要性が浮かび上がってきた。実はこういうリテラシー教育こそ大学生の総合能力の開発に向けていると考えられる。

対話6　研究と自分の関係性

朱	実は昨日も費先生と自分の研究方法などについて相談をお願いしたんですけど、費先生の話だと最初の「批判的思考」、「メディア・リテラシー」と「読み解く能力」この三者の間での繋がりがまだ不明で、一体何を育成するつもりなのか、なにを測りたいのかちょっとわからないから、おそらく三つの何かを除いて、残った二つの関係性を整理すればわりとはっきりしているかもしれないって、先生の

	授業で紹介してくださった再話活動の導入を導入したらどうですかと思ってて。
袁	しかし、今見せたこの研究計画と研究動機がどうもさっき話してくれた自分の体験とギャップがある気がします。前話した体験話はとても有意義だと思って、その中にある価値などや君自身の成長に助かりがあると。でも、今逆に聞いてみると、袁さんは研究するとき、自分が一番価値あると思ったことは何ですか。つまり、細川先生よく言われた通り「自己開示」のことですよね。自分の考えを論理的に見せること自体も意義あることで、なのにまず研究方法を探すのは順序が後先になってしまうから、袁さん自身の意識では必ず統計学の知識を使わないといけないと思ったでしょう。だから、何をアピールしたいかが一番重要なことです。研究方法は別にして、どの課題でどの方法を選ぶことこそ一番大事ですね。もちろん、実験の場合、要因が少なければないほどコントロールしやすいけど、教育現場は他要因が機能的に関連することでそんな簡単に決め付けるのはできないから、やはり自分が何を研究に持ち込むのか今袁さん自身には一番の課題だよ。で、実はこの研究テーマは私にはやや理解しにくい気がして、さっき言った体験と何か繋がらない感じがあります。
朱	でも、実際に私たちの研究では必ずしも実践を通してみることではなく、今私たちのような対話みたいなインタビューなどの質的研究でも全く問題ないですよ。例えば、日本語学部の三、四年生とやりとりをして、彼らのメディアに対する意識などの深いところを観察することです。質的研究というのは価値の賦与、価値の意味づけのことです。袁さん自身の体験も一つのケースです、こういう内的なものを明確にすれば、教育現場や教師への示唆ができると思えます。学習者の真の経験の記述は私たちの研究には大きな価値があります。もちろん、量的なアンケートを同時に行ってもいいし、でも細かいところはやはり質的インタビューからのが多いです。だから、いろいろなアプローチがあるけど、袁さん自身が一体何をみなさんにシェアしたいかによるものにはほからないですね。今の日本語教育現場で最も必要な研究は何かのことをよく自分なりに考えなければなりません。
袁	個人的には、教室内の状況はやはり色々な制限があるので、そう簡単に変えるとは言えないので、教室外で学生のメディアの利用実態をメディア・リテラシーから見るだとできそうに思えるから…
朱	そうね、こういう探索的な研究もよくあります。
袁	ということで、まずは全国範囲の日本語学習者のメディア使用実態をアンケート

	調査から把握して、でも得た結果予測できないかもしれないです。
朱	そうですね、一つの研究では全てのことを含むことはまず無理なことで、幾つかのケースを取り上げて質的分析を行うことでもいいです。要するに、自分が何を知りたい、あるいはみんなに見せたいのはこれからの課題です。
袁	先生の話を聞いて、やはりどのような研究方法を使うかまだわからないので、その前の研究目的はメディア・リテラシーが学習者にどの影響またはどの関係があるのか、さらに学習者の 4 技能能力の発達に何か役割を果たすかのことです。
朱	じゃ、4 技能能力の身につけはデータ分析から見るんですか。もしそうだったら、メディア・リテラシーの具体的な意味をもうちょっと掘り下げた方がいいと思います。メディア・リテラシー自体もリテラシーの一種で、それは育成するものなので方法ではない。これをはっきりしないとダメですよね。まあ、もちろんこのテーマはとても面白くて、ちょうど私たちの日本語学習に必要なもので、これについての実態調査も必要ですが、やはりまず他の学習者と接触して彼らの本音を聞いてからヒントになるかもしれないです。

対話をしながら考えたこと

朱先生からのご提案では、まずは研究方法の確定ではなく、研究目的の究明が一番大事だと考える。確かに、費先生の話でも、研究目的の明確をすればどの研究方法を使うかが自然にわかるようになるという。したがって、今の私は、メディア・リテラシーについて何を知りたいかの疑問解決が急がなければならない。

３．わたしの考え

一時間半の対話を通し、私の考えは前より大きく変わった。最初は『となりのトトロ』というアニメーションを見たことがきっかけにして日本語専攻を選ぶことにした。実は、前のテーマ動機文にそのアニメには自分の生きた世界との違いがあるため、好奇心を浮かべるによって日本語を専攻としたと書いてあったが、その違いまた好奇心を生じた原因について自分にもよくわからなかった。しかし、対話を進めるうちに、もともとアニメをただの娯楽道具として捉えた私は、本当に自分が「となりのトトロ」を楽しんでいるのはその背後にある違う世界、違う文化から与えた魅力ではないかと気づいた。そのような原因のため、自分が日本語との出会いが始まったわけだと思っている。

さらに、先生から尋ねてきた質問に対し、今まで自分がこの四年間どうやって日本語を学んできたか、そしてメディアと何か特別な関係があるのかについて次第に明らかになる気がする。自分の努力に欠かせない言語学習の道で、自分がずっとメディアと寄り添い

ながら歩んできたことがやっとわかった。知識大会や聴解上達のためよく聞き取り練習をしていたNHKラジオニュースといい、日本人の生活を知るためアニメや日本ドラムを見るといい、いずれもメディアと付き合ってここまでたどり着いたのである。だが、メディアによって日本語学習に大きな助かりがあるのは知ったが、その反面、触ったらよくないあるいは時間と精力の無駄という特徴を持つメディア情報もあるというのが事実である。こう考えると、私たちがメディアを日本語学習リソースとするとき、どのように正しく自分なりに利用するのかが重要である。もともとはメディア・リテラシーを一つの手段で学習者の「読み解く」能力を開発しようと思ったが、朱先生からのご質問とご意見などを自分なりに考えた後、やはり自分が何をしたいかという課題がまだ不明である。

これを究明しないと後の研究が進まない気がして、今後自分の頭をよく冷やし、研究対象としたい学習者たちと深く交流しようと思い、彼らのメディア・リテラシーに対する認識を事前に知った上で、自分の経験としっかり繋がって何か新しい発見や方向を見つければいいと考えている。

出会いから一生まで

—日本語との関係への思考—

北京日本学研究センター　教育コース

王　麗紅

1．なぜ「日本語なのか」

●日本語を選んだ理由

最初は日本語にすごく興味があって、選んだわけではありません。自分が何の科目に興味があるのかも正直、よくわかりませんでした。理系がすごく苦手なのがよく知っていますけど。高校生の頃、英語の成績はまあまあ良かったけど、英語や欧米文化に興味がなかったです。時々、どうしてかはよくわからないけど、正答したことがあります。同級生になぜいつも正答できるのと聞かれても、「勘です。」だけしか答えられませんでした。そして、同級生に「経験がたくさんあるからじゃない？」と言われて、私はこれを誉め言葉だと受け取って、言語を学ぶのはこんなに達成感があるとはじめて気づきました。

当時、私は『名探偵コナン』というアニメに夢中になって、コナン君を通して、日本という国はこんな感じかと、日本に対する最初の印象を持ち始めました。最初の印象といいますと、アニメの中で、コナン君たちが自分の好きなことをしていいというところです。もちろん、事件の真相を求めるのも面白いけど、私を引いたのは、午後授業のないコナン君は友達と一緒にサッカーやったり、「冒険」したりして、毎日楽しそうな様子でした。勉強のストレスで疲れる私はうらやましくてしょうがなかったです。日本の実際の状況はアニメの中のシーンと同じなのか、実際の日本小学生はどうなのかという疑問を持って、日本という国にすこし興味がわいてきて、日本のことをもっと知りたいという気持ちが出てきました。

大学の志願で迷うとき、「言語を学ぶもたのしいし、日本をもっと知りたいなら、日本語にしようか」と考えて、日本語を選んだのです。日本語の勉強を通し、以前知らなかった日本のカラフルな文化に引かれたのは後の話ですけど。

●日本語を続ける理由

大学に入って、日本語専攻の私は、日本という国のことをたくさん知るようになりました。そして、ARASHI のことを初めて知って、好きになりました。ARASHI の 5 人はもちろん、それぞれ輝くところがありますけど、その中で、二宮和也のことが一番好きです。彼の顔や歌声や演技力だけでなく、人生に対する態度にも敬服します。実は誰よりも努力しているけど、何もないふりをしている姿はかっこいいです。アイドルとして、自分の能力を鍛えていて、いろいろな領域で魅力を見せます。彼はあるコンサートで、「今をどう

生きる」という問題について、「誰もが投げかけられるような質問ではないと思っていて、ずっと頑張ってきてる人じゃないと、この質問はなかなかできないのかな。」と答えました。毎日やっていること、そのこと自体は意味がないかもしれませんが、やり続けるということが大事だと、そういうふうに考えていると、彼が言いました。この言葉は今でも心の中で響いて、私の考えや行動に影響を与えています。私の考えでは、日本語を続けることも同じです。一日だけで日本語の練習するのは意味がないかもしれませんが、毎日やり続けると、日本で仕事したり、日本語教師になったりして、すごいことになります。だから、毎日日本語の知識を運用して、ちゃんとがんばってきました。二宮のおかげで、日本語を今まで続けたと言えます。

●日本語と未来を結ぶ

二宮さんのことばは今でも自分に影響を与えています。日本語を 6 年続けた私にとって、日本語はすでにこの一生、捨てられないものです。日本語を今まで続ける理由を深く考えて、今後もこの思いをもって、続けていきたいと思います。私は今日本語を学習するのではないが、毎日日本語を使って、研究したいものを探しています。二宮さんみたいに自分の領域で頂点に立つことは無理かもしれませんが、もし研究したいものを見つけたら、真剣に研究したいです。将来、私の研究を見る人に少しでも役に立ったら嬉しく思います。

２．対話（対話相手：費　暁東先生）

●費先生を選んだ理由

費先生は日本学研究センターに勤める講師で、主に教育心理学の研究をしています。最初私は、研究テーマの動機文だと思って書きました。私は教育心理学の知識を利用して、研究したいので、もし費先生から何かアドバイスをもらえばと思って、費先生を選んだのです。しかし、本当は自分が「今ここ」にいるためのテーマを考えるものだと、細川先生に言われました。書き直しをしているとき、やはり対話の相手を費先生にしようかと思いました。理由は 3 つあります。

①まず、費先生は日本語能力があることです。日本語で書いた動機文なので、日本語のできる人に読んでもらわなければならないのです。日本語のできない人を選んだら、レポートを作成するのにいろいろ苦労するかもしれません。

②費先生も日本語を選んで、今まで続けたのです。費先生の学習経験と私の学習経験と重なる部分があるので、私の考えをある程度理解できるかもしれません。

③学習経験には重なる部分はありますが、違う部分もあります。私より日本語を長い間続けた費先生との対話から、私の知らないことに気づくことができるかもしれません。

以上の理由を踏まえて、4 月 2 日の夜、費先生の研究室で、費先生と対話をしました。

●対話文

対話 1「勘」とは何か

費	最初の「日本語を選んだ理由」の中に、英語に関する部分で、「勘です。」のことをもっと詳しく説明してくれませんか。
王	はい。うーん、たとえば、英語の四択問題の場合、とれが正解か全然わからないけど、勘で、なんとなく正答できるのです。
費	そうですね。実は外国語学習において、「勘」はとても重要だと言われています。王さんは「勘」というものは、どうやってできると思いますか。
王	高校生のときは考えたことがないけど、今考えてみれば、もしかしたら、たくさん英語練習問題したからではないかと、私もわかりませんけど。
費	それは、たとえば、複数の場合、-es をつけるか-s をつけるかというようなたくさん練習して覚えた知識があるうえで正答したのか、それとも、本当に知識がないけど、読んでみて、「これが正解かもしれません」と思って、正答したのか…
王	どちらもあります。でも後の方が多いのかな。
費	「英語や欧米文化に興味がない」けど、英語にも「勘」があるのは簡単なことではないと思います。たしかに、練習は「勘」を育成するには効果があるかもしれません。「勘」は外国語学習にとって、どんな影響があると王さんは思いますか。そして、「勘」というのは生まれつきのものですか、それとも、練習してできるものですか。
王	そうですね…たぶん、たくさん練習してもできないかもしれません…なぜかというと、同級生と同じ量の練習していて…でも、私は日本語に「勘」がないと思います。
費	えっ、そうなんですか。どんな言語も、「勘」というのは通じると聞いたことがあります。たとえば、英語には「勘」があって、日本語学習にも韓国語学習にも通用すると。それに、第 1 段落の最後「言語を学ぶのはこんなに達成感がある」と書いてあるが、ここの「言語」というのは英語だけですか。
王	当時は英語だけを外国語として勉強しているから、外国語を学ぶのは達成感があると、思ったのです。日本語に勘がないというのは、大学の同級生に N1 練習問題を聞かれると、どうしてこれが正解なのか、理由がちゃんと説明できるからです。英語みたいに、わけがわからなくて正答したことがないです。
費	そうですか。私の大学時代に、単語も文法もめちゃくちゃだけど、ヒヤリングはちゃんとできる同じ日本語専攻の同級生は何人かいます。ごく稀な例ですけど、面白

	いですね。「勘」を科学的に研究するのも、ことばで詳しく説明するのも難しいですけど、やはり、それは学習者にとって重要だと思います。

対話をしながら考えたこと

最初は「勘」というものについて話し合いました。「勘」は生まれつきなのか、練習してできるのか、いまだに結論出していません。ここまでの対話から、「勘」＝生まれつきの才能＋積み重ねた知識、と私は考えています。なぜかというと、一定の知識の量（インプット）がないと、アウトプットはきっとできないからです。それに対し、生まれつきの才能がないと、いくらインプットされても、運用する能力がなく、アウトプットもできないでしょう。それは正しいかどうかわかりませんけど、個人的な意見です。

対話 2　日本語は一番だ

費	やはり、結局日本語を選んだのは、コナンの影響を受けたのですか。大学の志願を出すときはたとえば、英語か日本語か、あるいは韓国語か、比較しましたか。
王	そうですね、比較しました。中国の大学には英語を専攻と設置した学校が多すぎて、たとえ学生が卒業しても、競争力もないでしょう。それに英語や欧米文化にも興味がなかったです。韓国語にも興味がなかったです。「名探偵コナン」を見て、日本に興味を持ち始めたが、韓国ドラマもたくさん見たが、韓国に興味がわきませんでした。
費	そうすれば、コナンより、就職のほうは影響がもっと大きいではないですか。日本語を選んだ決め手は何ですか。
王	実は、学校より、専攻を優先したのです。4 年間の大学生活をできるだけ楽しく過ごしたいと思っていました。「名探偵コナン」を見て、日本に興味があるから、日本語を勉強するのも楽しいだろうと思いました。そして、日本語を専攻とするなら、大学生活も楽しいだろうと思いました。
費	なるほど。つまり、日本語に抵抗がなくて、日本語の位置は心の中でもともと高いんだ。文章によると、コナン君たちの「毎日楽しそうな様子」は実生活の中で、すごく普通の場面ですけど、具体的にその場面のどの部分に引かれたのでしょうか。
王	中国の小学生は午後も授業があって、宿題もたくさんやらなければならないでしょう。でも、コナン君たちは午後授業がなくて、自分の好きなことしてもいいです。私は「日本中の小学生は実生活の中で、みんな暇なのか」と、びっく

	りしました。
費	なるほど。日本の本当の様子もアニメと同じかどうかを考えたんだ。だから、本当の日本を知りたいと思って、日本語を選んだのですね。なら、この「楽しそうなようすでした」の後に、「実際の日本小学生の状況はそうなのかどうかを知りたい」などを入れた方がいいと思います。
王	そうですね。分かりました

対話をしながら考えたこと

日本語や英語や韓国語などと比べましたが、日本語は圧倒的に一番です。日本に興味があるなら、日本語を勉強して、日本のことをもっと知ることができるでしょう。もちろん、興味がないものを選択し、結局好きになるのも可能ですが、最初に自分の興味があるほうを選べ、大学生活を最初から楽しく過ごしたかったです。

対話 3　言語に対する好感を育てる

費	次は「日本語を続ける理由」の部分ですね。実はとても簡単なことだと思います。日本語を専攻として選んだ以上、途中でやめるのは不可能でしょう。でも、たしかに、好きなことが支えてくれるのも大事です。二宮君はアイドルとしていろいろな領域で活躍しているのも、彼のことばも二宮君個人的なものなので、二宮君から、何をもらいましたか。王さんは二宮君のことと日本語学習とどうやってつなげたのですか。
王	私は二宮さんの頑張っている姿がすきで、彼のような頑張り屋になりたいと思います。彼はアイドルとして、自分の専門領域に入り込んで、プロの頂点に立っています。私の専攻は日本語で、頂点に立つのは無理かもしれないけど、彼のように日本語の世界に入り込んで、全力を尽くしたいです。
費	さっきもいろいろ話し合いましたが、実は初めから、日本語に好感を持っていたことも重要です。もし初めから好きじゃないと、専攻を変えることもあります。この好感は、続けるうちに、自分の学習をプラスの方向に導いていると思います。
王	そうですね。でも、この「好感」というのは変えられるものでしょう。たとえば、最初は抵抗があって、だんだん「悪くもない」と感じてきて、結局好きになるケースもあります。それに対して、最初は好感を持ったが、だんだん「つまらない」と思ってきて、結局あきらめてしまうケースもあります。
費	王さんの考えでは、なぜ変わるのでしょう。

王	理由は様々です。たとえば、教師に関しては、教師の教授法は自分の学習観にあっているかどうか、教師との人間関係がいいかどうか、などがあって、言語自身に関しては、学習が困難になって、乗り越えられなくなって、学習意欲を失うなどの原因があります。
費	そういう時に、王さんみたいに二宮君のようなきっかけとか、エピソードとかあった方が学習にいいでしょう。学習者、あるいは教師はそういう時、どんな手段を使って、きっかけとかを作って解決すればいいでしょうか。
王	そうですね。もし教師が原因になる場合、学習者とコミュニケーションしてみたらどうですか。しかし、学習者自身が困難だと思う場合…
費	王さんは大学の時、そんなケースあるかどうかわかりませんが、まじめに勉強しないで、結局卒業するときの日本語レベルは二年生のレベルにも及ばない例はたくさんあります。専攻を変えていないけど、学習意欲がなくて、なかなか「日本語を続ける」とは言えません。
王	もしうまくいかなかったときに、教師あるいは学習者自身が何とかして、そのマイナスの状況を変えれば…
費	たしかに、言語学習において、ことばで表せないことがたくさんあります。ところで、ここに書いてある「日本語を続ける理由」の部分は、日本語を勉強しつづける理由ですか、それは今の状況と違うでしょう。今は日本語自体にそんなに努力していないで、日本語を使って研究しているでしょう。
王	でも、「日本語を使って研究する」のは「続ける」の一種ではないですか。
費	そうですけど、いまは「日本語の勉強」より「日本語の研究」でしょう。いま「日本語の研究を続ける」のも二宮君と関係があるのですか。今まで影響し続けるのですか。
王	はい、そうです。

対話をしながら考えたこと

対話しているうちに、私は大学時代の同級生のことを思い出しました。ある女の子が、勉強することが本当に苦手で、勉強以外の自分の好きなことを求めて、二年生の時大学をやめました。彼女がそれがいいと思ったら、問題ありません。しかし、そのままぶらぶらして大学生活を過ごしてしまった同級生も何人かいます。結局、彼らにとって、4 年間の大学生活は何なんでしょう。

対話 4　教育≠教授法

王	最初に書いた動機文の最後に、読解の研究がしたい理由もありましたけど、なかなか前の部分とのつながりが見えなくて、削除しました。心の中で、本当に前の部分との関係を見つけたいのですが…
費	そうですね。この中に、大学の志願を出すときのことを詳しく説明したが、院生試験の場合はどういう状況だったのですか。院生もある程度、「日本語を続ける」の一種でしょう。どうして院生試験を受けたのですか。
王	最初は書いていたのですが、書き直すとき、削除しました。日本語を勉強するなら、中国で一番いいところで勉強しないと悔しいという気持ちでした。そして、なぜ教育コースを選んだのもよくわかっています。大学生活は日本人の多い大連で過ごしました。3 年生の頃から、北京に来るまで、日本人に中国語を教えるアルバイトをずっとしていました。アルバイトをする動機は単純にお金を稼ぎたいだけですが、毎日授業しているうちに、私は自分の持つものをシェアすることが好きだと気づき始めました。将来、日本人に中国語を教える仕事をするのはもちろんいいですけど、中国にいる日本人はそんなに多くないし、中国語の習得経験がないから文法の詳しいところまでもよくわからないし、やはり中国で日本語を教える教師になりたいと思っていました。実際教育コースに入ってみたら、想像していたのとちょっと違う気がします。
費	何が違うのですか。
王	入る前は、教授法の勉強するのかなと思って…
費	教授法の授業はありますよ。実は、今王さんが勉強している心理学も、教授法も、言語学も、教育のためにあるのです。心理学は学習者中心で、教授法は方法論みたいなもので、言語学は言語そのものを中心とするのです。言語学の勉強が必要だと思います。なぜなら、言語の仕組みとかを理解して、学習者にある言語現象を説明するのに役に立つからです。心理学の勉強を通して、学習者の心理状況を知り、ある程度教授法の実施にも役に立つと思います。この 3 つの部分はつながっています。
王	そうですね。入る前はそこまで詳しく知らなかったです。それに、今は日本語教師になるのも難しそうで、絶対教師になるという気持ちも前よりそんなに強くないです。しかし、教育心理学の授業を受け、学習者の心理状況を知ることは意外とおもしろいと思ってきました。

対話をしながら考えたこと

費先生の話を聞いて、教育のことをもっと知るようになりました。教育コースに入る前

の考えはやはり浅かったです。学習者の心理状況を理解することも大事だと、改めて気づきました。それに、心理状況を知ることがおもしろいと思っているのは、もしかして、心理学に興味があるかもしれないと、今はそう思います。

対話 5「価値観」への再思考

王	私は毎日自分に「二宮さんの言ったようにやりなさい」と言いながら行動しているのではなく、落ち着いて考えてみたら、その「毎日やり続けることが大事」ということばは気づかないうちに、すでに毎日の生活の中に浸透しています。
費	ファンもさまざまですね。冷静的なファンだと、好きなアイドルをもっと知りたくて、ひいてアイドルがいる国のことに興味を持つのは、外国語の学習にも促進するでしょう。熱狂的なファンだと、理性や判断力も失い、自分の価値観を捨てて、そういうのはちょっと…それに、ARASHI の 5 人は本当に素晴らしくて、みんなに積極的な影響を与えています。
王	そうですね。自分の価値観を持つことは大事だと思います。先生、さっきの勘の話に戻りますけど、科学的には解明されていないのですか。
費	はい、ないです。勘というのはもともと理論上には解釈できないもので...言語適性テストというのがあって、それは第二次世界大戦時の米英国内では、短期間に外国語を習得できる人材を軍の要員として起用する必要性から、開発されたのです。そのテストを通して、学習者が言語学習に向いているかどうか、言語を身につけるのが早いかどうかは測定されて、ある程度「勘」と関係があるでしょう。
王	しかし、先生、疑問があります。このテスト問題は問題を作る人たちの価値観に影響されますよね。N1 の試験問題もそうですよね。
費	それは当然です。なんといっても、人が作り出した問題ですから。大規模の試験なら、試験が終わった後に、試験問題に対する分析が行われて、そして分析結果は次の試験に影響しているのです。もちろん、試験の前に、測定もあります。試験問題の妥当性が専門家たちに確認されてから、行われます。しかし、問題を出す人の価値観に影響されるのは避けがたいです。そういえば、価値観の問題というと、みんなはある問題について自分の意見を出してみたら、似ている意見と正反対の意見が出ることが多いですか。それとも、思考の深さが違うことが多いですか。

王	そうですね…
費	思考の深さが違い、基本的意見が似ているなら多いですけど、正反対の意見が出てくるのは少ないでしょう。この正反対の意見が価値観から受けた影響が大きいですか、それとも、個人的な経験から受けた影響が大きいですか。
王	価値観も個人的な経験から影響を受けているのではないでしょうか。
費	哲学になりますね。
王	今の情報社会で、毎日違う価値観と触れ合うとこができます。人はある問題に対して、一つの考えしか持ってないことは不可能でしょう。二人がある問題に対し、正反対の意見を出すのはやはり少ないでしょう。

対話をしながら考えたこと

細川先生の集中講義を受け、「価値観」のことをはじめて真剣に考えてみました。人は自分の価値観に応じて、自分の意見を出したり、自分の選択をしたりしています。自分と全く同じ価値観を持つ人はいないです。だから、他人が自分の言っていることを完全に理解するのも無理でしょう。しかし、他人が似ている価値観を持つのなら、ある程度理解できるのも可能です。実におもしろいです。

３．わたしの考え

費先生と対話ができ、本当にありがたいと思います。私は今まで気づいてない考えに気づくこともでき、とても有意義な１時間でした。

最初は一応動機文を書き終わったけど、動機文の中に、いくつかの気づいていなかった細かいところがあります。費先生と対話している途中、発見してきました。たとえば、最初に費先生に聞かれた「勘」のことです。正直に言って、「勘」というものは神秘的で、説明できないもので、今までまじめに考えたことがないです。他人とあまり「勘」について話し合ったりすることもないです。今回は費先生からヒントをもらい、自分なりの考えを簡単にまとめてみました。つまり、勘＝生まれつきのもの＋積み重ねた知識、のことです。未熟な考えですが、今はそう思います。

そのほかに、学習意欲の話題にも触れました。大学に入ると、意外とみんなは日本語に興味があるので、選んだわけではないと気づきました。仕事のために選んだならまだいいですが、本当はほかの専攻を選んだけど、結局点数が足りなくて落ちた学習者にとって、学習意欲を育てることはとても大事だと思います。日本語を例とするなら、日本社会や流行文化に目を移して見て、その中の面白いことを発見するのもたぶん効果があるだろうと、考えています。

話し合いながら、私はあることに気づきました。そのことは具体的な話題に関係がない

ですが、「対話」という活動に対する発見です。人と対話をすることは自分をどんどん掘り下げる過程です。対話相手の話から、ヒントをもらい、自分の中にあるもの（対話する前に考えたこともないものも）を思い出し、頭の中で整理してからことばでまた対話相手に伝えるのです。この過程を繰り返しながら、今まで出会ったことのない自分を発見していくことができます。対話が終わったら、その対話相手からもらったことばも、出てきた新たな考えも、自分の宝物として、新しい自分を支えてくれる知恵になります。

今回はこのテーマを考えて、今まで生きてきた自分を始めて分析してみました。人生の中でつながりがなさそうな二つの出来事も、実は見えないところでつながっていると、初めて気づきました。私にとって、今回の動機文の作成も対話も、今までの自分への再発見です今回の活動は、自分と日本語の関係を真剣に考え、未来の自分に示唆を与えます。つまり、今までの私はこれからの私は、つながっているのです。動機文を書かなかったら、費先生と対話しなかったら、私も昔のまま普通に生きられますけど、今回は動機文を作成し、また費先生と対話ができ、今まで見えてきた風景は一変しました。もし将来、予測できないことが起きたら、どうやって今までたどり着いたのをもう一度思い出して、自分の納得できるような選択をします。今までの自分がこれからの自分を支えていることを覚えて、人生を歩んでいます。

「今ここにいる私」の声を聞く

―「言語」を見つめながら歩いてきたこれまで、そして、これから―

北京日本学研究センター　言語コース
五藤　絵里加

1.「言語」を考えるおもしろさ　―私が言語学と出会うまで―

●言語への興味と自信

自分は「言語」が好きだとなんとなく気づきはじめたのは、高校生の頃だったように思う。大学受験に向けて中学生の頃よりもずっと本格的に英語を勉強するようになり、たくさんの単語や文法知識を身に付けていくことが楽しかったし、その中で自分なりに体系性を見つけていくことのおもしろさに気が付いた。また、国語の授業では鈴木孝夫の「ものとことば」という文章に出会ったことが印象的だ。「ものがまずあってことばがあるというのではなく、ことばが逆にものをあらしめている」という考え方は、当時の私にとっては衝撃的なものだったが、何度も読んで理解するとすっと腑に落ちるものがあり、そこではじめて言語学的な考えのおもしろさに気が付いた。学習した言語を使って文章を読解していくこともちろん好きだったが、それよりはむしろ言語そのものの知識を身に付けること、言語について考えることが好きだった。数学、理科、社会といった他の教科はただ受験のためという感じで、勉強していてもおもしろさは感じないし、自信もなかったが、英語や国語は勉強することそれ自体が楽しく、苦労した覚えはまったくない。言語に関することならまわりの友だちよりもずっと得意だし、より高いレベルで勝負することができるという自負があった。大学入試の小論文で翻訳に関する問題が出たときは、この問題なら必ず合格できると思ったのを覚えている。自分の興味の中心、また、自分が他人より秀でているものは何かと言えばそれは「言語」だという認識はこのころからずっとあった。

●文法研究との出会い

このように自分自身の体験から「言語に関する勉強はおもしろいもの」という考えがあったので、それを自分の生徒にも伝えてあげたいという思いから教師を目指すようになったし、そのような仕事は自分にぴったりだとも思った。そこで、教員免許取得を考え、文学部に入学した。はじめは英語の教員になろうかとも考えていた。英語こそ、私に文法のおもしろさを教えてくれたものであり、そのおもしろさをそのまま生徒に伝えられるような教師になりたいという考えがあったのである。しかし、当時の私には「英語科教員＝英米文学専修、国語科教員＝国文学専修」という考えがあり、大学で英米文学を学ぶこ

とにはあまり興味がなかったので、国文学専修を選択した。（いまになって思えば言語学専修でもよかったのだが、その当時は近代文学にも少し興味があったので、文学か言語学かと決めかね、どちらのゼミもある国文学専修を選んだのだ。）実際に国文学専修に入って、たくさんの先生の授業に出た。文学の授業では、話を聞いて知識を身に付ける分にはおもしろさもあったが、演習の授業に出ても議論に参加できないし、どのようなことを議論すべきなのかもよくわからず、ただそこに座っているだけという感じだった。一方で国語学の演習では、毎回の授業で読む論文や発表者の発言に対してたくさんの疑問や意見が生まれてなんだかムズムズする感覚があり、黙ってはいられないという気持ちで議論に積極的に参加することができた。そうする中でやはり私は文学ではなく言語学がやりたいのだという認識が改めてはっきりと強くなっていった。国語学の授業だけでなく、一般言語学の授業も自主的に履修した。言語に関することなら広くなんでも好きなので、音声学や統語論、認知意味論などの知識を身に付けることも非常に楽しかったのだが、「自分で考える」ことがおもしろかったのは、やはり国文学の文法の授業だった。論文に書かれている記述について「本当にそうだろうか？」と疑問に思う部分があれば、自分の中に持っている日本語を掘り起こして内省し、「それではもっとうまく説明するためにはどうすればよいか」と考える。私の説明で先生や他の学生が納得してくれればそれで満足感が得られたし、またそこからさらに疑問が生まれれば、「それならこれでどうだ」とまた他の例や説明を考える、そのプロセスが好きだった。いまでもそのようにして言語現象について考えることが私の基本的なスタンスであるように思うし、そのように考えるおもしろさが研究のモチベーションであるように思う。

●研究テーマの発見

「文法について考える」こと自体が好きなので、その材料としての研究テーマについては正直に言えばなんでもよかった。しかし、そんな中で出会ったのが「有対自動詞による無標識可能表現」だった。学部の卒業論文から修士論文まで一貫して据え続けたこの研究テーマに出会ったそもそもの出発点は、「ラレル文の多義性」のおもしろさに気づいたことだ。「走れる」「食べられる」といった動詞レル・ラレル形によるラレル文は〈受身〉〈可能〉〈自発〉〈尊敬〉といった多義を持つ。中学校の学校文法でもそのように習ったし、そのようなものなんだと思ってそれまで特に疑問を持つこともなかったのだが、可能表現に関する論文を読みながら、言語学的な視点をもって改めて考えたときに、このようにまったく違った多義をその中に含みこむラレル文がとてつもなく魅力的に思えたのだ。なぜこのような多義をもつのか、そもそもラレル文とはなんなのか、じっくりと考えてみたいと思うようになった。しかし、それでは卒業論文のテーマとして大きすぎるということもあり、関連しながらもう少し私の手に届きそうなテーマを探していた時に出会ったの

が「有対自動詞による無標識可能表現」だった。可能表現というと、ラレルやスルコトガデキルといった形式によって表されるものという認識があったが、たとえば「いくら押してもドアが開かない」や「このカバンにはたくさんものが入る」といった文では、無標識の有対自動詞文で同様の可能の意味を表すことができるということに気付いた。また、こうした表現に興味を持って考えていくうちに、このような表現は基本的に無意志自動詞によって表されるものであり、そのような無意志有対自動詞は〈自発〉〈可能〉(一部〈受身〉や〈尊敬〉も)といった多義の広がりを持つという点でラレル文に共通するということにも気付いた。先行研究を読んでもまだまだ納得できない部分が多くあり、じっくりと自分で考えるおもしろさを味わうには最適の材料になりそうだと考え、これを卒業論文のテーマとし、以来自分の興味の中心として研究しているのである。

2. 対話(対話相手：A さん)

●A さんを選んだ理由

A さんは、北京日本学研究センター教育コースの学生である。私のもともとの所属である神戸大学で留学していたということもあって、比較的付き合いも長く、私にとっては北京外国語大学において最も親しい友人の１人である。私について興味を持って話を聞いてくれる人というイメージもあった。また、私たちは日本語教育への興味という点で共通しているが、私は言語を通して教育に興味を持ち始めたのに対し、A さんは教育そのものに興味があったという点で異なっている。日本語教育について自分とは異なる考え方を持つ人、特に、言語にはもともとあまり興味がなかった人と対話してみたいという考えから、A さんを対話相手として選んだのである。

対話１　言語学習のモチベーション

A	「たくさんの単語や文法知識を身に付けていくことが楽しかった」とありますけど、その楽しさというのがよくわかりません。多くの学習者にとってはそのようなものを覚えるのは苦手だし、楽しさはあまり感じられないと思いますけど、五藤さんの場合はどうでしたか？
五藤	身に付けていくことそのものというよりも、それが使えるようになるというか、勉強したことが実際に試験に出てきたとき、わかるようになっている感覚がすきだったかもしれない。文法知識を覚える中で、ただ教えられるだけではなく、自分の中に文法ができてきて、こういう場合にはこういう表現だというのを理解して使っていくのがおもしろかったんだと思います。

A	じゃ、五藤さんは他の人よりは言語を学ぶ素質があると思いますか。
五藤	そうかなあという感じはありますね。A さんはどうですか？単語を覚えたりするのは全然楽しくなかったですか？
A	あまり苦手ではないですけど、楽しさはあまりなかったです。先生に言われて宿題として覚えた感じ。「使える」といっても、それは宿題やテストの中でのことじゃないですか？
五藤	たしかにそうなんですけど、たくさんの知識を身に付ける中で自分の中で英語の文法の規則、体系ができあがっていって、それを使えるようになるのが楽しいというか。
A	それがちょっとよくわからないんですけど(笑)私、日本語を学び始めて、文法についてはあまり興味がもてなかったんですよ。だってふつうのコミュニケーションの中では間違った文法を使っても、コミュニケーションができるんじゃないかと思うので。でも留学してみて、「正しい文」に興味を持つようになったんですよ。
五藤	それはどうしてですか？
A	研究室の他の人は言語学、教育文法について研究していて、私が間違えると指摘されることがあるんですよ(笑)それをきっかけに興味をもつようになりました。文法もおもしろいなと思うようになりましたよ。

対話をしながら考えたこと

ここで A さんと私の言語学習に対するモチベーションの違いが明らかになる。「自分の中に文法が身に付いていく楽しさ」は A さんにはあまりわからなかったようだ。逆にわたしには「間違った文法を使ってもコミュニケーションができる」という、言語学習に対するコミュニケーション先行の考え方はなかったので、A さんの考え方は新鮮だった。しかし、神戸大学での留学(私もいた国語学ゼミでの環境)を通して文法に興味をもつようになったという話も出てきて、こうした考え方の違いは必ずしも相容れないものではなく、環境の変化などを通して混ざり合っていくのではないかと感じた。

対話２　「教える」こと

A	五藤さんが文法に興味を持ち始めたのは英語からってことですよね？
五藤	そうですね。そうだと思います。高校のときから興味があって、先生になろう

	と思って、塾でも教えるようになって。塾では今まで習ってきたことを自分のものにして、それでまた生徒に教えるっていう。英語の文法については国語学ほど専門的な知識はないですけど、高校で習うような知識についてはどんどん考えるような機会があったかなと思います。
A	教師をめざすきっかけは「文法のおもしろさを生徒に伝えたい」という気持ちですよね？では塾ではどのように伝えましたか？
五藤	直接的に伝えようというよりは、自分が文法について考えるのが好きという気持ちが大きくて、楽しさを伝えようっていう工夫はあまりしてないですけど。塾で使っているテキストに書かれていることをそのまま覚えるだけでいいのかなという気持ちはあって、私はそうした知識の中から自分で体系性を作っていくと言うか、この文法事項とこの文法事項はこういうふうに関連してるとか、英語と日本語はこういうふうに対応してるとか、こういうふうに理解したらもっとわかりやくまとめられるんじゃないかっていうのが、自分はずっと受験までそうやって考えてきたので、それを教えることでちょっとでもヒントになればいいかなっていうか。それでちょっとでも「わかった」って顔をしてくれたら、それはうれしいかなと思います。
A	じゃあ授業で実際に使えるような場面というか、活動とかはありますか？
五藤	それはないですね。基本的に求められてるのは、受験とか、定期テストでいい点を取るということだと思います。90 分の授業の中で、自分で教えるというよりは、問題をやらせて、わからなければ教えるという感じです。自分で授業を作っていくという感じではないですけど、どうやって教えればわかりやすいかなあとか考えるのは好きなので、楽しくやってます。
A	塾では国語の授業もやってますか？
五藤	国語もありますけど、やっぱり文章の読解とかが多いですね。そういうのを指導するのも好きなんですけど、文法ってもうちょっと目に見えるというか、たくさんの人が使ってても共通する部分がある程度限られてくると思うんですけど、文章を読むっていうと、たとえば小説なんかはそれを読んでどう理解するかっていうのは人それぞれだと思うので、それを指導するっていうのがどういうことかあんまりちょっとわからない部分があって。難しい問題かなと思いますね。
A	教師をやってて楽しいと思いますよね？その楽しさはどこから？
五藤	やっぱり説明してわかってくれるのが楽しいっていう、はじめはそれが動機だ

	ったと思うんですけど、ずっと続けて生徒と接しているうちに、仲良くなって、お話をしたりするのも楽しいしっていう、人間的なところにも興味がないわけではないので。子どもはかわいいし。
A	その気持ちはわかりますけど、昨日お父さんに言われたの、電話で。「教えることは簡単でしょ？教師以外のこともやってみてください」って(笑)でもいい教師になることは難しいですよね。五藤さんがわかりやすいと思う教え方でも、学生によってひとりひとり感じ方は違うと思いますけど、それは考慮したことはありますか？
五藤	塾のアルバイトも 6 年やっているので、ずっと続けていく中で、この時期にはここまで教えていいとか、どこは教えるべきで、ここは教えなくてもいいとか、そういうことは考えるようになりました。
A	それは興味ありますね。では、どんな困難がありましたか？
五藤	やっぱり同じ説明をしても、「ああそうか」って興味をもって聞いてくれる生徒もいれば、あんまりよくわからないなみたいな生徒もいるし、そういうところが難しいですね。私はこういった文法がおもしろいと思って説明するけど、みんながそう思うわけではないので、それをどう乗り越えるかなっていうのはありますね。

対話をしながら考えたこと

ここではまず実際に塾で教える経験について触れながら、「文法への興味」と「教科としての指導」について考えた。文章の読解重視の国語は私の興味とややずれる部分がある。一方で塾での英語指導は、テストでの得点重視の指導方針や指導内容についていろんな疑問はあるものの、自分自身がまず考えて、それを生徒に伝え、わかってもらうという楽しさを得られるという点では私にとって満足できるものではないかと思った。また、塾で講師をやることの楽しさについて、はじめは「説明してわかってもらう」ことの楽しさだったのが、実際に講師を続ける中で、生徒と接して親しくなり、ある種の信頼関係を築いていくことにも楽しさを見出せるようになったと気づいた。

「文法のおもしろさを実際にどのように伝えましたか」という A さんの質問には、正直少しギクッとした。実際に「伝える」ためにどのような努力をしたかということはあまり思い浮かばなかったのである。自分がわかりやすいと思うこと、おもしろいと思うことを、他人にどう伝えるかという難しさについてもう少し考える必要がある。この後の対話でもその話題が出てくるが、「自分にとってのおもしろさ」がまず先行している私にとって、まだまだ考えが足りない点だと感じた。

対話３　文法研究のおもしろさ

A	言語学にもいろいろありますよね？その中で五藤さんが一番好きというか、興味があるところはなんですか？
五藤	「言語学」というものには広く全部興味はあって、言語学専修の授業にも出て、おもしろいなと思って興味はありましたけど、国語学の授業のときのように自分で知識を得て、そこからいろんなことを考えて自分で議論を展開していくっていう感覚はあまりなかったです。認知意味論にも結構興味はありましたけど、どうやって研究していくかということまではちょっと結びつかなかったですね。その先生のゼミのところで卒論を書いた友だちはアンケート調査をしたりしたみたいですけど、そういう調査よりは、自分で考えたいという気持ちが強かったのかもしれない。
A	自分で考えること。私には足りない。何を考えたらいいのか、どういうふうに考えたらいいのか、自分で考えて、最後にどのような結果になったらいいのか、わからないですね。
五藤	私もあまりよくわからないですけど(笑)文法については、自分で検討していって、自分で納得できればそれでいいのかなというか。でも自分で納得するだけでは研究にならないので、それをある程度みんなに納得してもらえるように工夫するというか。だからある程度共感性というか、そういう感覚をもって、こういうふうに説明すれば他の人も共感してくれるかな、納得してくれるかなと考えながらやってますけど。でも私もこれについてはちょっと問題があるんじゃないかと思ってて。もっと量的な調査とか、そういう研究の方法についてはあまり勉強してこなかったので、もうちょっとそういう方法も取り入れて客観的に研究していくことも必要じゃないかなと思ってますけど。かといってたとえば量的に調査するっていうことが自分のしたいことかというとそうでもないような気もして。以前国語学のある先生がおっしゃってたんですけど、「文法について考えるには、コーパスがなくても自分ひとりで天井を見つめながら考えればいい」って。私もそれにはすごく共感しました。論文や講義の中で先生のおっしゃってることはすごく難しいんですけど、「こういうことを考えるのが文法のおもしろさですよ」っていうのをいつも強調しておられて。私もそういうところにはすごく共感できる部分があります。私もたぶんそういう取り組み方がまず最初にあって、それが自分のモチベーションなのかなと思います。

対話をしながら考えたこと

ここで、自分にとっての言語学への興味はやはりまず「自分で考える」ことにあるのだと改めて考えた。「文法研究は、ひとりで天井を見つめていればできる」という先生の言葉は、北京に来てから、去年の秋ごろ伺ったものだったが、自分にとってとても共感できるものだったことを思い出した。その先生は私にとって指導教官のそのまた指導教官にあたる方だが、その方の文法研究に関する考え方にはとても共感できるし、私に大きな影響を与えていると感じる。

対話４　他の分野への興味

A	研究って、考えることが重要ですよね。
五藤	そうですね。こうやって大学院まで来て、研究のやり方はなんとなくわかってきたので、そうすると研究の対象は必ずしも言語でなくてもいいのかなと思い始めてますけど。最初はやっぱり言語から研究の世界に入って、授業もほとんど言語学に関するものばかりで、それが自分のやることっていう、それしか見えてなかったんですけど、いま留学でセンターに来て他の専門の授業にも出て、ちょっとなにかに興味を持ったときに、それについて考えるっていうのがどういうことか、自分の中にそのプロセスがあるので、今からもし他のことに興味があれば、必ずしも言語の研究じゃなくてもいいのかなっていう考えはありますね。

対話をしながら考えたこと

「自分で考える」ことについて、もともとは言語学、特に文法に関することがきっかけだったが、ある程度「考え方」を身に付けた今、他の分野のことでも興味を持って考え、研究していくことができるのではないかと考えるようになった。特に、北京での留学を通していろんなことに触れて興味を持つようになり、今後もそのように興味の対象が変化していく可能性を感じている。

対話５　「言語」について考えること

A	五藤さんの論文についてなんですけど、最初に読んだときは本当に難しかったですね。でも実は専門用語がたくさんあるだけで、五藤さんが言いたいことはよくわかると思いますね。
五藤	たしかにそうだと思います。言語って、みんなが共有してるものじゃないです

	か。日本語については母語話者でも非母語話者でも、「日本語」というものを共通して持っていれば、だれでも考えることができる。たしかに専門用語は難しいですけど、でもたとえばある表現について考えることは誰にでもできるんじゃないかなと思ってて、それも言語の研究が好きな原因のひとつじゃないかなと思います。

対話をしながら考えたこと

A さんの発言を通して、なぜ「言語」なのかということについて再び考えることになる。言語は多くの人が日常的に使って、共有しているものであって、それについては誰でも平等に、いつどこでも考えることができるのではないかという考えがある。そのような、考える材料としての身近さ、手軽さや、考えの共有しやすさが、私にとって言語が魅力的に思える原因のひとつかもしれない。

対話６　留学をきっかけとした価値観の変容

A	文法に興味がない人にどのように興味をもってもらいますか？
五藤	私がおもしろいと思うことを地道に伝えていくしかないですかね。あとは実際に文法について考えてもらって、その中でそのおもしろさに気づいてもらえたら、それもひとつの方法かなと思います。
A	(文法の勉強は)実はおもしろいですね。そんなにきつくはないです(笑)
五藤	そうですね。私は言語を通して文化を知りたいとかだれかと友だちになりたいというよりも、言語を勉強することそのものがおもしろいと思って言語を学習するので、逆に A さんのように言語そのものにはあまり興味がない人が言語を学習するときのモチベーションはどこにあるのかということにちょっと興味があります。
A	私は言語でコミュニケーションすることに興味があります。言語学については難しそうなのであまり興味はないですけど。私も外国語を勉強することがとても好きです。文化についても知りたいし。
五藤	私も日本にいるときには英語や中国語を勉強してもそれを実際に使うことはあまりなくて。英語に関しては映画を観たりとか、本を読んだりとか、ネットで調べ物をしたりとか、そういうところでは使いますけど、コミュニケーションの機会はほとんどなくて、でも中国に来てから中国語はもちろん、留学生の間なんかでは英語を使うこともあるし、コミュニケーションすることとか、コミ

	ュニケーションする中で言語を身に付けるおもしろさにも気づくことができてよかったなと思います。先学期、イタリア人留学生に中日関係についてインタビューを受ける機会があって、そもそも政治についての考えがしっかりしてないというのもありますけど、自分の考えをうまく英語で説明できなくて、少し悔しかった覚えがあります。そういう経験もあって、もともとは言語そのものにすごく興味があったんですけど、留学を通してコミュニケーションなど実際に言語を使うっていうところにも興味がわいてきたように思います。
A	私はもともと文法について鈍感だったんですけど、留学中コミュニケーションする中で、文法の正しさとか日本語らしさにも興味をもって、そういう表現を習いたいという気持ちがありました。
五藤	それはどうしてですか？やっぱりそういう正しさがあった方がコミュニケーションがとりやすいとか、そういうことですか？
A	そうですね。いまはネイティブスピーカーのレベルの日本語を学びたいので、もっと正しい文で話したいなと思います。だから言語学についてもだんだん興味を持つようになりました。でも論文を読むんじゃなくて、説明してくれればいいなと思いますけど。

対話をしながら考えたこと

対話をする中で、文法にはあまり興味がないと言っていたAさんが、文法はおもしろいと言ってくれるようになったのは今回得られた大きな収穫のひとつであった。この前の対話で、Aさんには留学を通してコミュニケーションから文法へと興味が移っていく変化があったという話が出たが、私の場合にも留学を通して言語そのものからそれを使ったコミュニケーションへという興味の変化があった。この点で２人の興味の変化はまったく逆方向で、対照的であるが、留学やこの対話活動そのものをきっかけとしてその興味が重なり合うようになっていくのがおもしろいと感じた。

対話７　なぜ教師を目指すのか

五藤	A さんの場合にはお母さんが学校の先生をやってらっしゃるじゃないですか。その環境は教育への関心になにか影響がありましたか。
A	母からの影響は大きいと思います。中学校のときには私の英語の授業を担当してくれて、厳しい先生でしたけど、授業はおもしろいし、学生たちが眠たく感じることはないと思いますよ。学生に大きな影響を与える人だと思います。私

	も母のような先生になりたいです。
五藤	私の場合には、「自分で考えて、それを共有する」っていうところに興味があって先生になりたいと思うようになったので、A さんの場合のお母さんのように、「こういう先生になりたい」という気持ちはまったくなかったです。「自分の知的好奇心を満たしてくれる人」という点では先生に興味がありましたけど、授業以外の場面で人間として興味を持てるような先生はいなかったです。国語の先生を目指していたときにはその点でまわりとギャップを感じていて、面接練習のとき、まわりの学生が「高校のときにこういう先生がいて、その先生はこんなふうにすばらしくて、その先生へのあこがれから教師をめざすようになった」と語る一方で、私にはそういう経験がまったくなかったので、自分は寂しい人間、冷たい人間なのかなと感じることもありました。そのときは、日本語教育なら文法とか、授業の内容そのものが重視されて、人間的な部分はそんなに求められないのではないかという考えがあったので、それで国語教育から日本語教育へ方向転換したのではないかという気もしますね。でもいま細川先生の授業に参加する中で、外国語教育でももっと人間的な部分が必要ではないかということに気づくようになって、その点で少し悩んでいます。
A	それは考えすぎだと思います。自己分析のやりすぎ！(笑)五藤さんはきっといい先生になると思いますよ。冷たくはないです。学生が先生に求めるものは違いますから。

対話をしながら考えたこと

「教師を目指す」ことについて、学部時代から感じていたまわりとのギャップについて A さんに告白した。このギャップについては、大学院で言語研究を進める中ですっかり忘れていたのだが、今回の集中講義に参加する中で再びぶつかった問題である。「考えすぎ」と言われてしまったので問題はあまり解決しなかったが、そういうふうに言ってもらえることでどこかほっとする気持ちもあった。今回の対話を通して言語そのものだけでなく、それを使ったコミュニケーションや、人間としての活動への興味の広がりにも気づくことができたので、この問題についてはこれからいくらでも考えが変わっていくし、考え直す機会があるのではないかと感じている。

●対話のまとめ

対話活動では、細かい表現や研究の内容までいろんなことを話していると、いつの間にか 2 時間以上の時間が経っていた。A さんとの対話のひとつひとつからもう一度自分

について見つめ直し、いろんなことを考えたので、そのすべてを紹介できないのは残念である。対話する中で、A さんと私はかなり対照的だということに改めて気づいた。日本語教育について、言語から入った私と教育から入った A さん。外国語学習について、言語そのものに関心がある私と、言語を使ってコミュニケーションすることに関心がある A さん。興味・関心のベクトルはもともとまったく逆方向だったようだが、特に留学という経験を大きな契機として、いまではお互いの興味が混ざり合い、重なる部分が多くなっているということは興味深い発見だった。

今回の動機文は主に私の研究テーマに至るまでのプロセスを書いたものなので、大学４年生、卒業論文のテーマを決めて取り組み始めるまでの私ということになる。その後も、今に至るまで、大学院への進学、北京外国語大学での日本語教育インターンシップ、そして現在の北京日本学研究センターでの留学と、私にとって重要な出来事がたくさんあった。動機文について A さんと対話する中で、「研究テーマに至るまでの私」だけでなく、その後の、「今ここにいる私」の考えについても話すことができ、その中で自分の価値観の変化がよく見えるようになったことが印象的である。

3. この活動を通して考えたこと

「自分のテーマについて考える」という今回の活動について、私はすでに修士論文の研究テーマが決まっており、日本学研究センターでの修士論文に関しては提出済みなので、最初は正直に言って何の意味があるのかよくわからなかった。最初は、いまからテーマを決めて論文を書き始める学生たちがうらやましく感じられた。もし私がこのように自分の動機を見つめ直した上でもう一度テーマを決め、論文を書き始めたなら、今よりずっといい論文を簡単に書くことができるだろうと思ったのである。しかし、すでに研究テーマを決めてしまった私にとっても、この活動に大きな意味があったことは間違いない。実は、ちょうどこの集中講義に参加している間に、指導教官から日本学術振興会の特別研究員に申請しないかというお話をいただいた。もし申請が通れば、博士課程に進学し、毎月お金をもらいながら研究ができる。とても魅力的な話のように思えた。しかし、申請するためには短期間で研究テーマを考えなければならない。そんなふうに無理やりひねり出した研究テーマについて 3 年間取り組むことができるのだろうか。あるいは取り組むことができ、論文というかたちにできたとして、その 3 年間は私にとってどんな意味があるのだろうか。そのように考え、結局申請することはやめた。研究テーマとか専攻とかいったものはある種ラベルのようなものである。もともとは自分で決めたはずなのに、いったん貼ってしまうとそれは「自分を決める」ものになってしまう。学位論文としてそのテーマについて取り組んでいるうちは、価値観や興味の変容が

あったとしてもそれについては目をつぶりながら、そのテーマこそが自分のやりたいことなのだと信じて取り組み続けなければならない。この活動を通して、改めてその苦しさに気が付いたような気がする。

もちろん研究は好きだ。言語についても、ずっと前から私の興味の中心を占め続けるものであるし、その位置はこの先も簡単に動くものではないだろうと感じる。それもこの活動を通して再び確認できたことのひとつである。しかし、今はそう信じて研究に没頭し続けるよりも、もう少しいろんな価値観に触れながら、その中でもう一度本当に自分のやりたいことを見つめ直してみる時間が必要だと思う。この活動を通して、自分の中の価値観の変容に気づくことができたし、また、それはこれからも変化していくという可能性を感じた。全体の流れの中に身を置きながら、「今ここにいる私」の声に耳を傾け、「やりたいことをやりたいようにやる」。これが、この活動を通して私がたどり着いた結論である。

日本語との出会いを振り返る

―日本語を続ける理由―

東北師範大学　　斉　瓊芝

１．日本語との出会い

●日本語を始めるきっかけ

私がなぜ日本語を始まるのか？なぜ日本語を続けたいのか？これは確かに今の私にとって大事なことです。初心を忘れずのとおり、日本語を始まる初心を忘れると、今まだ日本語を勉強している私自身にとって何も一切も無意味だと言えます。では、ここでもう一度私の初心を話しさせていただきたいと思います。

最初は、大学のために志望を出す時、全然日本語を習いたいという願いがないと言えます。第一志望は多分化学、数学（ちょっと忘れちゃった、ごめんなさい。）だと覚えています。なぜ第一志望は化学を決めるかというと、高校のときは理系で、また化学が得意で、試験のとき成績がよくて、女の子としてこんなものができてよく褒められて、時々優越感を抱くと言えるからです。しかし、最後は化学、数学でも全部落選しで、日本語を合格してしまいました、ということは全然思いつかないことだと言えます。今考えてみれば、もし思い通りに化学を合格して、無事で卒業すれば、将来どんな仕事をしようと、ということは完全に考えていないことは事実です。多分進学して研究者になる、あるいはそのまま卒業して教師になるかもしれません。先のことはさっぱり分かりませんということは当時の私の状態です。大学に入ると、みんな日本語を気楽に勉強している様子を見て、私だけ成績がよくない現実を直面しなければならない。今まで自分の中で出てこないコンプレックスが湧いてきて、本当に悔しいです。ですから、他の人は日本語ができれば、私は絶対できる、女の子として化学、数学ができれば、私は絶対この日本語ができると思って、こういう負けず嫌い気持ちが強くなりました。また、人として得意なことがあれば、学校にいても、社会に出ても、いつか役に立つかもしれません。私にとって、語学が苦手であれば、語学以外の文化でも興味づけると、どうですか？そうすると、文化に関する本を読み始めました。知らず知らずのうちに歴史事件に関するあらすじを整理することが好きになりました。どうしてその時、そのことが発生し得るのですか？というような問題に関心を持つようになりました。なぜかというと？一方、ある時期で、ある人物がある事件（今から見れば、事件と言う）がやって、この事件のあらすじばかりでなく、事件に出てくる主人公の性格も分かることもできます。ああ、この人が面白い、この人がダメだなどの嘆きをあげる時もあります。他方、歴史を鏡とするように、過去の歴史を教訓にして、将来

のことを予言することもできます。現在の社会に出てくることは昔もあったかもしれません、これは面白くないではないかと思います。こういうような面白い話しをほかの人に伝える、の感じが好きだと言えます。

●院生と研究テーマとの出会い

院生になると、さっき言ったとおり、語学が苦手ので、最初的に語学を避けて文化の方向を選びました。しかし、どんな具体的な研究を進めるべきなのか相変わらず分かりません、と迷いながら、指導先生が日本語教育をずっとやっていますから、先生の指導をもらいたいという気持を伝えて、雑誌「日本語」というテーマを初めて触れると言えます。最初は先生は「雑誌「日本語」はどうですか？」と聞いて、「全然知らない」と答えて、「これ読んでみて､興味あるかどうかは？」と先生から返事しました。もらった資料を読んで、また調べたら、知らないことがどんどん出てきて、この雑誌は 1941 年から 1945 年まで中国向けのために、教育家、又言語家たちがどうやって日本語を東亜において、更に世界において普及すればいいかの文章を集める雑誌です、ということは分かってきます。これに対して、私としてもっと知りたい気持が強くなって、このテーマを進めたいと先生に返事しました。しかも、このテーマについての研究はだいたい日本国内に集中して、中国に於ける研究は、私の調べたところにまだ見つけていない、という研究不足の状態で、自分なりの研究意欲がもっと高くなりました。また、現在において、例えば、初級の外国語学習者に対する文法教育は必要があるかどうかの問題は当時も話題です。これも面白いことです。ですから、このテーマを決めることにしました。

今まで私自身もなぜ日本語を続けるかという疑問を抱いていますが、以上のとおり自分自身の心理変化をちゃんと整理したことがないので、ずっと戸惑っています。振り返見れば、この道に第一歩を踏み出されば後悔することは絶対許されないという信念こそは私を支えて今日まで至っています。こう考えれば心がスッキリしました。

以上です。どうぞよろしくお願いします。

２. 対話（相手：うちの学校の同級生李さん）

●李さんを選んだ理由

李さんはうちの学校の言語学コースの学生で、学部から院生までずっと日本語に興味をもって、将来日本語教師に目指したいので、言語学の知識ばかりでなく、教育学の知識も勉強しています。去年私たちと一緒に授業を受ける時が多かったで、仲がいいです。時々生活でも、学習でも、アドバイスをくれる人ですから、話しがリズムに合うと考えています。今回の対話は、自分のテーマと動機と違う方向の人からの意見を聞きたいので、李さんを選びました。

次は動機文について李さんの問題をいくつかを記録しました。そのまま記録して、どうぞよろしくお願いします。

●対話文

対話①　いつか役に立つと思って日本語を続ける

李：「学校にいても、社会に出ても、いつか役に立つ」ということは、斉さんにとって、その時、日本語に興味を持っていることではなくて、ただ日本語が上手になったら、未来に役に立つという気持ちを抱えて、日本語を勉強して、頑張りましたか？

私：はい、そういえます。実は、私が最初的に日本語にあんまり興味を持っていません。日本語学部に入ったら、となりのドイツ学部の同級生、同じ高校で、また理科の出身で、わずか入学三ヶ月間で、ある試験を通して地質学部に転向しました。彼がその時も私を励んで、苦手ならやめましょうって。その時、私はいろんなことを考えて、高校卒業以来、ひたすら大学に合格した喜びを楽しんで、入学まであんまり勉強しないで、また、そもそも彼のような転向しなければならない決心がない、その試験の準備も何もないです。試験を受けると、絶対落ちる可能性が高いと、先のことが心細くて、最後に、日本語をやめなくて続きました。動機文に書いたように、仮にあの時、好きな化学を合格すれば、将来どんな仕事をしようと、相変わらず分かりません。多分進学して研究者になる、あるいはそのまま卒業して教師になるかもしれません。先のことはさっぱり分かりません。

李：確かにそうですね。私は今教師を目指したいといっても、最初は何をしようと、私も何も分かりません。ただ、今は、教師になると、いい就職先かもしれませんと考えています。

私：そうそう、私もそう思います。多分将来私も教師になるかもしれません。でも、専門の日本語をちゃんと勉強しないと、何も無駄だと言えます。だからそういう気持ちを持って日本語を頑張っています。

対話しながら考えたこと

李さんは早くに興味を見つけて、日本語教師になりたいという明確な目標がある学生です。私としては羨ましいです。これに対して、私は、将来の目標をなかなか定めていなくて、ずっと受動的な立場で、回り道してしまいます。これからちゃんと反省しなければならないです。やっぱり明確な目標がないとこのために頑張らなければならないモチベーションもない、これはつい最近気づいたことです。

対話②　なぜ文化を選ぶ？文学を選ばない？

李:「語学が苦手であれば､語学以外の文化でも興味づけると､どうですか？そうする　と、

文化に関する本を読み始めました。」という話しがあって、語学以外に、文学もありますね、どうして文学のこと考えずに、文化を選ぶか？

私：そうですか。私は一年生、二年生の時、基本的に部活またアルバイトをしたので、言語学の基礎はあんまりよくないに至ってしまいます。だから、言語学を最初的に避けました。文化と文学と、どっちしようかと迷いながら、前の学校に文学を担当する先生はずっと大江健三郎の研究をしていることを知って、研究価値がありますが、毎日大江の小説を読んで、私としてきっと耐えられなくて、つまらないと思います。

李：言語学コースの私は毎日やっていることも確かにつまらないですが、人は必ず好き嫌いによって選択を決めるわけではないです。

私：はい、そうです。実はうちのあの先生は毎日大江の研究を楽しんでいると見えます。

李：ううん、世の中には、派手なことはすべて地味なことから始めると言えます。

私：はい、勉強になりました。ええと、話が戻りますが、文化になると、歴史人物の隠れた事実を知ることができて、面白いと思います。例えば、徳川家康は我慢強い人と知ることができます。織田信長のとき、信長のもとに頼り、実力を隠れていました。信長の豊臣秀吉に殺さたら、家康が秀吉に頼って、我慢して、最後まで、秀吉より長生き、世界を制覇することになりました。

李：こう理解して確かに面白くなりますね。

私：だよね。本を読むとき、この人が面白い、あの人がダメだと時々嘆きます。また、現代に発生したことは昔からあったかもしれません、という面白い話しを伝えていることが好きです。また個人的な好き嫌いが戻りますね。

李：あ、そうですか。

対話しながら考えたこと

大学まで、学校でずっと学生で、何も心配しなくて、勉強しか考えていません。大学に入ると、ある意味で大人になると言えます。今考えると、私は将来のことを考えしないで、ただ考えしたくないです。派手なことはすべて地味なことからはじめる、とのように物は面白いかどうかをまず考えないで、地味なことからどうですか？と考え直しました。

対話③　文化に関心を持つのはいつのことですか？

李：あのう、斉さんは文化に関心を持つのは学部の時ですか？あるいは院生の時ですか？

私：学部の一年生、二年生のときはあんまり進学について考えていないのです。多分三年生の時、自分が専門の日本語だけでいい仕事を見つけるのは難しいかもしれませんと気づいています。でも、もう一つの専門を新たに勉強する勇気も、また時間も出さないので、院生の受験を受ける、どうですか？と思いながら、準備します。最後は、試験に合格しま

した。その時、一旦、院生の資格を取ったら、そんなに容易くやめるわけにはいかないです。

李：確かにね。

私：前の学校は、学士論文はだいたい五月まで提出してもいいですので、当時の私はもう院生の資格を取りました。私は将来、院生になると同じ方向を続けたいと考えて、またさっき言った通り、文学を担当する先生の研究はあんまり興味しないので、文化を決めました。これは学部生のことです。

李：分かりました。つまり先生の影響もあります、ある程度で。

私：はい、そうは言えます。今回、細川先生の授業で学部生の時、先生の影響で日本語を好きになって、また日本語を続けたい学生が何人かいますと知っています。知らず知らずのうちに、私もそういうタイプの学生ですね。不思議だよね。でも、私の場合はちょっとこれと違っています。自分のわがままで先生のことに興味がないので、選ばないのです。

李：こういうパタンもありますね。

話しながら考えたこと

李さんは自分が言語学に関心をもって、また将来、教師になりたいと考えて、興味があったからこそ研究したいタイプで、これに対して、私は毎回排除法で日本語を続けているタイプと言えます。ここで李さんとの違いが出てきます。多分将来李さんは先生になったら、私のような学生のために困りますに違います。

対話④　論文の内容と意義

李：この動機文を見て、斉さんの研究テーマは面白いと感じますが、具体的な内容がわかりませんから、もっと詳しい説明してくれませんか？またこのテーマの意義をもっと知りたいです。

私：はい。研究テーマの中身はこの間、細川先生の授業で誰かがもっと知りたいと言われて、今回の最後のバージョンで時間の関係で中身について少し加えていますが、これでもっと詳しい内容を加えなければならないです。すみませんでした。

李：はい、もっと加えれば…

私：では、ここで短く説明して、言った通りに、この雑誌は戦時のもので、誌名通り、現地に於ける教育者たちはよくここで投稿して、日本語教育を検討します、どうすれば日本語学習者を短期間で言語を身につけるか？即ちどうすれば日本語を普及しますか？私がやっている、あるいは指導先生がやらさせたいことは雑誌にでてくる日本語普及についての文章を選んで、これらに対して分類して、政策についてのもの、また実践についてのもの、これらを証拠として、戦時に於ける日本語教育に対する大きな影響を与えたことを

批判したいです。

李:そうなんですか。でも、この論文を書いて、いまの日本語教育に何か役に立ちますか？

私：研究意義のことですか？

李：はい、そうです。現在の日本語教育に対する研究意義。

私：これは私が次に言いたいことです。さっき言った通り、この雑誌が戦時の日本語教育に何か影響を与えることを証明したいです。現代の日本語教育に対する意義、あるいは示唆について、以前私も李さんと同じて指導先生に聞いたことがあります。論文を書くとき、ただ問題を提起して、解決法を提出しないパタンもあります。私たちのような修士の段階で、この雑誌が現在の日本語教育に対する示唆は論議しなくても、もっとレベルの高い人たちに任せていいです、って指導先生が話しています。

李：ああ、そうですか。分かりました。

話しながら考えたこと

実はここでもう一度論文の書き方を李さんに説明して、自分自身も書きたいものを整理しました。ここではまた修士論文の中身について触れて、私は多くの時は指導先生の言った通りに行動すると気づいて、あんまり李さんのような問題発見、興味関心の過程がないで、論文を書くとき自分が説得できませんことが少なくないです。これは注意したいことです。

３.私にとってこのテーマについて考えることの意味

久しぶりに李さんと話しできて、貴重な時間を空けてくれて本当にありがとうございます。とても懐かしい１時間だと思います。

今考えたら、元々日本語を目指さない私は学部生一年生から院生二年生までもう六年間日本語を続けていました。出会いから六年間において日本語をやめるチャンスが確かにありますが、なかなか日本語をやめないで今まで続けていたことは多分運命だと思います。学部生三年生、四年生のとき、将来いつか日本語が役に立つと考えて日本語を本気で頑張りました。あの時は、日本に関する文化が好きになって、特に日本に関する歴史が好きです。本を読んで、普段教科書に出てこないエピソードを探して、これらの面白い裏事実をもっと広く伝えるために、もっとたくさんの本を読まなければならない。実際、三日坊主の私として、面白くないとすぐに飽きます、また勉強ということは毎日面白いわけにはいかないですが、このように私は日本語を続けるということは確かに不思議だと思います。

今の修士論文は全体的に雑誌のことですが、正直言えば、歴史に関わる裏事実だと言えます。最初は指導先生からこのテーマをもらう時、この点に関係があると受けると考えて

います。この中にはつまらない時もありますが、だんだん「世の中には、派手なことはすべて地味なことから始まる」という言葉が分かりました。面白いエピソードを論文の形でもっと広く伝えることはこのようなことです、これはつい最近気づいたことです。

実は今の私にとって、院生卒業したらどんな仕事が出来るかについてまるで分かりません、専門に全然関係がない仕事をするかもしれませんが、いつか誰かが聞かれたら、あるいは自分が思い出したら、あの時日本語をやめないで本当に良かったなぁ、という話しが自信満々で話せると思います。

自分がなぜ日本語を続けるかについて、何度も聞きましたが、なかなかはっきり説明できません、また、この間皆さんからなぜ日本語を続けるかと聞かれて、最初は全然答えられません、いつの間にか一つ一つの問題に対して答えできます。この学年はだんだん論文を書き始めて、論文に関することを自分自身がはっきり説明しないと、ほかの人の納得も言うまでもない。これからこれについてもっと検討する必要があると思います。

私と「日本語」・「教師」を結ぶもの

―研究テーマにたどり着くまで、今とこれから―

北京日本学研究センター　教育コース

秦　小聡

１．日本人教師と中国人教師の連携―教師の役割観の視点から

●日本語との出会い

多分多くの中国人日本語専攻学習者と同じように、私も最初には日本語を第一志望として選んだわけではなく、他の専門には入れなかったので、日本語学科に入ったのである。しかし、一年生の後期、他の専門に転換する機会があったものの、結局他の専門に行かず日本語学科で日本語を勉強続けてきた。それはなぜかというと、やはり日本語と最初に触れた時に、その時の日本人の先生が大きな影響を与えたのだ。

中村先生という日本人の先生は私が一年生の時から教えてくれて、日本語の基礎知識だけでなく、日本の文化、若者事情、日本の職場についての事情を色々と教えてくれた。授業での付き合いだけでなく、授業外でも先生は積極的に私学生たちを食事に誘ったり、カラオケーに誘ったりしてくれたので、先生と仲良くしていた。そのきっかけに、日本語という専門にもだんだん好感を持つようになった。日本人の先生との付き合いが多くなれば多くほど、日本語の聴解や口語などの総合的な練習にもなるので、その時日本語がどんどん上手になってきたような気がした。日本語を上手になったこともまたいろんなチャンスをもたらすことができ、日本語スピーチコンテスト、日本語作文大会や日本語カラオケー大会などにも色々と先生の指導のもとで参加し、割と良い成績を収めた。このように楽しんで日本語勉強してきたことはますます私の日本語に対する興味を上げたことも私が大学院に進学する理由の一つにと言えるだろう。

日本語の学習の面において中村先生が私に与えた影響は確かに大きいだが、もっと私を影響したのはやはり先生の人格的魅力だった。結婚もせず日本語教育の仕事に専念する振りや中国人と中国文化に愛する優しさには感心した。将来、私もそういう人間になりたいとその時から決心した。

●日本語教育との出会い

大学四年生の時、学校から推薦入学の機会をもらい、日本学研究センターに進学することができた。日本学研究センターと言っているものの、またセンターの中には六つの違う分野も分けられていることで、大学院生としてはその中の一つを選ばなくてはいけないという。社会、経済、言語、教育、文化、社会の六つの中で教育を選んだのはやはりその

時は中村先生みたいな日本語の先生になりたかっただろう。日本語の先生になったら、自分が長年にわたって学んだ日本語の知識だけでなく、人生についてのいろんなものも学生に伝えられ、そういう分かち合いと受け継ぎのようなものが好きだったかもしれない。そういう歩みで今まで日本語勉強の道を続けてきたのだ。

●日本人教師と中国人教師との連携への関心

今は、「教師の役割観の視点からみる中国の大学の日本語学科における日本人教師と中国人教師の連携」というテーマについて研究したいが、ここでこの研究の動機について報告する。

最初は前学期のある授業で一緒に受講した日本人の留学生（以下はA さんと表記する）からの話しにヒントを得た。A さんは過去、中国で日本語教師として働いた経験がある。彼の話によると、「その時働いていた大学では中国人教師と日本人教師との役割分担が曖昧で、われわれ日本人教師が中国人教師と比べ何の特殊な役が立てるか良く分からなかったです。」という意見があった。

その後もまたA さんにその意見についての具体的な話を聞いた。A さんは 2012 年 9 月から 2015 年 7 月までアモイにある大学で日本人教師として働いた。その大学の日本語学科にはクラスが四つあり、各クラスは別々の中国人の先生が担当し、A さんはその中の三つのクラスの先生も担当した。一クラスは 25 人くらいだった。その時は中国人教師と日本人教師と共に「総合日語」というテキストのもとで授業を行い、中国人の先生は主に文法の解説とそのパターン練習を学生にやらせ、日本人の先生はテキストの中にある会話とインフォメーションギャップ会話練習の部分を担当した。しかし、A さんは三つのクラスでほぼ同じ授業をやったが、授業の効果は差が生じたように思ったそうだ。中には日本語能力の上達が早いクラスもあれば、上達が遅いクラスもあったという。A さんはその後、各クラスへ見学に行き、見学の結果として、上達の遅いクラスで、中国人の先生は意外に授業で学生に会話の練習を多くにやらせたように感じたそうだ。

A さんの話によると、それはいわゆる、限られた時間内で中国人の先生が得意な文法と単語解説の時間が少なく、そのため、そのクラスでは日本人教師と中国人教師は授業の重なった部分があり、学生に一番効率的な授業法をさせなかったように思ったそうだ。また、A さんの考えでは、日本人教師と中国人教師と比べ、日本人教師は会話と発音の矯正に得意で、中国人教師は単語と文法解説に優れていると思い、各自の優勢を果たした役割分担は学生に一番いい授業法ではないかと思っている。よって、日本人教師と中国人教師との明確の役割分担は日本語の教学への大切さを感じさせた。

また、私自身の経験から見れば、日本人教師と中国人教師との不明確の役割分担で私を度惑わせることもあった。大学三年生の後半期、日本人の先生が担当した精読の授業に受

講したことがある。その一学期で先生は一つの文章しか授業でやらなく、精読なので、先生からの一方的な話が多く、先生と学生との交流も少なかった。その精読の授業は日本人教師の優勢を果たしなかった気がした。確かに、一学期で一つの文章しかやらなかったのは事実だが、それはいいか悪いかは人によって意見も違ってくるだろう。まさに細川先生が授業でおっしゃったように、それについての評価は人の授業観と学習観によるものだ。一学期で一つの文章を授業でやるのは確かに深く勉強することができるのだが、しかし、私自身の学習観から見れば、一つのことにそんなに深く掘ることよりも、むしろその有限の時間を使って他の知識でも学んだ方がいいではないかと思う。

そして、私自身の授業観についてもそうだが、出来るだけ限られた時間内でもっと幅広く多くの情報を学生に伝え、学生の視野を広げさせることが重要だと考える。それはただ私自身の考えだが、又他の人も違う考え方を持つだろう。勿論、その学習観と授業観については、どちらがいいか悪いかと言うことは全くないと私も思う。たくさんの人の違う意見を聞いた上で、そのことについて改めて見直すことも大切だろう。

その他、周りの中国人教師からは「日本人教師は彼らならでは教えられるものを十分に学生に身に付けさせることができず、教学効果が良くないです。」という文句もあった。

現在、中日両国の経済、貿易、文化交流においての迅速の発展に従い、中国の日本語教育は全盛期に迎えることになった。多くの大学は日本語学科を設置し、学生により良い日本語の習得環境を作り、日本語の教学水準を高めるために日本人日本語教師を引き入れようになった。2012 年に、日本人日本語教師を 2372 人引き入れ、日本語教師数の 14%を占め、中国の日本語教育で重要な役割を果たしていると言えるだろう。従い、同じく学生に日本語を教える日本人教師と中国人教師との連携は必要なこととなる。また、日本人教師と中国人教師との良い連携はより良い教学効果を導き、良くない連携は教学効果の低下を招くことも考え得るだろう。よって、日本人教師は中国人教師と良い連携を取ることは日本人教師の活用にも欠かせないものと思われる。

しかしながら、前言及した周りの経験から見れば、現実には日本人教師と中国人教師との連携は理想的にできていないようである。社会体制そのものに翻弄され、なんとなく日本語教師になった中国人教師と、日本で教授法を学び、日本語教育を志してきた日本人教師との間には、教育理念にも教授法にも大きな差がある。日本人教師は正しい日本語のモデルとして期待され、その結果、本人の理念や資質とは無関係に、会話練習や文法チェックを期待される状況もあり、中国人教師との間には教育の連携が生まれにくく、教育内容にも差が発生している（大野、2007)。岡本（2008）は母語話者と非母語話者教員の対等な関係を強調する中で、教育環境に相応しい教育方法論、それぞれの教師の特徴を生かした実践への再考を促している。

だから、日本人教師と中国人教師との自分の教師の役割観を分かった上で、また日本人教師と中国人教師との相互的な求めるところを調べたいと思う。具体的には、一つ目は日本人教師自身の役割観と中国人教師が日本人教師に求める役割、二つ目は中国人教師自身の役割観と日本人教師が中国人教師に求める役割ということ。その二つのことが分かった上で、日本人教師と中国人教師との自分自身の役割の認識と相手からの期待する役割のずれがわかってくると期待する。さらに、そのずれをできる限りで埋めれば、日本人教師と中国人教師との間にもっと良い連携が出来るのではないかと思う。

２.対話（対話相手：西村秀樹　北京外国語大学日本語学科　日本語言語コース　Ｍ２）

●西村さんを選んだ理由

研究動機文の中にも書いてあるように、ある授業で西村さんからの「中国人教師と日本人教師との役割分担が曖昧で、われわれ日本人教師が中国人教師と比べ何の特殊な役が立てるか良く分からなかったです。」という話を聞き、日本人教師と中国人教師の役割分担に興味を持ち始めたという。その後、西村さんにもっと具体的な話を聞きたく、西村さんを対話対象に選んだのだ。

●対話文

対話１　「先生が学習者に与えた影響はどういうものか」
秦「周りの日本語専門の大学院生により、今まで日本語の学習を続けてきたのがやはり学部生の時の日本人の先生からの影響が大きいという話はしょっちゅう聞かれています。私自身の経験もそうなんですが、やはり日本人の先生は初心者の日本語学習者に影響が大きいということについて西村さんはどういうお考えでしょうか。」 **西村**「先生は学生の勉強に確かに重要な影響を与えていると言えるが、最終的にどんな学習効果が出てくるかがやはり学生と先生との双方に関係がある。先生は優秀な子をほっといても自然と上手になる、逆にそうじゃない子をどうするかは、先生の腕の見せ所、やりがいのあるところと僕は前から思ってた。僕は中国に来たばかりの時、本当に日本語しか話せなかったから、勉強に対して熱心じゃない子に日本語で話しかけても全然わかってもらえないので、授業で一応中国語を交えながらなんとか交流できるようにする。食事に行ったり、遊びに行ったりとかするんだけど。授業中にも、寝てたら後で苦労するよ、後々社会に出てたら苦労するよ、ガームをやってても楽しいのも今だけだから、なんとか話を通じて、改心させよう、考えを変えてもらおうと思うんだけ

ど。やっぱり伝わりにくい。だから、自分がまずは中国語を勉強しなといけないよなぁと思った」

秦「ですよね。でも、根本的な問題点はやはり西村さんの中国語にあるのではないと私は思います。もしかすれば西村さんは学生の日本語学習へのモチベーションを上げるために、学生と一緒に食事に行ったり遊んだりしましたが。日本語学習に対して学習者自らの動機があることこそ学習というものが成り立つのではないかと私は考えます。勿論、日本語の学習ということのみならず、どんなことにっとてもやり手のモチベーションはすごく大切だと思います。」

西村「そうですね。やっぱり先生と交流したい子ってもともと日本語に興味があった方が多いんだよね。そうじゃない子は、私が誘ってもなかなか来てくれなかったりもするし、引っ込み思案というか、上手な子と一緒だと恥ずかしいというか。上手な子がいなかったら、あんまり上手じゃない子の中にはなんとか話そうする子もいれば、結局話さなかった子もいました。」

秦「私も確かにそういう感じがありました。私の大学時代には日本人の先生とよく一緒に遊んだり、ご飯を食べたりすることが多かったんです。先生との交流のチャンスが多く、知らず知らずのうちに日本語がだんだん上達したような感じがしました。やはり先生と積極的に交流し、先生と仲良く付き合うことは学習にも役に立つと思います。」

対話をしながら考えたこと

私自身の学習経験から見れば、先生は私今まで歩んできた成長の道で大変重要な存在だった。もしその先生が好きになったら、またその先生が担当する科目にも関心を持ち、勉強したくなる。そのことについて西村さんの意見を聞いたら、先生がそれぞれの学生の人生にどんな役が立てるかは先生一人に関係するものではなく、それは学生個人の反応にもよるのではないかと感じた。だから、この世の中に存在しうる何でもかんでもの現象は一つの要因から成り立っているわけにはならず、必ず双方的、或いは多方面の要因で成立している。

対話２「授業に対する評価の基準はどこにあるか」

秦「実は前回の授業で、私の大学三年生の精読の授業についての話がありましたが、ある日本人の先生は一学期をかけて、一つの文章しか授業で説明しなかったということについて西村さんはどう考えますか。」

西村「人それぞれっていうのもあるし、やっぱり授業を行う上で大切なのは授業にあったものをすることだと思うが。学生のニーズも大切だし、その授業で何を目標としてる

のかによって、授業の内容も変わってくると思いますけど。先生からそういう説明がなかったのか。授業の内容とか、目標とか？」

秦「いいえ、なかったんですが。」

西村「私は高級日語という授業を担当したことがないんですが、詳しいこともわからないですが。」

秦「実は大学時代が受けた日本人の先生の授業には迷っちゃったところが多かったんです。多分それは私個人的な考えだけじゃなく、当時の周りのクラスメートからこういう声も時々あったんですが。中国の教育における競争が激しいので、私たちが大学まで受けた授業は殆ど詰め込み式の授業が多かったです。先生は限られている時間内でできるだけ多くの知識を私たちに伝え、知識的に充実な授業を行いました。といか、あまり授業内容と関係ない話をしなかったです。大学に入って、中国人の先生も同じくそいう授業スタイルを続けていましたが、日本人の先生の授業スタイルはちょっと違うように思いました。日本人の先生の授業ではよく授業や教材内容と関係ない話もよく出ていますので、西村さんはそれについてどう思いますか。」

西村「実は授業と関係ない話というものの、もし日本語学習の低い段階ではそれも会話の練習になると思いますが。やはり授業である上で、授業の話をした方がいいではないかと、関係のない話は授業外でした方がいいと思いますが。前私がいたその大学は五人の日本人の先生はいました。中には、一人の先生は大阪大学出身の先生でした。そして、当時働いてたその大学はあんまりいい大学ではないので、日本語学科の中で真面目な子もいれば、全然そうじゃない子もいる。やっぱりその先生が生活して来た環境と学生たちとは全然違うから、理解しかねるところも少なくなかった。大学はやはり勉強しにくる場所だとその先生が思ってて。」

秦「そうですか。いわゆる、その先生と学生との間には、自然にギャップが存在していることですよね。」

西村「高級日語もやっぱり上手な子もいれば、そうじゃない子もいるから、そうじゃない子に対して、高級日語のレベルに達していないのに、授業をしてもしようがないから、ちょっと授業と関係ない話をしてたというのもあるらしいけど。真面目な子たちからしたら、やはり授業と関係ない話が多くなると、試験の時に結局教科書の内容をするから、大変だと思っています。私がいるその大学も当時三つのクラスがありまして、学生からしたら、他のクラスがどんどん進んでいるのに、自分のクラスはちょっとふざけた話をしてるから、試験の時は自分で勉強しなくちゃいけないという文句もあった。」

秦「実は今は教材なしで授業を行うと主張している先生もいるんですが、教材に沿った

授業と教材に沿っていなく、ちょっと脱出している授業についてはどう思いますか。」

西村「シラバスに捕らわれすぎるのもどうなるかなっていうものあるけど、ただ、初級とか中級は教科書に沿った方が文法なり、単語なりあんまり漏れがなく教えられる。だから、初級、中級は教科書に合った方が教えやすいのかというのもあるけど。」

秦「そうですね、やはり高級になると、教科書を元で教えなくても、ただ学生の状況次第に授業を進めても考えられますよね。今考えたら、私のその精読の先生もその形で授業を行った理由が先生なりにあるかもしれません。結果として、今私が日本語を話せることも先生のおかげだとありがたく思います。また精読の授業の話に戻りますが、学習者のレベルによって、学習者自身の学習観も変わると思います。ですので、先生の授業観と学習者の学習感によって、ある授業に対する評価も変わってくると思いますね。」

西村「そうですね。もし、事前に先生が自分の意図を説明してれば、その差が埋められるかなと思いますけどね。例えば、今学期この授業の目的はこうで、こういう風に授業をやって行きますよ。」

秦「そうですね。事前に学生に自分の理念や計画を知らせば、学生と先生との間の不理解が埋められるかもしれないですよね。」

対話をしながら考えたこと

授業というものに対する印象は従来、先生が主導権を持つということが多かったのだが、今の時代ではどんどん変えていくような気がした。今回細川先生の授業もそうだが、授業の進め方、授業内容とかは先生が決めたものではなく、教室の主体である学生にも授業への参画という主導権を与え、先生と学生とともに授業活動を行なっていく。よって、教室という場は知識の伝達の場だけでなく、思考の場、交流の場、活動の場にもなれる。このように教室を柔らかくすることはまた学生の思考力を広く、深くさせるではないかと思う。

対話３「教師へのアンケートはどういう役割があるか」

西村「大学では、先生に対する調査とか、アンケートとかは確かにありますよね。」

秦「でも、そういうアンケートについて皆はほぼいい評価を書き込みますが、あまり本音が出していないと思います。」

西村「確かに、結構本音が書いてくれてるかなと思ってて、ある子に聞いたら本当のこと書いてるかどうかわかりませんよという話もあったんです。僕もある一回の学期末、先生への評価のアンケートがネット上で見れるようになってるんだけど、言うこと全体的には評価の悪い先生じゃなかったんだけど、「先生のやり方が違うと思います。」と

いうコメントも出ていまして、せっかく違うと思うならどういう考えで違うと思うんですかともっと具体的に書いてくれよと一回がありましたけどね。」

秦「そうですよ。」

西村「実は、日本人の先生で、全くそれを見ないって人もいたけどね。心が揺さぶられたら困るから、全く学生からのコメントを見ない先生もいます。」

対話をしながら考えたこと

実は去年冬休みに、私は新東方で一ヶ月間日本語教師として働いたことがあり、授業が終わったところ学生からのコメントももらった。そのコメントの中で、大体は良いコメントだったが、「先生の授業はあまりロジックではなかった」というコメントもあった。それがあったものの、もっと詳しい内容を書いてくれなかった。企業の規制もあるものなので、もっと詳しくそれを書いた学生に聞くこともできなく、本当に悔しかった。学生からのコメントがあることで、それをちゃんと利用して教師自身の鏡とする価値もあるのではないかと考えられる。

対話４「研究テーマと人生のテーマの関連付け」

秦「私は今日本語教育を勉強しているものの、実は自分はあまり日本語教師という職業には向いていない感じがしました。」

西村「僕の場合は、自分で教師に向いてないなと思うけど、実際に授業をする時色々工夫を考えるのが楽しい。」

秦「もし将来は日本語教師にならなかったら、今の研究テーマは意味があるかなと迷いますが。」

西村「関連づけることはできるでしょう。日本人教師と中国人教師との連携っていうことで、もし実際に教師にならなくても、日系企業で働いても日本人社員と中国人社員との連携みたいな、何かしらか関連づけることも考えられると思います。」

対話をしながら考えたこと

生涯のテーマを考えていくということはもしかすればこのテーマを少しも変えることなく一生をかけてやり抜くのではなく、ただ次の人生の段階へ進むためのテーマを見つけることだと私は思う。今のこのテーマが分かった上で、次の人生へと順調に進められ、また人生の次の段階ではそのテーマを受け継いだ新しいテーマが出てくるだろう。

対話５「ある授業法の導入には」

西村「僕は先生になる前に、日本で日本語教師養成講座に通ってたんだけど。そこでは、直接法という日本語を使って日本語を説明する、中国語を使わない方法を日本で勉強してくるんだけど。母語話者のような感覚で勉強してほしいっていうのが直接法にあるんだけど、それで、中国人に日本語を教える時に、色々と直接法で教えていたんだけど、なかなか中国人の子は納得してくれなくて、すぐ辞書に頼る。」

秦「辞書に頼ることは多分学習者にとっては普通だと思います。もし、先生が言っていることがわからなかったら、辞書も調べないと全部わからなくなるんじゃないですか。」

西村「いや、辞書が全てをカバーできるとは限らない。やっぱり日本語の感覚を学生に身につけて欲しい。日本語の「りんご」と中国語の「苹果」は必ずしも同じことを指しているとは限らない。大体は同じですが、全く同じものでもないと思います。直接法を信じている先生からは、感覚で覚えて欲しいっていうのがあったんだけど、何も考えないで、すぐに辞書で「りんご」という単語の対応する中国語訳を探す学生がよくいた。やはり学生は直接法を納得してくれないという印象がきた時がありました。」

秦「実は、私もある文章の中でこういう話を見ました。その文章は中国人が英語を勉強することを例としているんですが、作者の考えによると、私たち中国人学習者が英語の単語を覚える時、英語の単語とそれに対応する中国語の意味を合わせて暗唱することが多いんです。しかし、考えてみれば、英語母語話者は中国語がわからないはずです。それにも関わらず、英語母語話者と中国人の英語学習者が最終的にある英語の単語を通じて同じものを認識することができます。それはいわゆる、英語の単語を覚える時には必ずその中国語を合わせて覚えなくてもいいということで、ただその単語が指しているものを対応できればということです。それはまさに西村さんがおっしゃった直接法の似てるような方法ですが、母語話者感覚で言語を勉強するということはその文章で提示してくれました。」

西村「日本人も中国人もやっぱり中学校、高校での勉強習慣が作られてるから、どうしても辞書を調べたくなるよね。」

対話をしながら考えたこと

前学期の費先生の教育心理学の授業でも外国語の学習法について色々と勉強したが、やはり場面付き、イメージ付きの単語や文法の教え方が一番効率的だと言われている。我々中国人学習者は確かに小さい頃から言語学習の習慣が作られていたが、それは全く変えられないことでもないと思う。教育現場における教師の指導法も学習者の学習効果に大きな影響を与えると期待される。

対話６「日本語学科が求める人材像」
西村「僕はここに来てから多く思ったのは日本語学科の子って日本語の勉強が中心でやっている。他の学部と違う感じがしました。経済学部は経済学を勉強しますが、日本語学科は日本語学を勉強するのではなく、日本語というものを勉強する。いわゆる、経済学部は経済学を勉強するところに対して、日本語学部は日本語学を勉強するところではない。だから、卒業論文を書くときは大変なんだよね。「はい、論文書いて」って四年生になると言われるけど、書く学問の基礎がないから、何に興味があるかって言われても困るし。興味があるものがあっても、その研究分野がどういう研究が行われてるか、どういう方法が使われてるか全然知らないから。」 **秦**「それは問題なんですよ。実は今中国におけるこの外国語人材育成の基準もどんどん全人的な人材育成に変えていくんですが、外国語の勉強ということは語学の習得だけでなく、異文化交流能力とか、国際視野とかを学生に習得させるようになっていくそうです。」 **西村**「そうですね。もうちょっと三年生の時に論文についての練習とかをさせた方がいいんじゃないか。」
対話をしながら考えたこと
前学期林洪先生の授業でそういう話もあったが、確かに外国語学院の学生は外国語を勉強するだけで、社会に出ても何の競争力もない人になる。ある交流の道具である外国語を勉強するだけでなく、その言語を通じて、言語の裏手にある文化、社会、経済などが学習の目的にあるはずではないかと思われる。もし、そういう教育方針の元で外国語教育を改新すれば、もっと総合能力の高い外国語人材が育成できるのではなかろうか。

３.私にとってこのテーマとその変容について考えることの意味

今回の対話活動を通じて、私を研究テーマについてもっと深く考えさせられることができた気がした。研究というものは研究ということに止まってはいいけなく、必ず何らかの実際の問題解決に繋ぐことと信じる。まず、自分が解決したい問題を見つけ、その後研究を通して問題解決に導くのだ。

日本語を勉強してから今まで５年目になり、これからも日本語、日本というものを研究し続けるだろう。この時間を人生の遥かな川の流れに置いても、無視できなく長い時間と言えるだろう。今、一人の日本語が話せる人間、日本の事情が普通の人より分かる人間としていることは自分自身の努力だけでなく、周りのいろんな方々に支えてきたものだと私はずっと信じている。だから、今まで教わったこのオモイ知識を何らかの形で後の人に

受け継ぐこと、この社会に自分の力を尽くして貢献することはとても大事だと思う。教育を勉強しているとはいえ、必ずしも教師にならないとは全くなく、自分が一番輝かせると思うところで働ければいいと今の私はそう考える。恐らくこういう自分が持った知識を後の人に受け継いでくれる気持ちで教師になりたかったかなとちょっと気がついたような気がした。

今中国の日本語教育現場を見れば分かるように、大学の日本語教師のチームは日本人教師と中国人教師と、このどちらも欠かせない形で成り立っている。母語話者教師と非母語話者教師この二つの天然的に存在する組み分けがある上で、学習者により良い授業をするには日本人教師と中国人教師との連携を考えなくてはいけないだろう。また、日本人教師と中国人教師がお互いの役割分担がよくわかった上で、より良い職場づくりにも導けるのではなかろうか。以上の意味を考えた上で、今は教育分野にいる日本人教師と中国人教師との連携を研究していきたいと思い、また、将来は教師ということに止まらなく、日本人と中国人、さらに、日本と中国との連携も考えられるものではないだろうか。

十年育树，百年育人

—9 年をかけて探しているもの—

北京日本学研究センター　教育コース
段　文晶

1．最初のモチベーションは研究テーマ？

●はじめに

小学校 5 年生の時、英語の授業を受けて、英語に興味を持ち始めた。なぜ興味を持つのは既にはっきりしなかったんですが、ただその時新しいことに興味を持ち、そして人とのコミュニケーションの意欲強いのではないかと思いす。

なぜ人とのコミュニケーションが好きな理由はほかの人との付き合いで人の気持ちをわかって、その人が悩んだ時に自分との付き合いで気持ちよくし（させ）たいからです。もちろん、自分が悩んだ時他の人とのコミュニケーションで問題が解決できると思います。

●日本語を専門として選んだ理由

大学に入る前に、日本語に触れたこともないうえに、日本語に興味がないとも言えます。しかし、今英語が下手になりましたが、小学校からずっと英語が好きで、成績も優秀なので、「言葉」というものに興味を持つのは確かです。ですので、英語を第一希望、日本語を第二希望にしました。その後英語から落選して日本語学部に入りました。その時の考えは日本語をただ一種「言語」として、英語と違っても同じく人とのコミュニケーションができる道具になれると思います。そのため、日本語の勉強を始めました。

●日本語を続ける理由

大学一年生の時、仕事のために役に立つ専門を選びたいというクラスメートが一人いて、日本語学部から経済学部に移動しました。そのことに驚きを感じましたが、自分は相変わらず日本語を諦めずに続けています。なぜなら、その時は既に日本語そのもの、あるいは言語そのものに興味を持つのではなく、先生の個人的な魅力に惹かれて、先生みたいな人になりたいと強い意欲があるためです。

先生の話になると長くなりますが、今でも話したいです。今の私は先生が歩んだ道を自分なりに歩んでいると言えます。なぜなら、先生は女性として独立で、学校の先生（先生の先生）に「発音はうまくできないから日本語を止めよう」と言われても、諦めずに頑張り続けています、今でも。そして卒業した後、成績は優秀なんですが家の関係で大学院に行けなかったんですが、仕事中でも日本語を諦めずに勉強し続けて、その後

自分の力で日本学研究センターに入りました。今は社会コースの博士で私の先輩みたいな身分になりましたが、人格的な魅力は私にとって一生の宝物だと思います。

●なぜ仕事を辞めた理由

大学から卒業して、一人で上海へ行った理由は日本語を諦めたくないです。なぜなら、故郷で日本語に関する仕事は稀で、仕事の経験も要求されて、新卒の私には無理なことです。

その後、2ヶ月の就職活動をして、日本語教師になりました。それから、ずっと一応すべてがうまく行っているとも言えますが、やはり、昇進は昇進しましたが、給料も上がりましたが、それに部門のリーダになりましたが、やはり一番やりたいことは人の管理ではなく、人を「助ける」ということです。「助ける」というと、主に日本語学習者が悩んだ時に、授業や私との話を通じて困難をなくすということです。つまり、一番やりたいのは、人が「笑顔」に至るまでの「橋」になりたいです。なぜなら、私は人の笑顔が好きです。

そして、教師として人も問題を解決ではなく、他のところに学習者の質問を収集しています。

●なぜ文法教育に入った理由

授業で一番やったことは文法の説明なんですが、私はその間、自分が本当にやれるのは文法説明だけかという質問が自分に聞きました。それから、このような質問をもって、仕事（授業）を続けています。このうち、自分は中国人先生としての役割と同僚の日本人先生の役割を考え続けていました。幸いに、私が勤める会社で、日本人教師の人数が多くて、日本国内の教育について少しでもわかるようになりました。それから、自分はいろいろ試しましたが、やはり私にとって一番やりたいことは文法説明です。しかし、文法説明にはただの意味を伝えるのではなく、学生にはその用法も理解して欲しいです。つまり、コミュニケーションできる文法を学生に学んで欲しいです。

それから、私はいろいろな工夫をして、中国の文法書も日本の文法書のいっぱい買って、学生に一番いい方法を見つけたいと思います。それに同僚（日本人教師もいて中国人教師もいます）といろんな文法について討論をしました。

そのため、私は今の中国文法教育では、やはり何かが足りないと気づき、そしてその「穴」のようなものを埋めるにはもっともっと研究が必要で、仕事をやめて学校に入りました。

●なぜ文法教育や文法を教える方法に興味がある理由

仕事を辞めた後、学生との連絡も絶えていません。その時、文法を教えなくても学生たちが私からの「助け」をもらえると気づきました。学生から高い評価をもらえるのは

絶対に「文法の説明がうまい」というわけではないと思います。もちろん一部の原因はそうなんですけど。そのため、「教育」は私にとって、ただ文法教育ではないと思って、文法から脱出したいと思います。

そして2015年の時、新しい授業の形式を試しました。それはネットで能力試験の2級の文法を教えていました。その時は、教室でなくても言語教育もできるという考えです。むしろ学生がもっと自由に動けると思っています。文法を説明する時、文法の用法説明ではなく、「場面」を作るという方法を使います。例えば「～たところ」を教える時、自分でペンを落として、その音を学生に聞かせて、どんな場面があるかを学生に示しました。つまり、ただ「～たところ」の意味や用法より、その場面でどんな状況があるかも学生に伝えます。

そうすると、私は学生がいい成績を取るより自分がその場面にうまく動けるようなものを学生に教えたいです。いわゆる前日のCの段階に入ろうと思っています。この考えはつい最近の考えです。

●教育に向かうべきか言語学に向かうべきか

以上をもって、大体やりたいことが今自分自身もわかるようになりました。しかし、今まではずっと迷っています。具体的には、文法教育に興味があると言いますが、一体言語学に入りたいですか、それとも教育に入りたいですかという問題をもっていろいろな本を読みました。それに日本に関する本もいろいろ読みました。それでやはり自分がやりたいのは言語学のものではなく、教育に興味があります。教育というと、主に学生を中心にしています。どんな方法を使って、教材でどんなものを書けば、学生にとっていいかということに絞りました。

ところが今の状況はどこから始めればいいのかわからないです。このため、今必死に本や論文を読んでいます。

2. 対話（対話相手:費　暁東先生）

●費先生を選んだ理由

なぜ先生を会話対象に選んだ理由を説明します。

センターに入る前に、どんな先生と出会えるかわからないですけど、自分の興味関心の分野で曹先生がいると聞きました。（今曹先生の授業を受けて本当に楽しんでいます）。

そしてセンターに入って、袁さんの話から費先生のイメージができました。（ここで別の話になりましたけど、この半年間の接触とコミュニケーションで、袁さんの優しさと心の柔軟に感動しました。）そして、先生はただ私より3歳上なんですけど、もうここの先生になりました。学問の面については半年間の授業で感じましたけど、やはり大学生の時

と同じように精神的な魅力に惹かれました。なぜなら、ずっと一つの道で歩いているのは一人にとって強い精神的な支えがなければならなりません。つまり、精神的な強さに敬服しています。

このため、私と違った人生を歩む人に興味が沸いて、これから自分がどう歩けばいいのかという問題にヒントみたいなものを貰いそうになりました。

やはり私にとって精神的なものは一番大事なものだと思います。

簡単ながら先生を会話対象に選んだ理由を話しました。

対話をそのまま丸ごとに書くのは無理だと思いますので、まとめて 5 つの場面をまとめます。

●対話文

対話① 英語を好きになるから言語を好きになる理由まで

先生：最初英語を上手になりたいということはどんなことか。

私：小学校５年生のことなので、はっきり覚えていない、ただ新しいことに好奇心があると推測できる。

先生：第一希望としての英語から落とした時の気持ちはどんな気持ちか。

私：落ち込んでいない。別に気にしなかった。ただ「言語」が好きだから、言語に関する専門を選んだ。それにその時、英語から落としたという結果は既に覚悟の上だ。

先生：どうして英語から落とした時落ち込んでない。

私：言語に関する専門に入るという希望は叶った。

話しながら考えること

言語そのものに興味があるのは絶対にモチベーションがあります。このあと、先生の話で、自分は小さい時、テレビで和服姿を見て、和服の美しさに惹かれたと思い出しました。

日本語学科に合格した時、関係の一番いい友達と話し合った時、やはり日本語という「言語」に何か縁があると話したことがあります。

言語を好きになる理由は、よく考えるとやはり先生から褒めて欲しいという気持ちからだと思います。なぜ先生に褒めて欲しいといえば、やはり周囲の人に肯定させたいという気持ちからだと思います。つまり、人に認められ、周りに孤立させたくない気持ちだと思います。それにもう一つ大事なのは、自分の思いをちゃんと伝えたいという性格からの影響もあると思います。

対話② 日本語と縁がないとは言えない

先生：「その時は既に日本語そのもの、あるいは言語そのものに興味を持つのではなく」というのは、やはり日本語に興味があると言える。なぜ日本語に興味を持ち始めたか。

私：英語と同じように新しいことに興味があると思う。

先生：「新しいもの」というと、様々なものがある、なぜ「言語」を新しいものとして興味を持ったのか。

私：人とコミュニケーションをしたい。エピソードとかシーンとかというものが好きだ。

話しながら考えること

英語を喋りたくなるのは、先生に褒めて欲しいというものの、日本語学科に入って落ち込むことはない理由はきっと日本語にも少しでも興味があると言えます。それから深く鑑みると、やはり日本語には印象があります。小さい時からウルトラマンとかを見たことがあります。そして『美少女戦士セーラームーン』というアニメが大好きで、日本語を好きになる理由ではありませんが、その時のインパクトが大事で、大学の時に日本語を選んでも嫌いではない理由だと思います。

対話③ いい先生はモデルになる

先生：これから先生になりたい気持ち、そして仕事を辞める理由は大学の先生から影響を受けたのか。

私：はい。今でも大学の先生とコミュニケーションしている。先生は「あなたたちを教えてから、教授法とかの本を読みました。その時私の方法は一番いい方法ではない」と今でも私に言っている。

話しながら考えること

今なぜ私が文法を教えるモチベーションは大学先生の影響を受けたためです。具体的には、まず先生の人格的な魅力だと思います。これは動機文にも書いたが、ここで費先生との話で思い出したことはいい先生になりたい気持ちも、仕事を辞めてここに入った勇気もこの先生の影響からだと言えます。どんな影響と言えば、仕事をしてからまた仕事をやめて、自分の夢を続けてもう一度学校に入りました。それに年齢を考えずに学校に入るのは本当に精神的な強さがあります。こうして、大学の先生に惹かれたわけです。

それに今私の教育観もその先生の影響の下で育ちました。どんなものだというと、先

生は私たちに文法を教える時、いろいろと工夫して、ただ説明のではなくいろいろな例をあげました。このようなことは教師になった私に影響を与えると思います。

つまり、いい先生に出会えて、今の私になります。

対話④ 仕事からまたいろいろ

先生：「人を助ける」というのは、人を管理のではなく、人を教育するということだろうか。例えば、教室で人を教えるようなことなのか。

私：その通りだ。私が学生にいろんな問題を聞かれて成長してきた、学生の問題を解けるためにいろんな本を読んだ。そして学生が一つの問題にこだわるという感じがある。

先生：なぜ一つの問題にこだわるか。

私：学習ストラテジーや方法がよくないと思う。

先生：個別対応と全体が違う。そして、仕事を辞めた時、どんなことをしたいか、どんな夢を抱いてここに入った。

私：どんな方法を使って、学生が文法をできるだけうまく理解する、使えるかを見つけるためにここに来た。

先生：方法と言えば、教室で授業を通して学生にうまく習得させるか、それとも個別対応を通して学生に理解させるか。

私：教室でもいい、教科書でもいい、できることを全部したい。

先生：つまり文法そのものではなく、文法の教授法に興味があるということなのか。

私：はい。

話しながら考えること

ここで自分の研究についていろいろ考えました。まず仕事の関係で、文法をはじめたが、文法を教えている過程で、伝えられない文法があると気づきました。伝えないというと、具体的には、分かっても使えないことと文法の説明があっても理解できないことがあります。そこから、自分は大学の先生のように、自分の授業を通して、学生に理解してもらえる方法を見つけたいです。

それに、文法を教える時、文法だけでなく、読解や聴解の指導も学生に伝えます。そして、何ヶ月後、学生が能力試験を参加して、いい成績を取りました。その時は本当に文法（むしろ言語学）と教育は別のものだと気づきました。学生に具体的な知識を与えなくても、その知識を身に付けることができると気づきました。

それから、また文法教育に戻って、文法を教えなくても文法を身に付ける方法はあるはずだと思っています。このため、いま中国の文法教育の特徴を教材とか、教授法とか

を通して、自分の目で確認しました。そしていま中国の文法教育は学生中心あるいは学生が主体ではなく、言語学からなるものだと気づきました。

そのため、自分が学生にとっていい文法教授法を見つけるために研究を始めようとします。

対話⑤ やりたいことから研究テーマまで

先生：授業と研究は違うもの、完全に一致するのは難しい。しかし人の考えは時の経つにつれて変わっていく。だからあまり一つの問題にこだわらないほうがいい。やりたいといっても、他の経験者（例えば曹先生）のような見通しを持つのは無理、なぜならまだ経験が浅い。それに博士になるのは研究の始まりだけだ。それから研究したいことを研究したらいい。

話しながら考えること

確かにやりたいことがあるというのははっきりしましたが、いま研究になれない状態だと思います。先生の話によればもう一度確認しました。

しかし、やはり研究したいことがあるからここに入りました。それは絶対に知識の蓄積だけではありません。じゃもっと深く考えると、私はやはり学生の立場から研究をしたいと思います。学生と言えば、具体的に文法教育に関わるのは学生の文法習得というものです。そしてあるチャンスがあって、「有対自動詞が可能の意味を含む」という現象を発見しました。自他動詞と言えば、私のような高級日本語学習者は既に勉強したことがあるけれども、「カメラは直ります」は可能の意味があるということさえ知りません。本当に別に知らなくてもいいだが、「あんなに文法を勉強したのになぜこのような簡単な現象もわからない」という気持ちを持つ高級学習者はいっぱいいます。このような挫折感は学習者をまた言語学の道に導くかもしれません。しかし、言語を学ぶには、言語学の知識を全部身に付ける必要はありません。このため、「なぜ中高級学習者は自他動詞を勉強したものの可能の意味を持つ」ということに興味を沸いてきました。この原因を探れば、文法教育に何かに示唆を与えるかなと思っています。

対話⑥ 夢は一生のもの

先生：博士からの卒業は研究の始まりで、今の修士論文でやりたいことを叶うというのは難しい。そして、人の考えは変わるものなので、今こだわるところは後で振り返ると本当にこだわる必要のないことになるかもしれない。大先生たちの経験を直接に取るわけがないので、今こだわっても結論が出ない。

話しながら考えること

今やっていることとやるべきことをちゃんとわかって、倦まず弛まずやり続けるべきです。研究でも、なんでも最初からでないといけないんです。つまり両足が地面に踏まないといけないんです。そして、夢は一緒のものでそれに考えは年齢や経験によって変わっていくので、焦る必要はありません。

まとめて考えること

3. 私にとってこのテーマについて考えることの意味

なぜ今のテーマに至りましたかをもう一度考えみました。それは二つの面からなると思います。

まず、なぜ「日本語」を研究の対象になる理由で、つまり日本語から日本語文法教育までの繋がりです。それはおそらく「言語」を興味になる理由だと思います。言語を好きになる理由は前言ったように、周囲や先生からの認めを求めて言語を好きになった。その時偶然というか、英語が出てきて、英語を道具としてその時の願いを叶えるために英語に興味を持ち始めました。これはなぜ英語学部から落選しても落ち込む気持ちを感じない理由だと思います。なぜ日本語を好きになる理由は深く考えるとやはり小さい時のアニメに少しでも関係があると思います、でないと別のロシア語そして中国語でも日本語より興味が深くなる可能性があると思います。そして先生の指導法を認めて、具体的に先生の真面目な姿に惹かれて、文法に興味を持ち始めました。その後、一人で上海で２ヶ月をかけて、文法教育の仕事をやれるのも以上のような考えがずっとあるからだと思います。そしてなぜ言語学から教育に目を向けるかというと、今から「なぜ教育に入ります」ということになります。

また、なぜ「教育に入ります」かというと、やはりいい教師像があると思いっています。前書いたように、先生の真面目と先生の一生懸命頑張る姿は私にとってモデルのようなもので、そして自分もこのような先生になりたいと執着しています。いわゆる、私が卒業した時に、文法はあまり上手ではないのに、先生からの影響で、文法をやり続けられる。確かに先生は授業の後既に文法を教えないことになります。しかし私は具体的な指導がなくてもずっと勉強し続けるんです。ですので、学生にとって文法教育は絶対に言語学の知識を全部身に付けるのではないと思います。ですから、私はいい先生になりたいです。

その上、私自身の学習経験を踏まえて、学生を教える時、言語学から脱出しなければならないという考えが出来ました。このため、私の目は今学習者のところに向けまし

た。ここから今の研究に至りました。

もっと絞ると、「中高級者は＜有対自動詞が可能の意味を含む＞ということが知らない原因を探る」から、文法教育に何か足りないかまでになりました。

具体的な研究方法と見通しはぼんやりしていますけど、今の段階では以上になります。

この二週間で一番感じたことは、人の考えは変わるものの、人の目標は段階があるものの、「初心」というものはきっとみんな持っています。「初心を忘れべからず」という言葉にも実感があります。

それにもっとも大事なことは、私たちの人生にとって何が一番大切だということです。今の私は文法教育から人間教育に歩き続けています。人間を育つのは一生をかける必要があると過言ではありません。その中に重要なのは私たちにとってどんなものが大事だと思います。多分「魂」というものでしょう。それは私が一生をかけて求めるもの：人間を育成するには「百年」がかかる。

最後に、一人一人を大事にする。

理解し合うために「異文化」への興味関心

異文化は人間の成長にどん意義があるか、学校教育はそのために何ができるか

北京日本学研究センター　教育コース
張　尋

自分としては一番やりたいと思い、知的好奇心の源となるのは異文化体験がどのように人間の成長に寄与できるのか、そしてその異文化の教育的意義のために学校教育は何ができるのかといった課題である。社会構成員たちがお互いの文化を理解し合うことができれば、それぞれの特徴を生かし、自分にとっても他者にとってもより良い生活を送られると考えている。本文では、まずこのテーマに至る経緯を紹介し、ついでその文章を対話相手に読んでもらい、議論してみた。具体的な対話の内容、対話しながら私が考えたことを紹介した後、このテーマについて書き記し、思考することの意味を結論で述べた。

１．私のテーマに至るまでの経緯

●違ってくる一人ひとりが、どうして理解し合えないのか

中国の北の方と南の方の人が思考様式、コミュニケーションスタイル、食文化などにおいてはずいぶん異なっており、ネット上でしょっちゅう話題となっている。しかし、自分の経験から言えば、周りの人が景徳鎮（私の出身地）の人であっても、変わった人として孤立されたことがあり、理解してもらえるのは母しかいなく、とても辛い高校時代があった。そして、大学に入ると、「景徳鎮の人と見えない」と言われたりした。それに対して、「それは当たり前じゃないか」と思っていた私であった。共通しているところがあるにしても、家庭からの影響や人生の経験によって、一人ひとりの考え方が異なってくる感じは小さいごろから覚えていた。おそらく当時は「文化」という枠組みで考えたのではないかもしれないが、地域によって人の思考様式、行動様式を論じるのに抵抗感を持っている。

さらに、大学から寮生活が始まり、４、５人部屋に住んでいるので、実は自分といろんなところで異なる人と一緒に暮らすことで、自分の成長にとても有意義であると考えていた。心を持って相手と付き合っているにもかかわらず、誤解されたり、悪口を言われたりすることもあったので、どうして理解し合うことがそんなに難しいのかと自問したりしていた。誰に答えを求めばいいかは分からなく、ひとりで悩み続けていた。人間関係が苦手だなあと思い込んで、成績が良くても自信があまりなく、人前ではきはきしなかったのに、「優秀だからうぬぼれが強い」と言われてまさに辛くなった。小さい頃から教師という職業に憧れているので、いつか先生になったら、知識だけではなく、この学生時代で続いている疑問と悩みと、理解し合うことの重要さも学生に伝えたいと思っている。

●最初に「文化」への気づき：「留学」についての思考から

高校時代の私がとても不器用で、必死に頑張っても成績がなかなか上がられず、大学入試の点数が高くなかったので日本語学科に配属されたのである。しかし、外国語が得意で、日本語を学ぶのに苦痛がなかったので、日本語を習って初めて努力が報われたと感じてきた。何をやってもトップまで行きたいという思い、および日本語学習からもらえた達成感と自信に支えられ、大学院進学を決めた。そこで大学院入試の面接試験の時のエピソードが、自分の「留学」という異文化体験への関心を引き起こした。緊張感を和らげてくれるためだろうか、先生に「あなたの日本語が自然ですね。日本に留学したことがありますか」と言われた。どうして日本語の自然さを留学と関連づけられるのかについて考えたが、自分としてはこの両者は必ずしも因果関係があるとは限らないと思っている。そして、所属した大学の日本語学科に交換留学プログラムがなかったが、（自分は満足しやすいかもしれないが）存分に日本語の学習を楽しんだ上で、トップレベルの大学院に入学したので、別に留学したことがないことで損をしたとも思わなかった。しかし、大学院に入ると、周りの人に交換留学した人が多いようで、日本語の自然さ、流暢さの面に違いがなかったなら、留学した人とそうでない人との違いがどこにあるか、という素朴な憧れと疑問から始まった。

それに当時の考え方では、留学を一種のインベストメントとして扱い、「こんなに多くの人的資源を使い、わざわざ学生を海外に行かせたが、一体どういう変化があるのか」、「せっかく外国に行く機会があるのに、どうやってその効果を最大限にあげるのか」というより実利的な発想であった。それについて、異文化環境で自分と異なる人との出会いを通して、物事を見る目が違ってくるし、視野も広くなることに辿り着いた。しかし、今まで歩んできた道を振り返り、理解し合いの難しさをめぐる悩みを思い出してみたら、外国に行かなくてもいろんな文化を体験できるんじゃないかと考え始めた。この視点から見れば、必ずしも留学プログラムが不可欠の存在であるとは限らなく、適切な教育手段を使えば、国内にいても留学と同じような人材育成の成果を収めるとずっと信じていた。大事なのは、自分と異なると思う人を理解しようとし、それを吸収して自分の成長に用いることだと考えている。その体験を全人的発展の糧に転換するのは、（家庭教育でも学校教育でも良いが）教育の役割だろうと認めているため、異文化体験の教育的意義と、それを実現するために教育は何ができるのかに対する興味がたぶんそこから来たのではないかと振り返っている。

●個人のキャリア志向と今までの悩みとの組み合わせ：「異文化」への興味関心

これから教師になったらどんなことをしたいかについて、日常生活における「異文化」を発見し、そこから自分でどのように見るか、対応するかを学生に自覚させたい。なぜか

というか、自分自身がそのプロセスからたくさん学んできたからであろう。おそらく「文化」という言葉はあとの勉強から得たヒントで、「そっか、今まで考えてきたことが文化と呼ばれているか」ということになるかもしれない。いずれにしても、一人ひとりのユニークなところを他人に伝え、理解してもらえると同時に、他人の独特なところを受け止め、理解しようとする広いこころを育てたい。修士論文が異文化感受性（文化的違いに対する認識）に関するものである。まず学習者が文化的違いに対する認識の解明を、これからの教育研究の第一歩として見たいと、いま考えている。

２．対話（対話相手：薛　思思さん　北京日本学研究センター・第 30 期生　言語コース）

●対話相手として選んだ理由

同期生の薛思思さんとは違うコースに所属していますが、とても親しい友達で、なんでも話せる相手です。言語学について研究を進めていますので、語学が苦手な私にとっても憧れとも言えます。今まで勉強してきた教育と文化の問題は、他の視点からどのように見られるかについて知りたいと思い、言語コースの薛さんを相手に選んだのです。薛さんはモダリティをテーマに修士論文を書き、お互いによくわからないテーマについて研究していますので、普段の話では研究に関する内容があまり出ていませんが、今回は少しフォーマルな感じがして、真剣に話し合うシーンも印象的です。

（以下の対話の記録で薛思思さんの名前を「セツ」と略し、私を「張」と略します）

対話１：「異文化」の境界線はどこに？

セツ	まずはこの「異文化」の境界線はどこにあるのかについてですね。少し疑問があります。どう思いますか。
張	最初から国の単位で「文化」を論じることに抵抗感を覚えています。でも地域といってもやはりちょっと、同じ地域に住んでいる人は必ずしも同じとは限らないからですね。
セツ	研究をするならそれを決めておいたほうがいいかもしれませんね。異なる国における違いと、同じ国における違いは同じではないと感じています。同じ国の人なら、学校教育では先生に同じ内容を教わるとか、同じ歴史を有するなど、共通しているところがあるのではないですか。北のほうと南のほうでは確かに違いがあります。例えば東北と海南省は想像してみれば全く違っていますが、隣の省ではそんなに大きな違いがないと思っています。それより民族は一つの

	文化になれると思います。例えば中国の少数民族。同じ学校教育を受けていても、自分の民族の慣習があり、独特な文化の一つとして見られます。それに対して、違う国ならまず言葉が違います。うん、やはりことばが大事。例えば外国に行くと、中国語を話す人に会うなら、親近感が湧いてくるでしょう。
張	そうですね。じゃ外国に行くと、別に出身が南か北かという地域による違いはそんなに重要ではないのことですか？お茶大で、ある中国人学生に会って、その話し方、やり方からその人の出身地を推測したことがありますけど。
セツ	たぶん中国にいる時のようなはっきりとした境界線ではなくなるでしょう。付き合ってみればどんな人なのかはだんだんわかるようになりますが、最初はみんなが中国人というイメージでした。でも長く付き合ってみれば個性など異なっているところがあって、日本の人でも相手とうまく仲良くやっている人もいて、そこで文化の違いが目立たなくなる気がしています。
張	それはどうしてでしょうね。
セツ	個性や価値観が似ているからだろうと思います。日本の人といっても、個性と価値観が似ていますので仲良くなるのも可能ですね。

対話しながら考えたこと：

最後のところで、個性や価値観が近い場合、国籍による違いが目立たなくなるのに同感があります。その原因について結論となるものは達していませんでしたが、薛さんが文化の境界線に対する考え方を、この対話からわかるようになりました。その境界線について、薛さんと異なる意見があり、自分の見方では、家庭による影響も文化なのではないかと考えています。個性や価値観は、「文化」の個人への反映として考えてはどうでしょうか。そもそも、文化という実物はありませんから、その反映として、一人ひとりでも、芸術や行事でも妥当だと思われます。

対話２：寮生活による人間としての成長

セツ	あとは、ここ全人教育は何を指しているかはよくわからなくて。
張	たぶんここで言いたかったのは知識だけではなく、視野や教養など、私の例と言えば、寮生活という経験が自分の成長にとってとても重要で、たぶんもっと全体的な人間としての成長…
セツ	他人と接する仕方も変わりますね。例えば同じ出身の人と日本の人と接する仕方が同じじゃだめですね。

張	寮に住んで、日々接触しているので、最初は驚いたんだけど、今になるとどのように接するべきかをわかるようになった気がしています。その人がどうしてそう思うのかについても、たくさんの面から分析し、理解しようとしています。学部生の時はぜんぜんダメで、４人部屋なので、他の３人に孤立されるケースも多かったです。私は大学に入って初めて寮に住み始めました。
セツ	私は中学校から寮に住んでいますけど、あの時は本当にわがままで、喧嘩もしたりしました。でも今になると、寮生活に慣れて、みんな違ってくるのを当たり前のこととして受けとめ、そんなに激しい反応もしなくなりました。でもこれは家庭による影響や日常生活の習慣で、たぶん文化と言えないかもしれません。
張	そうか。それは文化ではないと思っていますか。
セツ	文化というのは、やはり慣習や帰属感に関するものだと思っている。家庭の影響や個人の生活スタイルは文化とは言えないと思っています。そう思うのは、たぶんずっと一緒に住む周りの人はみんな北のほうから来た人ですから。あとは、寮に住んだことがある人と、そうでない人とはやはり違いますよね。
張	寮生活という試練を通して、確かに成長したでしょう。どこかはっきり言えませんけど、さっき話している接し方が一つで、それは私が知りたい全人的な発達です。それに、いつも日本の方に「寮で他の人と一緒に住めるか」と聞かれています。あまりピンとこなくて、たぶん想像し難いでしょう。確かにどこかで、異文化間教育学会かな、「混住寮」に関する論文を読んだことがあります。
セツ	北海道のなんとかいう大学もそうですね。それに関するドキュメンタリーをみったことがあります。いい研究課題になりますね。特に中国の大学では。みんな寮に住んでいますから。

対話しながら考えたこと：

寮生活が話題になると、北京のｋ大学の日本人教師(k 先生)のことを思い出しました。M２のとき、立ち話で私の修論は「異文化」に関するものを言うと、「そうですね。寮に住んでいる人もみんなそれぞれの文化が違いますよね」と言われました。「どうしていきなり寮の話になったか」と戸惑いましたけど、今振り返ってみると、それはｋ先生の異文化に対する理解でしょう。薛さんはルームメートとしての個人の習慣が文化と言えないと思った原因は、今までルームメートの出身に帰属してもらいました。そして、中学校から寮生活の経験があり、それについて私より熟考を重ね、試行錯誤して適切な対処に至る

プロセス、私にとって学べるところです。経験することだけでは足りなく、実際の問題に出会い、それを解決するために考え、試してみるのは重要でしょう。

対話３：どうして「留学」だろう

セツ	「国内にいても留学と同じような人材育成の成果を収める」には、賛成です。でも日本語の自然さは留学との間に、直接な関係があまりないと思いますね。
張	そうですね。だからあの先生に言われるとすぐ違和感を持つようになりました。でもなんというか、今もそうですけど、留学生は国内の学生より優秀というイメージがずっとありますよね。どうしてみんな必死に留学したいのですか。
セツ	おそらく外国では異文化という感じがもっと濃密で、インパクトが大きくなるでしょう。だから、その成長のスピードも速くなります。例えば、羽田空港と北京首都国際空港の雰囲気がぜんぜん違うでしょう。
張	そうですね。日本から帰ったときちょっと慣れなかったことを今も覚えています。学校に帰るメトロで初めて違和感を感じていました。
セツ	地域ならそんなに大きな違いが感じられないだろうと思います。東北から海南に行っても空港には大きな違いがないかもしれませんね。同じ基礎教育を受けていますので、価値観やこの世界を認識する仕方が似ているかもしれません。だから自分の国にいるままで、外国のようなインパクトを感じませんから外国に行きたいのです。
張	でも、留学って結構お金をかかりますし、普通の学生ならそんなチャンスに恵まれないでしょう。不公平なんじゃないかと思って、教育はそれに対して何かできるか、という発想でした。国内の学生のために何かできますか。国内にいる学生に、どんな異文化体験をデザインすればいいと思いますか。
セツ	教育における公平の問題になりましたので、私もよくわかりませんね。自分の子供を外国に行かせるのは、中国の教育に自信がないからですか。
張	そうかもしれませんね。さっき言ったインパクトのことも理由となるかもしれません。
セツ	異文化体験で学べるものをどうやって教育に取り入れるのかについて、私から見れば、旅行や大学生活がとても意義があると思います。

対話しながら考えたこと：

薛さんが最後に言ったのは、中国の教育に自信がないので留学を選ぶことです。それも可能でしょう。小学校から同じような教育を受けていて、中国の教育のやり方に飽きてしまいましたので、他の国で別の教育を通して、なんらかの変化があると信じる人は留学したくなるのでしょう。そう考えると、教育の制度も文化の産物といえるのではありませんか。異文化の刺激が欲しいので留学を選ぶ人は、異国の教育システムもその期待の一部になるでしょう。越境するだけでは、異文化体験にならないことについて議論すると予想しましたが、別の話になったので意外におもしろかったです。

３．結論：私にとって、このテーマについて考えることの意味

そのテーマまでの道程を振り返ってみると、日常生活での相互理解の難しさに遭遇し、その理由をめぐる悩みと思考から始まったことに気づいた。そして「留学」への関心をきっかけに、自分がずっと悩んできたのは「文化」であることに気づいた。そこから他人の「文化」を理解しようとするなら、相互理解ができて、一人ひとりが人間として成長できるほか、実社会で自分の価値をよりよく実現できるだろうという考えに辿り着いた。

対話を通して考えたのは、人々がどのように文化の境界線を認識しているかが実にバラバラである。海外に行かないと異文化と言えない意見もあれば、民族、地域の単位で文化を認識する人も必ずいる。しかし、外国の人であろうと、クラスメートであろうと、先入観を持たず、相手を理解しようとする人は私にとって理想の人間像であろう。

以上の振り返りと対話をすることで、そのテーマは、たぶん自分がどんな人になりたいか、教師になったらどんな学生を育てたいかという自分の価値観、教育観からもらえたものだと思う。そのプロセスで、日本語の学習者どんな役割を果たしていたのか。日本語を学んでいなく、大学院に入って何を研究したいかについて考えるチャンスがなかったら、この課題を解明する機会はおそらくなくなるだろう。また、今回の集中講義に参加しなかったら、自分の思いを振り返り、何を研究したいかを真剣に考えるチャンスも見逃したかもしれない。実は修士論文がすでに提出済みで、どちらかというと社会心理学に近いものであった。しかし、執筆の時はいつもどこかずれている気がしている。修士論文のテーマは「異文化」に関するものであり、具体的内容も主に自分で決めたのであるにもかかわらず、そのアプローチは自分の想像と少し違ってきた。現段階の力不足も原因となるかもしれないが、一番解明したいものについて研究していると言えない、という気が済まない気持ちがあるゆえ、博士課程への進学を決めた。以上のものを書き記し、今までのことを振り返ることで、これからの研究生活の支えとなるものをもらえてよかったと感じている。

新たな自己の発見

—モチベーションを見つけたプロセス—

河南大学　張　満霞

１．日本語との出会いから今まで

●なぜ日本語に興味を持つのか？

大学に一番希望した専門に落選したが、日本語学科に選ばれた。だから、日本語を勉強し始めた。最初は日本語に対してあまり好きじゃなくても、嫌な感じもなくて、ただ義務として未来の仕事のために勉強して、学ぶ情熱がそんなに高くなかった。入学した後、日本人教師に出会って、先生たちがとても優しくて、ほぼ毎回の授業にお菓子を持ってきて、ゲームみたいな方法を使って日本語を教えてくれた。例えば、授業に、いろいろなカードを利用して仮名を覚えさせるために、皆お互いに一枚のカードを出して、相手がすぐ答えられるかどうかの反応力を練習した。先生の自由なやり方に初めなので、面白いと思って、日本語勉強に興味を持ってきた。

●なぜ言語学を選ぶのか？

三年生の時、ある授業に先生の用意によって私が慣用句の部分の説明を担当した。その時ただ先生からもらった辞書を調べて、慣用句を何種類に分かれて、簡単で意味を皆に説明した。その後、学士論文のテーマに困った時に、慣用句の整理という経験があったので、慣用句のことをいかがだろうかと考えて資料を調べ始めた。学士論文として、意味だけを説明するのはダメだと知っているので、文脈を結びつけて深いところを研究したいと思った。しかし、辞書に調べて慣用句の解釈だけあるが、具体的な例文がなくて、文脈もなかった。インターネットで検索して、数多くの例文も見つからず、量的な研究結果を出さないので、最終には別のテーマを選んで残念だと思った。

院生になってから、コーパス言語学を少し接触して、コーパスの検索機能を理解して、すぐあの慣用句の論文を思い出した。あの時コーパスが使えたら、たくさんの例文を探すことができれば、その論文も出来上がるかもしれないと感嘆した。思わずコーパスに興味を持ってきた。始めてコーパスに関することを学びたい。そして、コーパスに関する論文を読んで、コーパス言語学は言語運用に焦点を当てて、ある言語事象をリサーチクエスチョン（仮説）として設定し、それをコーパスデータに基づいてその仮説を検証し、量的な研究結果を出すことになる。このような研究方法は厳密で、客観的な結論を出すことが出来る。これも自分が探したい方法なので、そして言語学を選びたいと思う。

●なぜこのテーマを考えるのか？

この後、うちの英語学部の先生は新しい課題を申請して、そこには『源氏物語』に関することがあるので、日本語ができる人がいる。そして先生の学生さんが私と連絡し、具体的なことを説明して参加する意欲を聞いた。先生がいまコーパスに関する研究をしていることを聞いて、すぐコーパスに引き付けられて参加したいと言った。先生の課題を少し理解して、この前『源氏物語』を読んだことはないので、一つの訳本を読みたいと思った。しかし、多くの訳本があるけど、訳者の翻訳風格も知らなかったので、誰の訳本を選ぶのかに迷った。周りの人に教えても、ただ少し読んだら、いいか悪いかを感じられると話しくれた。しかし、いま中国にほぼ８種類があるので、一つずつ買ってきて読むのは無理だと思う。私と同じこのような困りがあった人も多くかもしれないが、インターネットでこの訳本の研究状況を調べて、中国でいくつかの訳本を比較した量的研究が非常に少ないのを発見した。そして、どうしてこの研究が少ないか？テキストが大きいからなのか？テキストが大きいから、本を読みながら自分が欲しいものを探すのは少し難しい。コーパスに興味を持ったので、そして、コーパスと『源氏物語』を結びつけられるかどうかを考えていた。だから、このテーマを考えていきたいと思う。

２．対話（対話相手：盛さん）

●盛さんを対象に選ぶ理由

盛さんは一緒に日本学研究センターで研修してきた友達です。盛さんと同じ授業があるので、よくお互いに考え方についてコミュニケーションします。授業に盛さんがよく質問をだして、自分の見方を持って言いたいことをはっきり表すことができます。特に、自分の困ったことを盛さんと話し合った時に、いいアドバイスをもらって少し明るくようになりました。ですから、今度、自分の動機文について盛さんとディスカションして、いいアドバイスをもらいたいと思います。

●対話文

対話１　日本語勉強を通して学んだこと

盛	なぜ日本語に興味がありますか、という説明を見て、日本語勉強が好きなのは先生の優しさとやり方によって得たものですよね。しかし、例のように、ただ先生からお菓子をもらったから、好きになったのは少々子供っぽいように見えますよ。
私	そうではないと思います。私たちが日本語を勉強したばかりなので、日本語の前で、何も知らない子供とは変わりはないです。先生が言語知らずの私た

	ちに納得させるために、児童の勉強する初心を引き出せるように簡単な方法を使って、理解させたいと思います。
盛	では、張さんは日本人先生の授業のやり方が好きで、そのうちに多くの日本語知識を勉強して、だんだん日本語が好きになりましたよね。ならば、どうして中国人先生の教え方に興味を持っていませんでしょうね。あるいは、日本人先生の授業には何か特別なところがあるのでしょう。
私	そうですね。中国人先生の授業に基本的な語彙や文法などをいろいろ勉強しました。中国人先生の教え方に興味を持っていないとは言えないけど、高校時代の先生のやり方と大体同じなので、教科書で日本のことを説明して新しい感じがないと思います。それより日本人先生の授業では、今までの人生で体験できないことを耳に聞いて、エキゾチックのようなことを身近で起こったような気がします。印象したのは、あの時、うちのクラスメートを誘い、自分のアパートで日本料理を用意してくれて、特別、寿司の作り方を教えたのは本当にありがたいです。授業にも先生が活発的、自由なやり方によって教えてくれましたので、活躍的な雰囲気でいろいろなことを覚えました。そういうような形式で、外国語を勉強する気持ちがいっぱいです。
盛	張さん学習生活は面白いね、羨ましいな。

対話をしながら考えたこと

始めて触れ合った日本人先生は私が大きな影響を与えて、日本語の面白さを体験させて本当にありがたいんです。日本語知識を除いて、先生の真面目な態度に引き付けられました。しかも、先生がいつも元気満々で、教師という職業が好きで、学生のためにずっと頑張っています。先生の生活ぶりと仕事ぶりが私を励まして人生を進んでいきます。これから日本語を勉強して、多くの知識を学んで、もっと日本のことを知りたいという決心で、日本語も自分の生活の一部分になってきます。

対話 2　院生になるのは新しいスタートである

盛	張さんは、どうして院生になりたいか？
私	日本語を勉強して、どうしても日本語を使った仕事を探したいです。もし日本語に全然関係がない職業を選んだら、必ず悔しいと思います。

盛	私もそのような感じがありますよ。もっといい仕事を見つけるためには、院生になることにします。
私	初心は同じだと思いますね。四年生の時、日本語能力が不足なのに、院生になるつもりで、専門知識だけでなく、ほかの知識も学びたいと思います。
盛	では、日本語を除いて、どんな知識を学びたいか？
私	いま、私にとって、一番重要なのは日本語のコミュニケーション能力です。院生になってから、自分の弱い部分を見直されて、もっと勉強するつもりです。ほかには、時間があれば、コンピューターに関する知識を知りたくて、将来の研究や就職など役に立つと思います。
盛	それいいね、いろいろ考えて、よく頑張ってね。

対話をしながら考えたこと

院生になると、新しい段階に至って、物事に対する見方にも新たな視点があると思います。私にとって、学部士の時より大きな違いは、先生の問題に答えるから自分が問題を見つけて結論を出すまでに変えるという過程だと思います。そして、このような段階には、自分の考え方も活躍になるようです。院生になるのは、日本語の知識を勉強するためだけでなく、もっと具体的な教育観と人生観を豊かにすると思います。三年間の学習を通して、日本語勉強には自分なりの学び方を得られて、考え方には厳密的な思考方式をよく理解して、世のことに自分なりの見方もあると思います。ですから、院生になるのは、私にとって大事なことで、新しいスタートです。

対話 3　言語学に対する考え

盛	コーパスに興味を持つきっかけがまあ分けるけど、どうして言語学を選ぶのか、まだはっきりしないです。
私	あの時、文学とか、言語学とか、あるいは文化とか、何を選ぶのかは決まっていないです。コーパスに接触してから、一番簡単な考えはコーパスをもっと学びたいと思って、そしてコーパス言語学を選びたい。
盛	では、どうして文化コースと文学コースを選ばないのか？
私	文学にはあまり興味を持ってないです。文学には人によって異なった見方があるので、誰の考えがいいか悪いかをはっきり評判しないです。文化学とは、研究範囲が非常に広く、あらゆる視点が絡み合った学問で、面白そうで

	すけど、私にとって、具体な言語知識を学びたいので、最後、言語学を選ぶことにします。
盛	その繋がりが学生の立場から見ってまあ分けるけど、なんだか説得力が少し弱いだと思いますね。
私	周りのクラスメートにこういうふうに話して、盛さんと同じような感じがあります。少し迷って、自分の気持ちを皆さんにはっきりしないですか？
盛	私の考えでは、言語学にどんな興味を持つか、コーパスはただ研究手段で、研究対象ではないと思います。この問題をはっきりしなければならなりません。コーパスで具体的に何を研究しますか？あるいはコーパスを研究してきますか？
私	えーと、コーパスのことを研究することではなくて、コーパスを利用して、ほかの言語事象を研究したいんです。このあと、たくさんの本と論文を読んで、ヒントを見つけて、最後には、『源氏物語』と結びつけて研究したいです。
盛	いま、張さんの気持ちを理解します。コーパスと『源氏物語』の見つけた順序は変えたら理解しやすいね。
私	えーと、それはそうですけど、少し無理ですね。これから二つの関係をもっと考えてきます。

対話をしながら考えたこと

院生になる前に、日本語能力を高めるために、日本語を勉強し続けてうまく使いたいでした。この能力というコミュニケーションのことだと言えました。そして、院生になってから、言語学の知識がたぶん日本語の運用に役に立つが、文学と文化の方は、言語運用が重点ではないと思いました。以上はあの時の考えですが、正しくないこともあるかもしれませんが、心には、言語学の方に傾けました。

対話 4　モチベーションの考え

盛	動機文をみって、張さんも話し合って、なんだか言語学を選ぶのは、テーマを選ぶのは、他人からヒントをもらってからこそ、やるという感じがしました。モチベーションについて、自分から何かをしたいという意識があまりはっきりしないようですね。
私	最初は確かに何を選ぶのかがぼんやりしていて、テーマのことを先生の課

	題にヒントをもらって、自分の興味と結びつけて思い出しました。受動されたものがあるけど、自分も見つかりもあります。
盛	それなら、興味のモチベーションはもっと深く掘り出したほうがいいと思います。
私	そうですね。学部士の時に先生の指導によって日本語を勉強して、あの時、自己への質問を出さないので、すこしぼんやりして四年間を過ごしました。前のことを思い出して、なんだか恥ずかしいと思います。ただ一度の人生なので、これからことをやる前に、必ずはっきり考えなければなりません。

対話をしながら考えたこと

盛さんの言った通りに、ディターミネーションをする前に、自分になぜこういうふうにやりますか、ほかの人に影響されましたか、というような自己への質問を出さないので、人に自分のモチベーションをはっきり言えません。人間として、自分自身には、何をすべきか、どうしてこれをするべきか、これをしたらどんな結果が現れましたか、というような一連の関係を予め考えるべきだと思います。自分のモチベーションがはっきりすればこそ、将来の道に自分がぼんやりしなくてしっかり歩いていきます。

３．私にとってこのテーマについて考えることの意味

先生の授業に日本語を勉強し始めることから、今の研究テーマを選ぶことまで、この一連のことにはどんな繋がりがあるのかを何回検討しました。検討する過程には、改めて自分の動機を思い出し始めました。最初にはただ日本語能力が不足なので、勉強し続けたいと思ったけど、もっと具体的な目標があまり分かりません。院生になってから、ぼんやりした状態にいって、毎日忙しそうに見えるけど、何も成果はしなかったです。何故というと、自分がやりたいことが分からなくて、三年後の道がどこにあるかも迷って、自分には自信がなかったです。このような悪い状態がほとんど半年間ぐらい続けて、コーパスに接触してから、自分の興味を発見して、自分がそんなに悪くないと感じし始めました。この時、もう半年間が無駄にされました。

このテーマについて考えているプロセスには迷いことがあるし、言いにくいこともあるけど、心に深いところを何回掘り出してから、なんだか今までの学習活動に対して自分のモチベーションがだんだん明るくようになりました。その同時に、以前自分のぼんやりした状態が私の考えに悪い影響を与えたのを注意しました。モチベーションがはっきりしないので、正しい道を選ぶのに困って、人生の価値に疑問が生じしていました。ですか

ら、これからの人生には、はっきりしたモチベーションが十分必要だと思います。人間として、何をするべきか、どうしてこれをすべきか、これをしたらどんな結果が現れたか、というような一連の繋がりを予め考えればこそ、将来の道に自分がぼんやりしなくてしっかり歩いていきると思います。

最近いろいろなことを考えて、学部生のときから今まで自分の考えを支えてきたのはうまく日本語を使いたい気持ちと仕事への望みで、これからの自分の支えて行くのは自分の人生の価値を求めるモチベーションだと思います。これから、必ず自分の求めたいことをよく考えて、心にはっきり知っていて、もっと良い自分を見つけていきます。

コミュニケーション能力を補うもの

-コミュニケーション・ストラテジーの使用-

湖南大学　鄧　潔

１．興味点を見つける経緯

●最初のきっかけ

研究動機のことを再度に考え、其のきっかけは多分大学院進学試験が終わった後、半年の仕事経験に関わりがあると思う。進学試験が終わった後、深センでプラスチック金型を生産する工場で、日本営業担当を務めた。しかし、最初に、金型生産などの工業知識を持たない私は日本人顧客と電話でコミュニケーションするときに、特に金型のある部分のサイズを調整することを商談するときに、相手の言った意味が理解できなくて会話をやめた。具体的に言えば、例えば一つの金型のある部分への調整を相談するときに、金型に関する知識を知らないから、電話中に相手が一度日本語でその部分を具体的に説明したが、其の金型のある部分を指す名詞の意思が全然理解できなくて、其の部分の働きも知らなくて、お客様が一体金型のどんなところに具体的にどのように調整したいのか、どうしても意思が通じらなかった。その後、お客様が直接に図面に表示して、ファクスで工場に送る方法を取った。日本語がわからない工場のエンジニアはその図面を見ると大体意味が理解できて、私に説明してくれた。その特別なコミュニケーション方法で、金型に相関する知識の勉強につれて、少しずつ金型とその生産のことを知って、段々仕事の内容に慣れてきた。

しかし、いつも別の方法で一気に会話が順調に進まなくて、何回でコミュニケーション目標が達成することもよくある。例を引けば、ある部分の日本語の言い方は別々なので、相談のときに、少しずれを生じることもある、そのときに日本語ではなく英語でまず調整のところを確認して、相手になれる言い方をもって会話を続けることもよくある。従って、初めて直接に日本語でコミュニケーション問題が解決できない場合に、理論的な指導もなし、どうやって別の方法有効的に目標を達成することを留意した。

●興味をもつ段階

入学してから、ずっと接触場面の言語管理に関する研究を進んでいる先生の指導のもとで、接触場面に関する基本的な知識の勉強が始まった。その時に、接触に関する資料を調べたときに、偶然に「コミュニケーション・ストラテジー」という文字を目に入った。其のコミュニケーション・ストラテジーは一体どんなものなのかを知りたい気持ちで、さらにインターネットで資料を探して、初めてコミュニケーション方略に関する研

究文献を読んで、其の過程に「言語能力を補い」という文字を目に止まって、一瞬に深センでの仕事経験を思い出した。資料を通じて、コミュニケーション方略についての定義と分類はいろんな定説があるが、言語能力を補って、コミュニケーション問題を解決して、コミュニケーション目標を達成するための有効的手段といえる点には異論がない。また関連する先行研究の言語能力に関わらず、学習者はコミュニケーション・ストラステジーを用いて言語産出及び言語理解の過程に現れた問題に対処しながら、円滑にコミュニケーションの促進を図る点も提出された。その点から見れば、コミュニケーション方略は学習者の言語インプット量とアウトプット量を増加させて、勉強を役に立てると思った。またその中に、学習者がうまくコミュニケーション方略を使わないことをも薄々と書いたが、あまり原因を分析しない。振り返れば、其の頃、コミュニケーション方略に対する知識の勉強が深めれば深めるほど、興味も持ってきた。

●自分の研究テーマを決める段階

大学院一年生の第二学期のとき、わたしは教授法を教える先生が実際に別の先生の授業を考察して、授業の進め方を記録して、其の進め方を評価するという要求に応じて、日本人先生の会話授業を観察した。観察中、言いたいものがうまく伝えられない時に、そのままで発話をやめる学生がいるが、言いたいものを先生に伝えたい意志が強いからこそ、別の方法で伝えてみる学生もいる。例えば、授業中、「中学時代に、好きな運動はなんですか」という問題を答えるときに、ある男の学生が急にその言葉を忘れたので、足で何かを蹴る動作をして、先生にうまくサッカーという情報を伝えたが、「好きな書物はなんですか」という問題を答えるときに、その中国語の「武侠」(侠客という意味だ)を日本語の音をもって新しい単語を作って「ぶきょう」と一度答えたが、失敗した後、また剣をふる動作をしたが、先生がその意思が理解できなくて、会話が失敗してしまった。同じ相手に同じ型の方略を使って、会話が成功する場合も失敗する場合もあることを発見した。その現象が面白いと思って、研究したい。

二年生のときに、以上の状況を踏まえて、ようやく自分の研究テーマを決めて、中国人日本語学習者がコミュニケーション方略を使用する状況を研究したくて、コミュニケーション方略の指導教育に少し役に立ちたいと思う。

２．対話（対話相手：区　文燕さん　国立台湾師範大学・社会教育コース M2）

●区さんを選んだ理由

異文化接触場面におけるコミュニケーション問題を処理する経験が多いからだ。区さんは日本語学科の学生ではなく、今のルームメートで、社会教育学の修士で、中国語に訳した動機文を読んでくれた。区さんはマカオ出身で、大学から台湾で勉強して、今は交換留学生として半年ぐらいに北京で勉強している。初・中学には中国の共通語ではなく、広

東方言で進む教育を受けたので、共通語をあまり話せなくて、台湾と北京での期間に、コミュニケーション問題にあうことはよくある。また、よく海外へ旅行をするので、英語が上手だが、多くの国の人があまり英語ができなくて、異文化の接触場面でコミュニケーション問題を処理する経験が多い。また、ルームメートなので、直接にコミュニケーションすることも便利だと思う。

●対話

対話１　興味点への詳細な説明

区さん：一度鄧さんの動機文を読んだが、その興味点をもう一度確認したい。えーと、鄧さんは自分が深センで働いた経験と授業の観察から考えた興味点なのか。うん、口頭で言えないときに、言いたいものがもっと有効に相手に伝えられるために、他のものあるいは他の媒介を使う。鄧さんはその他のものを借りて、他の媒介を使う方法を研究したいなのか。
鄧：確かに自分の経験からの考えだ。外国語を勉強する人はその言語能力に関わらず、必ず自分の意思を言えない、コミュニケーション問題にあうことがある。自分にも、四年間の日本語勉強を通じて、また仕事のときに相手と日本語で会話が進まれなかったこともある。他の媒介、他の方法を使わなければならないこともある。
区さん：たとえば、私達のように、中国共通語で会話をするときに、自分の言いたい意思をうまくに相手に伝えられないときもある。例えば、ある時に私は聞いたことばが理解できないときに、鄧さんに百度という検索エンジンによって画像あるいは説明文を調べ・解釈してくれた。
鄧：そうだね。理解できないことばを一つ一つ文字を分けて、一々説明することもよくある。母語で会話をするときにもよくいろんなコミュニケーション方略を使う。だが、先生がいつも日本語でうまく会話をすると強調した一方、言いたいものが伝えられないとき、どうすればいいのかが分からない。そういう状況に、自分のたりない日本語能力に恥と感じて、日本人教師と会話練習をすることに対しこころより抵抗を感じる。
区さん：はい。意思が大体理解した。昔、香港の友が台湾でオープンしているバーでアルバイトした。其のバーのはたくさんの日本人がいる。日本人たちは、よくペンと紙をもってバーに来て、注文するときあるいは観光地をきくときに、其の意思を表すために、聞きたがるものを紙にその漢字を書いて、画像を描く。だって、そこの人は日本語があまりしらない、ただ簡単な挨拶語ができる。だから、口頭で言えないときに、文字、画像、動作などのほかの媒介によってコミュニケーションしても大丈夫だ。だが、あまり知らないので、直接に日本人と会話する場面を避けたい人もいる。例えば、アルバイト先にあまり日

本語が知らないあるウエーターが、多分あまり経験がないだろう、日本人お客様を見ると、わざわざ日本語が知る人を探して、自分のかわりにお客様にサービスを提供した。実は私達も日本語が知らない、ただ鄧さんが書いた通り、別の方法で会話をする。考えれば、確かに、コミュニケーション方略は言語の勉強を役に立てるだろう。
鄧：別の方法を使って、相手が言えないものを教えてくれたので、自分もそういう過程にその言葉を勉強した。
区さん：印象を深めることだろう。
鄧：そうだね。それから、動機文に書いた通り、同じ相手に同じ型の方法を使うが、成功する場合も失敗する場合もある。それに影響を与えられる原因に興味をもって、研究したい。
区さん：あ、そういうことか。つまり、同じ相手に同じ型の方法を使ったが、なぜ失敗かなぜ成功かに興味を持つことだよね。
鄧：いいえ。同じではなく、ただコミュニケーション方略の使用が成功させると失敗させる原因に興味を持つ。
区さん：うん、その意図を理解した。まあ、最初の理解も間違いがないが、こんなまで理解しなかった。

対話しながら考えたこと：

区さんに興味点を詳細に説明するときに、なぜコミュニケーション方略に興味を持つのかを深く認識した。確かに最初は深セン出の仕事経験をきっかけに方略の使用を留意したが、研究テーマを決めるのはやはり自分の大学時代の勉強経験に大変な関わりがあると思う。大学時代に初めて日本語を勉強するときに、いつも自分の不足な日本語知識に対して恥と感じて、心より授業の以外の時間に日本人教師と会話することに抵抗を感じた。会話授業にもいつもあまり積極的に参加しなかった。それで、せっかくの会話練習チャンスを無駄にした。

また、動機文にできれば詳細に研究モチベーションを紹介したが、何にもわからない区さんにとってやはり理解できないところがある。それは多分コミュニケーション方略をめぐって説明したが、方略使用の結果への興味点をあまり紹介しないから。

対話 2　実際の会話に限られたコミュニケーション方略の使用

鄧：区さんが今までたくさんの国に旅行に行ったことがあるが、旅行中に、全部英語でコミュニケーションできるか。

区さん:いいえ、実はただ英国アメリカ、オーストリアで英語で大丈夫だが、他の国、例えばロシア、チリ、ブラジル、メキシコなど、英語で会話をするなら大変だ。それから、欧州の国でも英語には聞いては大丈夫が､質問に答えるときに多くの人は自分の国の言語で答える、例えばフランス。それで、欧州でのお年寄りと比べて、若者の方が英語が上手だという感じだ。
鄧:では、英語で会話がうまく進まないときに、どんな方法を使って自分の意思を伝えるか。
区さん:ボディー言語を使う。それから、もうその国についたので、地元の言語で簡単に挨拶をしては大丈夫だろう。例えば、「すみません」「ありがとう」のような意味を表すことば。でも、例えば注文なら、必ずウエーターと会話をしなければならない。「hello」と簡単に挨拶した後、すぐメニューに載る料理の画像を指して注文した。もし、イメージがなかったら、ウエーターも英語があまりできない場合に、簡単に紙に牛、豚、鶏など描いて、せめてその料理の材料を聞いて注文する。そうするなら、注文は大丈夫だ。
鄧：あ、そうなのか。はい、わかりました。では、直接に口頭でコミュニケーションできない場合に、紙にイメージを作って、簡単なやりとりをする方法は自分で考えたか、あるいは誰の指導を受けてその行動をまねるか。
区さん:まあ、自分で考えると思うが、でもやはりそのバーでの日本人からヒントを受けるだろう。バーに来た日本人達はバーで現場でイメージを作ってウエーターと会話をしたことがあるが、予め中国語で紙に書いておく、そのままにもってバーで注文あるいは道をいたこともある。私はバーでの日本人に出会う前に、直接に翻訳 APP、例えば、Google translation を使って、相手の言語に訳してコミュニケーションを続ける方法を取った。うん、やはりバーでの日本人を見て、自分のコミュニケーション方法を多様化するだろう。だって、やはり言いたいものが伝えられないときに、どうすれば相手の言語でその意思を伝えられるか、つまり言語で意思を伝える考えは普通だと思う。

対話しながら考えたこと：

異文化接触場面におけるコミュニケーション問題にあうときに、まずどうやって相手の言語で会話をするかを考えるのはまさか学習者の使用するコミュニケーション方略は限られることを反映するかと考える。大学時代の私は先生とコミュニケーションするとき、言いたいものがうまく言えないときに、まず日本語の文字の音声と形を借りる方法を試みたが、他の方法はあまり考えられなかった。仕事の経験をきっかけに、使用する方法を多様化して、方略に対する認識も少し深くなってきた。

対話 3　興味を持つ方略の使用場合

区さん:仕事先には普通、翻訳を担当する人がいるだろう。
鄧:はい。だが、私のように四年間の日本語勉強を通じて、また社会人として入社の後、金型に関する工業知識が足りなくて、その言葉の意味を全然理解できないこともある。それから、例えば IT 業のプログラマーと会話するときに、行業用語を中国語で話しても意味が全然分からないことも普通だろう。
区さん:そうだね。個人がそれぞれの情報領域が違うから、すべての情報は簡単に言語だけで伝えられることではない。それから、専門用語と行業用語を含める場面を研究するなら、談話対象も同じ行業しなければならなくて、大変だね。
鄧:そういう状況を考えれば、多分私の考察する会話レベルはこういった専門用語や行業用語を使う場合を除いて、ただ日常会話のレベルからコミュニケーション方略を使用する状況を研究した方がいいと思う。
区さん:それから、意思伝達のために、その社会文化への理解も必要だと思う。例えば、東洋文化と西洋文化はかなり違いがある。具体的に言えば、中国人の a さんはドイツ人の b さんからの誘いを処理するときに、いつも「大変忙しくて、時間がない」と婉曲に断ったが、そのドイツ人がその言葉の表の意思を理解したが、言語に潜む断る意味を理解しないので、かえって熱心に a さんを誘う。
鄧:あ、区さんの意思が大体理解した。つまり、もしそういう状況が出るときに、一体その意思が伝えないか伝えるか、どうやって使用結果を判断するかは問題だ。其のドイツ人は「大変忙しくて、時間がない」という言葉の表の意思への理解が正しいが、それに潜む中国人式の断りが理解できない。そうするなら、a さんの本当意思が相手に伝えられなくて、意思伝達が失敗すると思う。

対話しながら考えたこと:

仕事の経験をきっかけに方略の使用を留意したが、一番にやりたいことは自分の持っている知識を用いて日本人と日常の生活になんとかしてコミュニケーションできて、自分の意思を相手に伝えて、相手の意思を理解できることだ。それから、元々個人がそれぞれの方略を使用する特徴があるが、会話の場合と結びついて考えれば、コミュニケーション方略の使用する結果に影響を与えるものはさらに複雑になる。それから、専門用語と行業用語を含める場合なら、多分自分の知識によって使用状況を分析するのは無理だと思う。それから、専門用語と行業用語を含める場合なら、関連知識を持たないままに、会話を続けるのは多分無理だと思う。つまり、その場合に使用結果に影響を与える原因はただ関連知識を持たないという一つ原因だと考える。

また言語は社会文化と深く関係するものであるのを知るが、実際の会話に、ここことばの意思が字面からの表の意思と字面に潜む社会文化からの裏の意思を含むことは全然考えていない。区さんの意見をありがたいと思う。

３．私にとってこのテーマについて考えること

今回わざわざ日本語学科の学生ではなく日本語が知らないが異文化接触場面にコミュニケーションする経験がおおい区さんを対話対象として、実際の経験からコミュニケーション方略をめぐって、対話をする。対話の内容から見ると、主に興味点への説明、実際の会話に限られたコミュニケーション方略の使用、興味を持つ方略の 3 点を分ける。また、今回の対話を通じて、自分の研究モチベーションをより深く認識した。

確かに最初は深セン出の仕事経験をきっかけに方略の使用を留意したが、研究テーマを決めるのはやはり自分の大学時代の勉強経験に大変な関わりがあると思う。大学時代に初めて日本語を勉強するときに、いつも自分の不足な日本語知識に対して恥と感じて、心より授業の以外の時間に日本人教師と会話することに抵抗を感じた。たまに、ようやく勇気を出して、日本人先生とコミュニケーションしたことがあるが、いつも言いたいことばを日本語の音韻を借りてそのままにやくしたから、意思伝達が失敗するのは当然のことだが、大変ショックを受けた。それで、落ち込んで、大切な会話練習のチャンスを惜しくないままに大学四年間の日本語勉強を終わった。

それから、対話中に、母語で会話するときにもコミュニケーション方略を使うことがよくある。だが、なぜ外国語で外国人と話すとき、コミュニケーション問題を予想するだけで、会話をやめたい気持ちが出てくるか。それは本当にただ外国語が知らないからだか。そういう疑問も出てきた。区さんはその疑問に、同じに外国語があまり知らないが、外国人と会話したい人もしたくない人もいるのは人と人の性格が違うからだといったが、私はそれはいつも順調に会話をするのを強調する教育環境と関係があるかどうかを考えている。つまりいつも成功を強調する教育環境に、失敗を怖がって、だから失敗する可能性があれば、直接に会話をやめる気持ちがある人もいると思う。大学の自分も多分そのような教育環境の影響を少し受けるだろうと思う。もしその時に、言語能力を補うコミュニケーション方略に関する知識を少し勉強するなら、多分そんなに消極的に大学の勉強をしないだろうと思う。其の悔しい気持ちをずっともって、大学院のときに、偶然にコミュニケーション・ストラテジーに関する文献を読んだ後、ようやく研究テーマを決める。

最後に、自分が本当に興味を持つ方略の使用は一体どんな場合における使用かをようやく明確化した。仕事の経験をきっかけに方略の使用を留意したが、一番やりたいことは自分の持っている知識を用いて日本人と日常の生活になんとかしてコミュニケーションできて、自分の意思を相手に伝えて、相手の意思を理解できることだ。

アニメ好きから教師へ

――趣味は職業になれるか

チベット民族大学　　ホウ　レンギ

1. 始まりはアニメだった

●日本語を学んだ理由

私はもうすでに日本語教師になっている。しかし、なぜ日本語教師になったかと聞かれたら、恐らくはっきりとした理由はなかったと思う。何とかの成り行きでここまで辿り着いたが、一番根本的な理由が、多分スラムダンクというアニメにある。中学校の時、テレビで、中国語に訳されたスラムタンクというアニメが放送されたことがある。アニメとは子供向けものだと思った私はスラムダンクをはじめから最後まで見通した。夢のために汗のかいた少年たちを見た時の感動は今でも心に刻んでいる。あまりにも好きで、スラムダンクのＤＶＤまで買って、そのあとも何回見返してしまった。その時気付いたのは、エンディングソングは中国語でないことである。歌詞は分からなかったが、メロディーはすごく感染力があって、聞いているだけで力が沸いてきたような感じがする。調べてみたら、スラムダンクは日本のアニメで、その歌の歌詞は日本語で書かれたものだとわかった。それから、ドラえもんやクレヨン新ちゃんなど、中国語に訳された日本のアニメをたくさん見た。中国語訳とはいえ、本当はセリフだけは中国語に訳されたもので、アニメソングはすべて日本語のままだった。本物の日本のアニメを見たい、日本語で歌を歌えたらいいなぁ、といつから思うようになった。それで、大学は自然に日本語専攻を選んだが、その時まだ卒業後のことについては何も考えなかった。

大学二年生の時、日本へ留学するチャンスがあった。私は勢いで選考試験に参加したが、その後、すごく迷っていた。当時の担当先生に相談をした。その時、先生が「外の世界を見に行ってきて、そしたら、わからないものも分かるようになるよ。」とおしゃいった。それを契機に、私は日本に留学することを決意した。

●日本語教師になったきっかけ

長くて短い留学生活を通じて、分かるようになるものも、分からなくなるものもたくさん出てきた。特にアニメによく使われる役割語に興味があって、そのまま進学した。役割語に興味が沸いてきたのは、アニメ「ヘタリア」のおかげだった。世界の各国を人物化される「ヘタリア」というアニメには、“変な日本語”をしゃべっているキャラクターが大勢いる。おかしいと思って調べてみたら、役割語という社会言語学に属する言語現象が目に入った。さらに行くと、アニメだけではなく、インターネットや小説のなか

にも珍しくほど使われている。言葉遣いでキャラクターの属性を表すのは、創作過程ではよくあるとこですが、言葉の内容ではなく、形で、特に特徴のある語尾によってキャラクターの属性を表すのは初めての体験だった。しかし、中国語の訳文を見て、役割語に当てはまるものはないと気づき、修士時代では、中国語における役割語について詳しく調べた。

役割語が本当に最近出てきた概念で、よく先生や同級生に役割語について説明してくださいと言われた。最初は、役割語の概念を丸暗記して、そのまま言ったが、向こうがとても理解しそうな顔をしなかった。そのあと、いくつの例を挙げて、何とか理解させた。したがって、集めてきた役割語の例が多ければ多いほど、面白くなってきた。例えば、お嬢様のキャラクターが、言葉遣いには「ざます」を使うと、「ああ、このキャラ、言葉遣いでもお嬢様だなぁ」と思うようになった。そしたら、今度は役割語について聞かれたら、その概念ではなく、このような面白いところを説明しようとした。しかし、日本人の先生や日本語の中・上級者に役割語の面白さを説明したら、すぐにわかってくれたが、日本語の初級段階の人に説明しても、分かってくれない人も多かった。私の説明が悪いか、それとも、初級段階の人に言っても、背景知識のないため、分かりにくいか。なら、初級段階では、どこまで教えればいいか。そう思っていた私は、教育関係の本を探してみた。おそらくこれをきっかけで、私は日本語教師になったかもしれない。

●教材に興味がある理由

日本語教師になったものの、学生時代に漫画アニメにしか興味のない私にとって、まず必要なのは基礎知識だと思っている。そのため、日本語専攻初級段階の教科書をたくさん手に入れた。最初の一年は聴解と会話の授業だから、何とかごまかしたが、二年目に入ると、「精読の授業を担当して」と言われて、本当にびっくりした。さらに、教科書を読んだら、自分が学生時代に使っているものとだいぶ違うことがわかった。学生からの期待に応えるために、教材分析をしながら教壇に立っている。新しい教材を使っているうちに、自分の使った教材とどう違うか、どのような工夫をしてこの教材を使いこなせるか、このようなことをばかリ考えていた。そして、先週の土曜日、華東師範大学で開かれたシンポジウムに参加した。徐敏民先生によって新たに編成された教科書を紹介していただいた。「新界標日本語」という教科書で、徐先生に強く勧められた。中国の日本語教育を変える教科書だとおっしゃった先生もいます。ちょうどこの間、“言葉を身につける魔法の杖”という話題についてディスカッションをした。日本語教師にとって、もし魔法の杖があるなら、多分教科書だろうと、思っている教師がいるそうだ。教科書というのは、本当にそこまで便利な物だろうか、と思っている私は、今の日本語専攻初級段階の精読という授業でよく使われている日本語教科書を調べてみようと思う。どの

ような基準で教科書を選ぶか。また、今使われている教科書にはそれぞれどのような違いがあるか。さらに、より良い教科書とはどのようなものか。これらの問題が契機として、研究していくと思う。

2. 対話(対話相手:段　文晶さん)

●段さんを選んだ理由

誰かと対話をしてみたいと考えると、出てきた条件が三つある。まずは、日本語学または日本語教育の知識を持っている。そして、身近にいて、私の話をまじめに聞いてくれそうな人。最後、日本語教師を務める経験がある。私は日研センターに来て、まだ一か月も足らず、親切に私の話を聞いてくれそうな人だと言ったら、このクラスの皆だと思う。段さんは日研センターの修士一年生である。しかし、学生になる前に、三年ほど日本語を教える経験がある。教育現場に立ったことがあるなら、もしかして、私と同じ悩みがあるかもしれないと思って、段さんを誘って、対話を行った。

●対話文

１．なぜ日本語教師になったか

段	まずは、なぜ日本語教師になりたいか、についてはもうはっきりと覚えていないですか。
彭	まあ、なんか成り行きで教師になったという感じですね。
段	成り行きとは、どのような成り行きですか。
彭	あ、就職する時、本当は企業とかに入ったかったんです。でも、両親が、女の子だから安定している仕事がいいと言われて、今の大学に応募してみたら内定をもらった。それで、教師になったというわけです。実際に企業も応募してみたが、結局、実家と結構距離があって、あきらめたのです。
段	じゃ、教師になったことに後悔とかありますか。
彭	言われてみれば、ないですね。
段	じゃ、本当は教師になるのは、両親がむりやりにさせることより、実は自分の心の中がこうしたいのではないですか。
彭	そうなのかなぁ。よくわからないですね。どうして教師になったのかもよくわからないです。本当は、日常生活では、人の前で話すことがとても苦手です。でも、教壇に立って、生徒の前に何かを教えるとき、意外にいい感じでした。すごくうれしいです。

段	多分ここはあととつながりがあると思います。まだあとで詳しく話しましょう。
彭	あ、はい。

対話しながら考えたこと：

正直に言うと、実はいまだに、なぜ教師になれるかがよくわからない。別に絶対教師になりたい、あるいはなりたくない、そういう強い気持ちは最初から持っていない。今までは「安定している仕事です」とよく自己暗示していたが、今回は段さんに言われてはっきりと意識した。教師になったことが後悔をしていないと。自分の心の中で、どこかに教師になりたいと思っている小さいな人が密かに存在しているのだろう。

２．アニメのどんなところが好きですか

段	中学時代では、アニメが好きと書いてありますね。アニメのどこが好きですか。中国とスタイルが違うところですか。それとも、描き方ですか。それに、アニメソング(スラムダンクの ED)のどこに引き付けられましたか。思い出せますか。
彭	うん。ここははっきりと覚えています。振り返ってみると、自分もそのとき大事な試験のために頑張っていたから、恐らくそのアニメを見て、夢のために一生懸命頑張っている少年たちの姿から力を得たと思います。努力は必ず無駄にはならないという感じで、すごく感動しました。
段	つまり、アニメは自分の支えになったという感じですか。
彭	そうですね。今でも、少女系より少年ジャンプ系が好きです。熱血、友情、努力とか、このようなものが好きです。
段	要するに、日本語を勉強する契機はアニメで、そのアニメのポジティブシンキングに惹かれて、今まで頑張ってきたということですか。
彭	そうですね。まあ、ネガティブな人間ではないと思いますけど…

対話しながら考えたこと：

普通、どうして日本語を選んだかと聞かれたら、アニメが好きですからと答えば済むところだったが、今回は初めて深く聞かれた。アニメのどこが好きかと考えると、理由は一本一本違うが、実は、つながっているものがある。本当に改めて考えないと、気が付かないと思う。これからも、初心忘れべからず、常にこれを意識しながら進んで行くと思う。

3. いい教師像の力

段	留学するチャンスがあって、けど、迷っていると言っていますか。なぜ迷いま

	すか。行くべきかどうかにですか。
彭	これからの進む道に迷いがあると思います。まあ、今も同じですけど。けど、その時は、引き続きこの大学に行っても、なにかできるかが分からない状態でした。だから、変わってみたいと思って、勢いで応募しました。後は冷静になって考えたら、多分留学に行っても分からないものは分からないだろうと思って、迷ってしまいました。
段	そこで、この相談に乗った先生が登場しましたということですか。
彭	はい。
段	どうしてこの先生ですか。誰でもいいというわけではないでしょう。
彭	そうですね。この先生は、私の大学時代にすごく尊敬している先生です。だから、その時すぐに先生に相談を持ち掛けてしまいました。
段	その先生のどこに尊敬しますか。
彭	礼儀正しさとか、まじめさとか、人格的魅力が感じられます。例えば、二年生の夏休み、学校で社会実践活動が行いました。うちのグループの指導先生はこの先生でした。課題は日本語専攻生の就職についてですから、先生と一緒に企業を回りました。すごい暑さの中、スーツを着て、丁寧に企業の情報を教えたり、インタビューするときの質問しストをチェックしたりしてくれました。遊び半分だった私が先生を見て、すごく感動で、自分も本気を出すようになりました。
段	まじめでやさしい先生ですね。
彭	まあ、厳しいときもありますけど。
段	つまり、この先生は教師として、学生の気持ちも配慮してくれて、心から生徒思いのいい先生ですね。
彭	だから、その時、一番相談相手として思い浮かべるのがこの先生でした。
段	じゃ、この先生が与えられた「いい教師像」は彭さんにも影響を及ぼすといってもいいでしょうか。
彭	どうでしょうね。実は教五藤さんのレポートを見て、すごく共鳴しているところがありました。私も同じように、別にある先生の影響を受け、私も教師になりたいとか、そういう気持ちは全くありません。寧ろ、両親は高校先生だからこそ、一度絶対教師になりたくないと思ったこともあります。なんかずっと教師と一緒に暮らしているから、この職業を美化できないという気持ちがいっぱいでした。けど、確かに段さんに言ったとおり、大学時代の先生はいいイメー

	ジを与えてくれました。このいい影響のおかげで、私が教師になるかならないかという選択の前に、少なくとも絶対なりなくないという気持ちが消えました。
段	じゃ、やはり影響があるんですね。
彭	そうですね。この影響を受けて、私は教師になった後、どんな教師になりたいかが明確になります。

対話しながら考えたこと：

日本語教師になる前に、まずどうして教師になるかを改めて考えた。教師になるのは成り行きでしたか、そのあと諦めないのはなぜだろう。やはり、いい教師と出会って、その思い出が今の支えになったかもしれない。この先生と出会って、自分も教師になりたいと思うようになったのではなく、この先生を見て、自分はどんな教師になりたいかが分かってきた。いい教師像は人それぞれ違うかもしれないか、それは道印みたいに私たちを導いている。

4. 教育現場での不安

段	彭さんは教師として、どんな風に成長しましたか。最初は不安だったんですね。
彭	実は、今も不安です。
段	少し違う意味での不安でしょう。
彭	どうでしょうね。学生の前にいつもは不安です。例えば、この言い方に間違いがあるのかとか、このような説明で学生が理解してくれるのかとか、色々と不安です。日常生活でも自分の言いたいことをはっきりと伝えないこともよくありますから、本当に自信はないです。けど、今でも教壇に立てるのは、学生からもらった信頼の視線のおかげだと思います。アイコンタクトがないと、おそらい私は教師になっても慣れないと思います。
段	つまり、相手のリアクションが大事ということですか。
彭	はい。だから、はじめは、自分は教師に向いていないと思いました。一方的な発話はとても苦手ですから。
段	つまり、教師に対するイメージは最初は一方的な発話でしたが、今はずつ少し変わっていきますか。
彭	そうですね。実際に教壇に立つと、教師とは一方的に話すことより、学生とのやり取りが大事だと思うようになりました。だから、時々私は教壇に立って

	も、目の前にいる学生たちと一緒に座っているような気がします。例えば、ある文法ポイントにつて、私は先生はこれを学んだ時もすごく苦労しました。皆で一緒にどう説明すればいいかをディスカッションしましょう、と学生に言ったこともあります。しかし、時間も力を尽くしてディスカッションをしても、分からない学生がいる。
段	そうですね。それは普通ですよ。
彭	で、思ったのは理想的な教授モードはないってことです。いくら優れた教授法でも、すべてのケースに当てはまることができないと思います。

対話しながら考えたこと：

教師とは一方的に発話をする人というイメージだった。なぜなら、中学校から高校までは受験勉強のため、ずっとこういう教え方で教わったからだ。固有観念で、「では、私はそれが無理だから、教師に向いてないじゃないか」と思って、教師になるのは少し抵抗があった。今考え直すと、恐らく教師になってから、ちょこちょこと出てきた「不安」というのも、学生からリアクションをもらえなかったからだと思う。

3. 私の考え

今回の対話で、日本が好きになる理由、日本語教師になる理由と、それを続ける理由について詳しく話した。久しぶりにアニメの話をした。「アニメが好きで、日本語学科を選びました」とよく言ったが、それについて深く考えたことはない。なぜアニメが好きだったのに、アニメ関係の仕事ではなく、日本語教師になったかについても初めて考えた。

「先生、自分の進むべき道がよくわからない、どうしたらいいですか」とよく教え子から聞かれた。本当はどう答えるかがわからくて、「好きなものはありますか」と聞くしかなかった。好きなものを教えてくれた学生に、「じゃ、それを職業にすればいいじゃないですか」とアドバイスをしたが、向こうは「本当にこんなもの、職業になれるかな」と迷っている顔をした。実は私自身さえも分からなかった。趣味というのは、自分をリラクスさせて、楽しませることで、その一方、職業というのは、生活するため、責任感を感じることだと思っていた。趣味は職業になれるかどうかと疑問を持っていた。趣味をそのまま職業にさせるなんて、大人の世界ではそんな甘いことはないと思った。

しかし、実際にやってみたら、趣味と職業の間にはっきりと線をつくことができないと意識した。教師という仕事をやりながら、アニメを見たり、字幕をやったりする。たまにアニメを使って、学生がアフレコをさせたりして、趣味と職業の間にバランスがとれたと感じている。

ちょうど対話が終わってまとめるところに、教え子からメールが届いた。「スピーチ大

会で優勝して、先生のおかげだ、ありがとう」と。すごくうれしかった。教師になってからはずっと心配していた。自分のやり方で間違いがあるか、この説明で学生が理解してくれるか、すごく不安だった。アニメ好きの私は、アニメからの影響が深く、文法も、書き言葉も、教師としてのストラテジーもめちゃくちゃだと思った。それでも、今は先生という呼ばれ方が好きになった。教師としての誇りを持っている。教師とは何か、教材をどう使うべきか、と考えるようになった。今回の対話では、段さんからの「彭さんは、教師になりたくないって言ったけど､本当は教師になるのが好きじゃないですか」という言葉で、気が付いた。いつの間にか仕事が趣味になっていた。アニメ好きから教師へ、変わらないのは日本語に対する“好き”という気持ちだ。そういう気持ちを自分の支えとなって、これからも頑張っていきたいと思う。

日本語教育の再考

―言語学習と批判的思考力育成の両立を中心に―

北京日本学研究センター　教育コース
雷林

1. テーマ動機

●言語が好きなエピソード

私が日本語と出会ったきっかけは、中学三年の頃でした。外国語でぺらぺらしゃべるという感じが好きでした。最初は英語の発音をすごく楽しんでいて、友だちと英語の会話をしたり、自分一人でも英語でしゃべったりしました。またその頃ちょうど塾に通って日本語を勉強した子がいました。彼女と一緒に授業の間でロールプレイしながら日本語の会話文を読んでいました。日本語の発音はこんなにきれいだなあと感じました。中学卒業した後の夏休みに韓国語にも少し触れました。韓国語の発音も非常に柔らかく、特に女性の発音を聞くと非常に気持ちよいのです。大学に入る前に専門を選ぶ時、外国語を勉強したい気持ちが強いので、英語と日本語を選択しました。最後に日本語学科に入ることになりました。大学院に進学するのも、日本語という外国語に関して、また日本という国に対してもっと知りたいからでした。こうして見ると、私が日本語が好きなことは、言語が好きで、また言語の発音の魅力に引きつけられたからでしょうか。

●思考力についての発想

外国語でしゃべること自身に夢中になっているが、それだけでぺらぺら話せるようにはなりにくいと気が付きました。そのエピソードは大学一年のことでした。英語の通訳ボランティアサークルに入りたいので、その面接を受けました。面接はだいたいある現象あるいは観点に対して自分の意見を英語で言うという形でした。例えば、安楽死に対して賛成か、反対か、またその理由を説明してくたさいという質問がありました。二人の先輩の前に座っている私が理由を言う時に非常に緊張で、頭が空白のようになってしまいました。その後、先輩たちに英語の語感がいいが、話の中身が不足だと指摘されました。実は私は安楽死のことに興味を持っていたのです。しかし、具体的に展開していくと何を言うかが分からなくて、面接のときには言えなくなりました。それから、私は、言語能力に加え、ちゃんと自分なりの考えを養おうという気がしました。

また、高校時代は受験勉強で一生懸命やっていましたが、大学からは必ず実践の中で勉

強しなくてはいけない、実践と勉強が両立できようという気持ちが強かったのです。ぜひ学んだ知識を生かしたいとずっと思っていました。そのために、サークル活動で大活躍しました。例えば、学校内のメディアサークルで、社会現象を評論するコラムで一か月間実習をしました。それに、環境保護サークルにも入会し、学校の廃棄電池を処理する活動に参加したり、樹の葉で絵を作って自然体験をしたり、更に社会で活躍しているNGOと接触したりしました。そういったサークル活動の中で、私は、だんだん自分が周りの人や環境、また社会に対する興味や関心が増えました。大学二年から、政治学・行政学を副専攻として選びました。授業の中で複雑な社会現象を分析したところ、問題は何か、なぜそうなのか、更にどのようにすべきかなどについて検討を展開しました。社会が抱えている問題を中心として扱い、そのシーンがすごく「真実的」です。厳密的な政治理論を用いて、複雑な社会現象からその本質的なものを分析するプロセスで、自分にとって問題解決の能力が上がったと実感し、その面白さも感じました。また、それらの現象や問題を扱うには、分析・推理・感性などの素質が活性化されます。

一方、日本語専門の授業ではそういう思考力を重視しないような気がしました。基礎作りであった精読授業では主に語彙―文法―本文という順序でした。また、本文のところでは、文法説明は中心となって、文章全体としてその背景知識、文脈分析はあまりしませんでした。学習した後で頭の中で残っていたのは個々の文法や単語で、またそれらが点々と散在している状態です。私が日本語の授業で感じたのは、私たちが教師の言うこと、また日本語の知識を単に聞いて受けるだけでした。外国語学習は確かにゼロからこれまで接触することのない言語を対象とします。だからといって、外国人の学習者が母語社会の言語や文化をそのまま受けるというところに止まるわけではないという気がします。

また、先学期では、北京師範大学の林洪先生の集中講義に傍聴させてもらいました。本文の説明と授業のやりかたは多様多種で、学生の批判的思考力を育てることを目標としています。例えば、文法教授では、学生に任せて文法の特徴などをまとめてくれるという形でした。学生はまず類似する文法を含む文を取り出して、そして比較して、最後に文法の特徴や使い方を自分でまとめてみます。生さんはこのプロセスで、まず自分の問いをたてて、問題を定義して、そして根拠を検討して、バイアスや前提を分析して、感情的な推論を避けて、また他の解釈も考慮して、いろいろ試行錯誤します。一方、教材についても改めて考えさせられました。林先生によると、教師たちは、決して教材が先行するのではなくて、教育現場に応じて学生のニーズに基づいて、教材を活用しなければなりません。教材にひたすら従う、または教師に従うより、学生自分で決めます。

政治学・行政学の授業とサークル活動で、学生は社会現象に直面して問題解決してみます。日本語学科であまり体験できなかった分析といった思考力の訓練ができました。そし

て、林洪先生の授業で、学生たち自分が問題を識別し、表現出し、解決し、またそれについて振り返り、最後に解決法について交流し合います。やはり外国語教育において、そのような分析・比較・推論・解釈・評価を通じて、批判的思考力を学生に身につけさせる必要があるのではないかと思います。

2. 対話（対話相手：費　暁東先生）

●費先生を選んだ理由

費先生は日本語教育、特に教育心理学に関する研究を行っていて、日本語教育に対して自分なりの考えが豊かで深いと思っています。一方、私は、最初の集中講義で自分の興味を日本語教育とのつながりがなかなか築かれませんでした。費先生との対話を通じてそのへんについてもっと考えさせられたいと考えています。

（以下では費暁東先生を費、筆者を雷と略称します）

●対話文

対話１　大学に入る前の日本語学習

費	中学三年から日本語を勉強し始めたんですね。で、高校卒業の頃に日本語はどのぐらい身につけてきましたか。
雷	実際に、中学時代の日本語学習は五十音図だけを勉強しました。その後は続けませんでした。
費	大学に入る前に日本語じゃなくて、英語を第一専門として選ばれましたね。なぜでしょうか。
雷	やっぱり「執着心」があるからでしょうね。英語勉強は中学から始めましたが、実は中学以前は英語に対してすごく興味を持っていました。中学で勉強し始めたら、成績がよくて、自分の興味も一方的に増えていたことで、英語勉強を続けようと思っていました。その一方、日本語もある程度好きでした。また、志望の申し込みには六つが選ばれることで、いっぱい書き込みました。第一専門のところに英語、第四に日本語を入れました。その中間に、両親とお姉さんのアドバイスに従って、就職しやすい専

	門、会計学といった専門を選びました。幸いに行きませんでした。
費	日本語が専門となったと聞いた瞬間、気持ちはどうでしたか。嬉しかったですか。それとも、第一志望が落選し、第四志望で合格しました。気持ちは何でしょうか。
雷	実はすごく意外的でした。また、すこし落ち込みました。日本語が専門となるとは想像したことがぜんぜんなかったんです。日本語を専門として勉強しているという感じを描くこともありませんでした。英語は長年学び続けているので、根深い基礎ができたでしょうか。他方、日本語というものは、ただの興味として扱いました。それで、大学四年間でずっと学習し続けているって、「まさか」という気持ちも出てきました。
費	でも、好きは好きなことですよね。言語に対して興味を持っていますね。ただ、入学志望を書いたときに日本語を第四に書き入れて、日本語学科に入選したと聞いて、やはり沈み込みましたね。どのようにその気分を転換しましたか。家庭内ではどの雰囲気でしたか。反対の声は出ませんでしたか。
雷	日本語学科に入った後改めて考えてみたら、前の三つの志望学科に入らないで本当にラッキーだと思います。なぜなら、やはり言語が好きだと思っています。英語とか、日本語とか、または韓国語とか。しかし、自分は勇気が不足っていうか、思い切って「私なら絶対日本語を選びたい！」と（しませんでした）。その結果、選ばれたような感じで日本語学科に入ったことになりました。幸いにその一歩は出ました。家庭内では賛成もせず、反対もしなかったんです。実は両親は大学専門に関してあまら分からなかったんです。ただ私自身が決めたら干渉はしませんので。

対話をしながら考えたこと

中学は日本語だけじゃなく、韓国語にも少し興味を持って、自分が言語が好きだと気づきました。また、中学卒業した後日本語の学習を続きませんでした。大学の第一志望は日本語ではなくて、英語です。日本語は好きですが、興味として扱って専門とは違うという考え方にも気づきました。

対話 2　大学時代からの日本語学習

費	前言ったのは「話す」感じが好きで、その他に何がありますか。言語が好きだについて大まかに言えばいいんです。日本語だけじゃなくて、英語や韓国語などについても言っている感じだけ気に入りますか。
雷	はっきりと分からないんで、ただ他のクラスメートと比べて私は、語彙、文法をわざと覚えようとしないで、だんだん使えるようになったと気がします。語彙や文法を文章において理解し、繰り返して読みます。声を出しながら読んでいる中、だんだん覚えてきました。しかし、初めに読むと、文章の意味が頭の中に入りませんでした。反復しながらその声を記憶して、それから復唱できて、語彙や文法が分かったのです。　言語の発音と言えば、語感というものに特に関心を持っています。文法だけ一生懸命に覚えるなら辛く思います。大学時代に一番好きな授業は会話の授業でした。なんとなく言い出したいです。
費	勉強の方法ですね。また、大学院に入りたいのはなぜですか。もっと日本を知りたいとか、日本語を学び続けたいとか、または他の思いとかありますか。なぜ大学院の入学試験を受けて進学するつもりですか。
雷	推薦入学でした。大学時代の学習は、なんか、まだ浅くて、足りないと感じています。大学院で日本語を専攻して、深く考えたいと思います。
費	言語に関わりますか、または日本社会に関わりますか。
雷	たぶんこの頃には日本社会です。言語を勉強したうちにボトルネックが現れてきました。読む時に意味に関心を払いません。リーディングの成績は上がったり下がったりして不安定でした。高校時代英語のリーディングの試験問題もちょっと苦手でした。文章を理解するとき、私が読み取ったポイントとクラスメートとは違います。そのために一途に思い込んだこともあります。 そして、文法の面白さがあまり感じなくて、言語コースを選びませんでした。日本社会と日本語教育に関心を持っているので、教育コースに入りたいと思いました。社会コースで教育の話題について議論しますが、日本語教育の専門でより深く掘り

	出したいと思っていました。それで、今のテーマを思いついてきました。

対話をしながら考えたこと

文法の役割について改めて考えさせられました。会話の授業が好きだと言いました。その理由にはたぶん、会話のために必ず対象を描きながら文を構成するので、ちゃんと自分の考えを伝えようとします。他人に理解をもらえるため、簡単な文法で話せるなら、できるだけ簡単に言って、「自然な日本語」を目指したいとの考えです。

対話 3　批判的思考力の中身

費	思考力と言えばいろいろあります。なぜ特に批判的思考力に関心を持ちますか。
雷	たぶん自分自身の経験から考えを始めました。以前私は教師が言っていること、教材に一方的に頼ってし、その二つに対して自分の疑問点はあまり出しませんでした。
費	教材にどのような「疑問点」を出すべきかと思いますか。
雷	まずは、教材にミスがあって、自分の知識に基づいて解明します。第二は教材の編集の面です。曹先生（教育コースの曹大峰先生）は新たな教材を作りました。シンポジュウムでも展覧されました。この教材シリーズは学生の批判的思考力の育成を目指します。 教材に対しての批判っていうのは、なんか、教材を勉強する時には、中に書いた会話文をそのまま勉強するわけではありません。文法と本文の学習が終わった後、頭の中に面白く感じたこととか感心したこととか残ってほしいです。大学三年で鉱山の例で日本の環境問題を議論する一課があって、このような文章を勉強したいと思います。一年の本文に、「これは何ですか」と聞いて、「これはリンゴです」と答えてくれて、簡単な繰り返しのように行います。なんか、「本番な」日本語学習はこのようではないと気がします。林洪先生の授業の進め方を見て、私は、これは私がほしい授業のやり方だと思います。
費	林洪先生の授業は何年生を対象としますか。

雷	何年生か分かりません。たぶん二、三年生全部含めます。
費	ドリブとも言われます、「これは何ですか」「それは何ですか」を繰り返して練習したほうは、基礎段階で多く行われていて、すごく効果的です。この段階で日本語知識がまだ少ないです。あえて批判的思考力を加えてしまうと学生は難しさを感じるかもしれません。だから、早い段階の学習者に対して批判的思考力の育成を目指すとしても実現しにくいと感じています。

対話をしながら考えたこと

批判的思考力は一定の言語知識を要すると気がします。日本語能力中級か上級の学習者を対象としたほうこそが有意義です。また、知識を得ているプロセスを重視したいです。普通に、教師は教材に書いてある知識、例えば「こと」の意味と使い方を学生に覚えさせます。こうすると文法の学習は単に記憶のタスクになってしまいます。「こと」の特徴はどのようにまとめてきたのかは省略されて、ただ結論のようなものを学生に覚えてもらいます。そうでなくて、知識の源から、学生自分で「こと」の文法現象を文章の中で発見し、いくつかの例文で「こと」の前につく動詞の接し方を比較し、最後にその特徴をまとめてみます。こうしたプロセスの中で、学生は分析、比較、推理、整理といった思考を経て文法を学習し、思考のプロセスは複雑化され、学習はより効果的になります。

対話 4　批判的思考と論理的思考の比較

費	思考力にはいろいろあります。論理的思考力も存在します。政治学・行政学とサークルで体験したのは「論理的思考」に相当すると感じて、「批判的思考力」とは別なものだと気がします。さっきの話にも出てきて、政治学でもサークル活動でも実社会生活でも、なんていうか、こういったエピソードか、きっかけか、日本語と文章の理解とはあまり関係がないと思います。で、様々な思考力の中で批判的思考力に重点を置くその出発点は何ですか。批判的思考力の根拠とか、原因とかは何だと思っていますか。 さっき言った社会学で議論した土葬と火葬の話で、面接の時に話の中身が不足だと指摘された話で、主には前後の関連とか、論理的思考力のほうが多いじゃないですか。例えば、弁論大会では、どちらが正しいかどちらが誤うかは関係せず、主張が

	違うからです。主張をめぐって論点を立てて、理由を説明します。これらは批判的思考力と何の関係がありますか。
雷	そういった活動は論理的思考力に当てはまりますね。この前も、私が批判的思考力と論理的思考力を誤ったと気がつきました。論理的思考力のほうが、なんていうか、好きだと思います。二つの連結か…。前の集中講義でも、細川先生はこれについてアドバイスしてくれました。単に政治学か社会学のものをそのまま出したんで、日本語教育と何の関係があるかと聞かれました。私はそのつながりを探す時には難しいと感じました。さっき先生がおっしゃった弁論ですけど、私は弁論の雰囲気も好きです。双方は自分の主張をめぐって激しい言葉のやり取りをします。
費	林洪先生の授業では学生の何の思考力を育成するつもりでしょうか。
雷	まずは、自分で問題を発見する、先生に言われるわけじゃないです。さっき文法学習の例では、チームワークを通して問題発見して、中にはチーム内のコミュニケーションとか、問題解決とか、そして他のクラスメートと分かち合う。たぶんこういう雰囲気が好きです。だがそれはいったい何だろうかは定義しがたいと感じます。
費	まずは、自分で問題を発見する、先生に言われるわけじゃないです。さっき文法学習の例では、チームワークを通して問題発見して、中にはチーム内のコミュニケーションとか、問題解決とか、そして他のクラスメートと分かち合う。たぶんこういう雰囲気が好きです。だがそれはいったい何だろうかは定義しがたいと感じます。
雷	たぶん問題を出すことです。作者はなぜこんなふうに考えるか、自分の疑問点を出すとか、その疑問点について資料を読むとか。
費	「批判」ていう両字がつくと、他人を否定しないわけでも、なんかマイナスなニュアンスがありますね。マイナスな観点に対して自分なりの考えを出す、とのことですか。
雷	実際に、完全に「批判的」に訳したほうは完全に当てはまるじゃないと気がします。もしかして、中国語で「思弁」とも訳せます。先生がおっしゃった通り、他人が間

	違ってこちら側が直してあげるわけじゃありません。「思弁」と理解したほうが相応しいと思います。話の中の論理を把握し、発話者が何を言いたいのか、そして後の質疑応答で自分が何の質問を出すかについて。
費	どっちかというと、論理的思考力のほうに傾斜しますよね。

対話をしながら考えたこと

「批判的思考力」は「批判」ではなくて、自分なりの考えを持って他人の観点を見ることだと思います。この点では政治学と日本語教育では共通していると思います。ただ私が日本語の授業で感じたのは、教材にひたすら従って勉強していくことで、教師自身が教材を「批判的」に使うことができませんでした。学生の学習ニーズに合って難易度を調整するとか、文法を記憶させるだけでなく文法学習を活発化させるとかできれば、日本語教育において論理的思考、または批判的思考力が実現できないわけもないと思います。これはたぶん教授法に関した考えです。

対話 5　教育学の話題

雷	実は日本の教育を考えたことがあります。
費	日本の教育ですか。教育学とか、小中高という教育体制とか。教育制度とか、教育方針とか、行政教育学とか、道徳教育とか、全体としての教育を対象としますね。で、日本語教育は当然教育学に属します。だが、特殊な存在でもあります。非常に細かい分類です。例えば、日本語教育や英語教育といった第二言語習得は、国語教育とも違っています。だから、教育学全体としては、日本語は非常に細かい一種だと考えられます。教育学と言えば、教育学のどの部分に興味を持ちますか。
雷	そうですね。学校の体制とか。明治維新以来、日本の近代教育は飛躍的に発展し始めます。教育学の具体なところはまだ分からないです。もし教育学について研究すると、個々学生の潜在能力を開発すること、例えば、できたところに励ますとか、不正行為に懲戒をするとか、立派な人を育成しようとします。ぼんやりした考えですけど。

対話をしながら考えたこと

教育に関心を持つので、教育コースに入りました。教育に対して、教育体制、教育思想、教育の歴史、また、教師は如何に個々学生の潜在能力を発見しまた励ますかということ、全人のため何の教育が必要なのかということを考えたいと思います。言語教育を教育全体において考えていきたいと思います。例えば、日本語専攻ではただもう一つの言語を身につけるわけではありません。日本語を学んだ後中国語で話すときにも婉曲な言い回しを言うようになるというような、言語の考え方も勉強しているうちに身につけました。言語教育は言語学習だけでなく、人間の考え方も育つということです。

対話 6　批判的思考力と日本語教育のつながり

費	日本語の授業に戻ると、さっき雷さんも言ったように、サークル活動などの経験は、日本語教育との間でまったく関係ないわけもありません。また具体的なやり方はまだないとおっしゃいました。今思いついたこと、ポイントみたいな考えで、日本語授業において学生の思考力とどうつながるかと思っていますか。大学時代の日本語授業で、批判的思考力の育成を目標としたら、学生としては、ほしい訓練法とか。自分の理想的な日本語授業とか。自分が学生でしたら、または、今教師の目からみれば教える時に何のポイントで授業を改善しようとしますか。自分が当時このやり方が通じないとか、私が教師になったらこう教えるよというような考えはありますか。
雷	すこし考えましたけど、ずれがあるかもしれません。大学の日本語授業を改善することは一方、まずもう一個の授業を加えたいと思います。なぜ日本語を学びたい、学生は日本語学科に入ったんですけど、英語や他の言語学科じゃくて、なぜ日本語を学ぶ、学びたいですかと。日本語は大和民族の言語で、言語と民族の関連性とか。学生は日本語学習を終えると日本または他の国と何の関連が構築できますか。また、言語から考えると、日本語は膠着語で、中国語は孤立語で、英語は屈折語で、また少数民族も自分の言語を持っています。皆さんはなぜここに来て日本語や日本を学びますか。こうした質問を学生に考えさせて、興味を起こそうとします。自分の経験からみれば、大学に入ってから日本語を専門として文法や会話などを勉強し始めます。で、自分はいったいなぜ日本語を学びますか。世界にいろいろな言語がありますけど。現実的にみれば、日本は隣国で、国と国のコミュニケーションとか、就職の需要とかが客観的に存在します。だが、個人としてなぜ日本語を学びますか。

費	自分はこの問題をどう解決しますか。どのように日本語学習を続けてきましたか。この何年間で。
雷	自分の興味から出発して、日本社会に関する本を読んだり、日本の歴史を読んだりします。例えば、広島で留学した時、人間関係はすこし冷たいなと感じたことがあります。また、日本語に婉曲な表現が多いです。それは、日本の人々は婉曲な考え方に慣れるかもしれないとある程度反映できます。アメリカで、英語の場合では、「I am」で発話する場合が多くて、自分を強調する傾向があります。それに対して、東アジアの人は常に主語を省略して話す、控えめな態度を取っている傾向にあります。そこで、日本語はなぜそんなに多くの婉曲表現があるのかを考える時、言語と言語を使う人間の考えたとの関係を探したいです。 日本語授業に関しては、聴解の授業の進め方についてすこし考えました。自分の聴解力はまだまだで、特に発話する時、文の後半になるとつながりが難しくなって、文法のほうもぼんやりします。聴解はアウトプットのプロセスだと感じます。大学時代の聴解授業では、場面に応じて日本語の文章を聞きました。日本の選挙とか、食べ物とか、生な日本語を聞いて、メモを取って練習します。段階別に応じて勉強していきます。私は日本語を勉強してから自分の考えを日本語で表現できたいです。
費	大学の日本語授業において、日本事情という授業がありますか。中国人の先生が担当しますか。 日本人の先生が担当しますか。
雷	前はずっと日本人の先生でしたが、私たちからは中国人の先生になっています。
費	日本人の先生なら、日本の現実との関連がもっと強いかもしれませんね。こうしたら学生に興味を起こせるかもね。学生はもっと日本語を知りたい、もっと日本を知りたいという気持ちが強くなるかもしれませんね。 このような授業で学生の興味を起こすとか。
雷	全ての学生に適用できないですけど、日本社会に対する関心が湧いてくるが、必ずしも日本語学習に対して好きになるわけではありません。ただ、将来の就職を考える時に（…）。学生に日本語に対する興味は養えません。 自分もこの点で、 日本語に対し

	ての興味を更にそそるとか、よく分からないです。
費	第一志望は日本語学科じゃなくて、学校に調整されます。やり続けるのは、まず、ここ（日本語学科）にいて限り続けるしかないのような学生はどんな気持ちですか。もう一度入試を受けるとか、そうでないと、大学に入ってから専門を変えるのは本当に大変なことです。しかたがないのでやり続ける学生もいます。しかし、マイナス思考から抜け出せないなら、学習には不利な影響が出てきます。このようなコントラストをどう解決しますか。 興味が強いなら別だが、不利なところではずっと抵抗感があって、よい学習効果も出てきません。個人にとっては無駄で、将来に、人生まではないが、将来にマイナスな影響を与えるかもしれません。
雷	志望から落ちて、ほかの専門に選ばれたということですね。実はクラスメートの一人がその状態です。見た目で理系だという男がいます。日本語は第一志望じゃなくて他の専門から調整されてきました。よく頑張りましたけど、クラスで大概中流でした。

対話をしながら考えたこと

私が気に入った論理的思考力はある具体的な研究テーマになりがたいと思います。例えば、立論、先行研究の整理、自分のテーマの発見といった研究を進むプロセスで論理的思考力が育成られます。でも、単に「論理的思考力」とは何か、如何に育成するかというのも研究テーマになるという考えもあります。例えば、経済学には経済学の論理、政治学には政治学の論理、社会学には社会学、言語学には言語学の論理が綴られます。それで、質問は、言語教育学において、「言語教育学の論理」がありますか。理論上にはあるべきだと思っています。あるとしたら、どんなものでしょうか。

●対話のまとめ

費先生との対話は一時間近く続きました。最後に日本語が第一志望でない学生の状態を聞くところで止まってしまいました。この後は費先生の個人的な日本語学習経験を聞きました。対話報告でそれを省略しています。対話の内容を簡単にまとめてみると、以下のようなものが考えられます。

1．中学から大学院までの日本語学習歴について

（1）中学の頃から言語に関する興味を持っていたこと。

（2）日本語は第一志望でなかったため最初はすこし沈み込んだが、日本語を勉強した後逆にやはりラッキーだと思うようになったこと。

2．批判的思考の中身について

（1）自分が批判的思考と論理的思考を誤ったこと。

（2）大学の授業で思考力の育成を目指す実践を考えたら、何をしようと思うこと。

3．教育学・社会学へ関心について

対話を通じて、いくつかのことを考えさせられました。最初は批判的思考力をテーマとしますが、最後に自分はそれを論理的思考と誤って、実際に論理的思考を考えるんだと気づきました。しかしながら、完全に論理的思考か批判的思考かははっきりと分けることができなくて、ひとまず学生の独立的思考力の育成は重要だと思います。教材や教師が言っていることをそのまま受けるわけでなく、自分の考えや経験、先行研究の観点や他人の意見を参考しながら、自分なりの物事の考え方を養うべきだと思います。また、知識を学生に記憶させたほうより、習得のプロセスを学生に実体験しながら身に着けることも大切な一環だと思います。これらのものは私が今考えている日本語教育における思考力の中身です。

また、私は教育学、社会学に対して、その内容自身に興味を持つだけでなく、勉強しているプロセスで論理的思考力も鍛えられるので、教育学か社会学にもっとふさわしいかもしれないという気持ちも出てきました。私が教育学を考えるとき、学生の潜在能力を発揮すること、学生に興味を発見させること、楽観性・勇気・自信といったポジティブな情緒を身に着けたりすること、全人の育成のために科学教育、芸術教育、自然教育などが必要だということは、人間への関心を目指す教育との間で関わりがあると思います。

だが、やはり、日本語教育の領域において研究を展開したいと思います。単に既に日本語教育コースにいるからではありません。中学の頃から言語が好きで、日本語に対して本当に関心を持っています。また、教育学についてもよく考えます。この二つを結合し、日本語を中心とした言語教育学に関して研究しようと思います。言語教育学の論理、言語教育における論理的思考と批判的思考の育成、言語教育における独立的思考、言語教育におけるポジティブな情緒を身に着けることなどについて考えたいと思います。これらには豊な中身があるので、これから少しずつ知っていき、また、自分の経験でそれを補充し、より豊かで効果的にしようと思います。

3. わたしの考え

集中講義に参考しながら、ずっとこの話題だが、自分は今回改めて原点から――日本語

とうい言語や教育の観点から出発して日本語教育を考えたことができた。細川先生がおっしゃったように、教育は人間への関心の教育になるべきだ。その人間は学生だけでなく、教師も含んでいる。日本語教育は日本語を教えるが、五技能以外に学生をどのように育成するか。教育について、知識を学生に教える形から、考え方を育てるという声もある。というのは、人に魚をあげるより、魚の釣り方こそ教えてあげるべきだ。そこで、サークル活動や社会学の学習や留学の経験から、自分は、単に日本語が言えるのがまだまだ不足で、ちゃんと自分の考えを日本語で相手に通じさせることが重要だという思いがあった。自分は社会の現象や国間の文化に興味を持ち、ぜひ自分の考えたことを言い出したい望みもある。一方、いろいろな実践を通じて、思考力の重要性も胸からしみじみと感じた。日本語学科の学生は、中国と日本という二つの国の文化を同時に接している。将来は直接的に日系企業またはほかの日本語に関した仕事をしないとしても、両国間の文化交流、例えば民間交流などに橋のような役割をしている可能性が高い。だから、大学の日本語教育を想定したら、日本語の教育だけでなく、日本語や日本の紹介または学習を通じて、何を学生に身に着けさせるのかについて焦点を当てたいと思っている。

そこで考えているのは思考力の育成だ。まずは自分の経験から言語の発音に一方的に注意して、思考のほうはあまり鍛えられなかったと感じている。それに、大学の日本語の授業において思考力の育成は重視されていないと気がついた。この二つの点から、日本語教育の中で日本語の教育に限らず、思考の教育もなんか行うべきだと思っている。

また、動機文の書き直しや費先生との対話を通じて、思考力の中身についていくつか考えたことがある。例えば、教材や教師が言っていることをそのまま受けるわけでなく、自分の考えや経験、先行研究の観点や他人の意見を参考しながら、自分なりの物事の考え方を養うべきだ。そして、知識を学生に記憶させたほうより、習得のプロセスを実体験しながら身に着けることも大切な一環だ。更に、教材の本文は教授しやすいためよくまとまっているが、日本の実社会に変われば新聞記事やパンフレット、原著の小説や学術著書などを解読しなければならない。これらの生な材料を理解するために日本語の言語知識だけでなく日本文化や社会に対する理解、自分なりの見方も必要となる。

ここまで個人の経験におけるエピソードと今のテーマは繋がりそうで、自分が考えることの意味そのものについて改めて考えさせられた。この前はあまり整理しなかったため、エピソードはただのエピソードで、考えについて工夫したことが少なくて、自分なりの経験談になりにくかったと感じる。これからの修士論文もこのテーマについて展開したいので、本当にやりたいことをやって、更に勇気づけて、また、よく考えて、頑張っていきたいと思う。

私の日本語世界への旅

—日本語を勉強し続ける理由の探索—

中国海洋大学　　呂亜君

１．日本語勉強をし続ける理由

●なぜ日本語を選んだか

私はなぜ日本語に関心を持っているかというと、実は、最初は女の子、特に、文系生として、数学と生物などの理系と比べて外国語が文系生に合う。また、ある言語を身につけるなら、未来の仕事に役に立つと言われましたから、ある外国語を選んで学ぼうと思います。では、どうして英語ではなくて、日本語を学び始めましたか？やはり、小学校から中学まで、ずっと英語を勉強したから、大学に入った上で、別の言語を勉強しようと思います。希少外国語の中で、韓国語と日本語を開設する大学が非常に多いから、どっちがいいか迷ったとき、先生から「中国で朝鮮民族があるから、韓国語を選ぶなら、競争力がない」と言っていただいて、最後に、日本語を選びました。つまり、最初は、興味というより、未来の仕事の便利の立場から一つの選択肢といえばいいです。

●なぜ 日本語と日本に興味を持っているか

日本語に興味を持つのは単語から始めたと言えます。日本文字の中に、大量な漢語が存在して、見ると大体の意味が分かるから、習得便利です。また、手紙、愛人、娘のように、中国から入ってきたが、意味が変わる漢語があるし。政治、経済など現在中国で頻繁に使用している漢語は日本から来た和製漢語であるということを知ってから、驚きました。漢語は中国から日本に入った一方、日本から中国に入ったそういう文字の交流は面白いと思います。日本語に興味が盛り上がっています。

日本語の勉強し続けると、その言語表現の習得に興味を持っています。ご飯を食べる前に「いただきます」という習慣、「ただいま」「お帰りなさい」という挨拶など、なんだか話して聞いて暖かく、心が柔らかになるという気がします。そして、気付かないうちに、日常の生活で日本語でものとことを言う習慣を身につけています。今も、寝室に帰ると、「ただいま」と言う習慣もあります。

日本語を勉強しているうちに、日本のものが好きになった。最初は、特に好きなのはこたつです。本当に好きです。お宅女として、それは素晴らしい。便利で、暖かい、これが欲しいという感じが強いです。最近は和室のホームスタイルに特に好きです。素朴であるが、一見みると、なんだか落ち着いた感じがします。インタネットで、和室のホ

ームスタイルに関する写真を探して、自分の部屋を和室ホームスタイルのように飾ると想像しています。

そして、日本語を勉強して、周りの人を手伝ったことがあります。最近のことですが、日本の化粧品が中国で流行っているから、日本語が全然知らない伯母さんが友達から日本の化粧品をもらって、どう使用するか分からないから、説明書を見せてくれて、彼女の問題を解決するが、全然分からない外来語があることに注意しました。日本語の化粧品が私も好きで、化粧品に関する単語を勉強したら、どうですかと考えます。また、日本語を勉強して、周りの人を手伝って、いいなあと感じます。

いつの間にか、私の生活は日本語と日本のことにつながっています。日本語を勉強するうちに、日本のことに興味を持っています。日本のことに興味を持っているから、日本語をもっと勉強したい。

●なぜ院生になって 、日本語教育コースを選んだか

大学四年間、日本語を教える経験がありました。その中の一人の学生は、日本語を勉強したことがありませんが、日本へ仕事に行くつもりから、ある日本語試験の合格が必要です。私は彼に日本語を教えて、自分の習得体験を話して、一緒に日本語の勉強を頑張りました。最後、あの日本語試験が合格しました。とても印象強い経験です。自分が知っている日本語やストーリーを他人に伝えること、他人の成長を手伝うこと、最高です。特に、彼に日本語を教えるうちに、自分の習得を反省できます。日本語に興味を持って、日本語を教えることが好きで、それを機に、日本語教師を目指しています。だから、進路を決めて、院生になって、日本語教育コースを選びました。

●なぜ授受表現の習得実態に関心を持っているか

院生一年生の時、先生は「日本語能力を向上させる方法」をめぐって、一つの例を挙げました。「私の学生 A さんは日本語が上手です。A さんは毎日日本ドラマのセリフを繰り返して話したことを知ってから、それは役に立つかもしれないと先生が言ってくれました。その時、自分の日本語を上手になるため、その方法を取ってみったらどうだと考えましま。それで、日本ドラマをダウンロードして、その中のセリフを繰り返して練習し始めました。効果はさておき、

授受表現の使用頻度の高さに驚きました。中には「花子のこと、そう思ってくれた」「まだ持っててくれたの」「花子は放ってくれるタイプだけど」「癒してくれた」という授受表現の用例がありますが。同じ場合、私は授受表現を使用しないかもしれないと考えています。自分の授受表現習得不足のところに気づいて、それはどうしてですか、先生が教えないか、教科書のせいですか、どうやって授受表現を身につけるか、私以外の学習者はそういう問題がありますかといろいろ自問しました。それはちょうど修士論

文の課題を考えている期間ですから、先生と相談した後、私の疑問をめぐって、学習者の授受表現の習得実態を考察してみると決めました。今は具体的な内容は考える中です。

２．対話（対話相手：日本語教育コースの先輩）

●先輩を選んだ理由

一つは先輩は親切で、先輩というより、友達です。私の日本語習得生活を一定の程度でわかりました。もう一つは、先輩は今は論文作成中で、もうテーマを決めました。テーマを決める前の私今迷いた、困った気持ちを理解できますし、意見をくれます。

●対話文

対話１―日本語を勉強し続ける理由

先輩:日本語の中で漢語の存在があるから､第二言語として日本語を選ぶ学生がいますね､最初は習得便利ですが、だんだん習得の困難さを感じて、諦める学生もいますね。どう考えますか

私：確かに、そういう状況がありますね。日本語を第二言語としての学生の大多数はもし困難さを感じて、日本語の勉強を諦めるのは単位のために日本語を選んで、必要な単位をとったら、日本語の勉強をやめます、また、専攻コースに興味深いで、忙しくて、日本語を勉強する時間がないからです。実は、日本語専門の学生が中途で、日本語の勉強をやめることがあります。例えば、友達は公務員試験を準備して、忙しくて、日本語を勉強する余裕がないから、四年生の時、日本語の勉強を諦めました。

私は漢語の存在から日本語に興味を持っています、習得はますます困難になりましたが、諦めないのは、自分の専門で、未来の仕事の武器になりたいという気持ちを持っているからです。困難であればであるほど、諦めずに乗り越えようと思っています。一方、中途で日本語の勉強をやめる人は、習得困難でやめるというより、日本語は未来の人生計画と関係がないからやめると言ったほうがいいです。

先輩：実は、私は日本語コースに選ばれたことを知っていたとき、日本語コースとは何か、何を勉強するかということもはっきりわからない。本当ですね。でも、今は日本語院生になって、人生は不思議ですね。将来は、どんな仕事をするか、日本語に関係があるかどうか分からないが、日本語はもう私の生活の一部分になって、勉強し続きます。

対話しながら考えたこと：先輩の問題は、自分はどうして日本語を勉強し続けるということをもう一度考えさせてくれました。日本語に興味を持っていると共に、日本語は私の専

門で、未来の武器と言えます。将来日本語に関する仕事したいから、日本語の習得は諦めないでずっと頑張ります。

対話 2—言語背後の文化の力

先輩：英語を勉強する時、「hello」 「good morning 」「good night」のような習慣付けはありませんか？どうしてこんなに日本語を興味を持っていますか？

私：英語でも中国語でも、挨拶語が存在しますが、ご飯を食べる前に「いただきます」、家に帰る時「ただいま」という習慣は英語と中国語で同じ表し方がありますが、定着していないでしょう。それは日本語の特別性でしょう。その時、日本語を勉強したばかりの私にとって、なんだか珍しいと感じています。それに、そういう挨拶語を聞くと、落ち着いて、暖かいと感じます。

先輩：あなたの気持ちをよくわかりましたね、実は、呂さんに感動させてくれるのは言語そのものではなく、言語背後の文化と国民性です。日本人は食べ物に対するの尊重、「和」の文化は呂さんに感動させてくれないかと考えます。

私：ええ、そうですね、本当に勉強になりました。確かにそうですね、和室のホームスタイルでも、関心を持っているのは、和室の飾り物だけではなく、飾り物中での素朴と簡単の美です。

対話しながら考えたこと：言語を勉強し続ける力は、言語だけの魅力によって困難であろう。やはり、言語背後の力が一番重要です。私、日本の「和」文化と美観の魅力にひき付けられています。

対話 3—理論と実践

先輩：教育理論について、まず理論を勉強して、それから実践になるパタン、もう一つはその逆で、まず実践してそれから理論を習うパタンがありますが、呂さんの場合どうですか。

私：理論—実践というパタンですね、例えば、誤用分析の理論を学んでから、学習者言語習得実態を考察して、誤用状況を分析して、日本語教育現場へ提案するというパタンです。

先輩：そうですね、学んだ理論は時々インスピレーションをもたらしますね。

私：そうですね、誤用分析理論に触れなかったなら、その理論を用いて、学習者の習得実態を考察することを考えれませんでした。

先輩：論文作成ということ、理論も大事ですね、理論のない論文は感想文だと言われたことがありますね。

私：分かりました、論文を作成するとき、注意しなければならないです。

対話しながら考えたこと：それは論文作成する時の話しかもしれませんが、テーマを決め

る前のプロセスを思いさせてくれました。誤用分析理論を勉強しているうちに、授受表現の習得不足の状態に気づいました。その時、誤用分析理論を用いて、学習者の習得実態を考察しようと思っています。

３．私にとって、テーマについて考えることの意味

なぜ日本語と日本に興味を持っているかということを書いて、タイトルを付けてみると先生が言ってくださったとき、まず思い出すのは「旅」という言葉です。このテーマについての考えるプロセスは私にとって、自分の日本語世界への旅のような気がします。新鮮で、面白くて、もっと知りたくて、意味があるのです。自分がどうして日本語に興味を持っているかということを考えさせたとき、前全然考えなかった課題ですから、新鮮さを感じます。それから、それはどうしてですか、それはいつからですかと自問し探索して、過去を思い出して、面白くて感じます。最後に、旅行は人を成長させるように、日本語世界への旅も私にとって、意味があるものです。

日本語ができるなら、仕事を探しやすいと言われて、日本語コースを選びました。日本語教師になりたいなら、院生になる必要があると思って、院生になりました。今考えると、その時の選択はただ未来の仕事の便利さを考えた上でのものです。でも、テーマ動機文の作成と先輩の対話のおかげで、自分はどうして日本語を勉強し続けるか、どうして院生になるかということをもう一度考えさせてくれました。

確かに、仕事の便利を考えて決断しました。でも、どうして日本語に関する仕事したいですか、ずーと支えてくれたものはなんですか。動機文を作成しているうちに、段々分かるようになりました。それは日本語が好きな気持ちです。

動機文の作成を機に、前の日本語勉強生活を遡って、旅のように段々面白いことを思い出して、懐かしいです。寝室に帰ると、大きな声で「ただいま」と呼んで、おいしいものを食べたとき「好吃」ではなく、「おいしい」と言ってしまう、木村拓哉が好きで、彼ののドラマを全部見たことなどがありました。過去の５年間、なんだか、日本語は親しい友達のように、毎日そばにいてくれました。私は日本語が好きで、日本のことに関心を持って、だから、日本語の勉強し続けて、日本語に関する仕事をしたいです。

以前、日本語は私の専攻で、未来の仕事に役に立つために、頑張ろうという考えを抱えていました。現在、日本語の勉強が好きで、未来の仕事は日本語に関係があるかどうか構わない、重要なのは私はずーと日本語を勉強して、日本の物事に関心を持っていることです。そう考えると、なんだか気が楽ようにな気がしました。仕事のために日本語勉強するのではなく、興味として日本語の勉強し続けると考えると、気が楽ようになるとともに、前に進める自信も強くなっています。

編集後記（参加者からの一言）

三週間の集中講義を通して、自分がまるで生まれた直後の赤ちゃんからついに思考が大体できた少年になった気がします。対話でみんなを繋げながら、みんなの思考力を上げていくことがこの授業で得た一番の収穫だと思います。

袁 通衢（北京日本学研究センター）

今回は三週間の集中講義で、みなさんと話し合いながら、日本語との関係について初めて考えることができ、本当にありがたく思います。今後は日本語だけでなく、何事に対しても、どうやって今までたどり着いたのか、何が私を支えているのかを考えながら、前に進みたいと思います。

王 麗紅（北京日本学研究センター）

この１か月、いろんな価値観に触れる中で戸惑うこともあったが、これまできた道をたしかめてみると、自分がいま立っている場所がはっきりとわかるようになった。これからも一歩ずつ、足もとをたしかめながら、どこへでも・どこまでも歩いていけるような気がしている。

五藤　絵里加（北京日本学研究センター）

この一ヶ月間において日本語への出会いについて色々検討して、最後に自分にとって大事な初心をレポートの形に出来上がりました。授業で対話しながら、皆さんの意見をいただいて、大きな成長を得ると思います。

斉　瓊芝（東北師範大学）

この一ヶ月間の授業を通して、いつも勉強している日本語や日本語教育の枠組みに越え、自分は初めて日本語の上にある思考者になった気がした。日本語の勉強だけでなく、何事に対しても「なぜこのことをするか、何の支えで今まで歩んできたか、これからどこへ行くのか。」という質問を常に自分に詰問した方がいいだろう。

秦　小聡（北京日本学研究センター）

この一ヶ月で、自分の「歴史」を遡りました。人は食べるために活動するのではなく、何か目標や夢を持って生きていきます。これこそ人間というものです。新しい環境に入ると、自分は何かに支えられここに来ましたかよく考える必要があります。

段　文晶（北京日本学研究センター）

修士生活の終わりに、皆様と一緒に議論しながら考える活動から大変勉強になりました。修士論文の執筆に追われながら、いままで歩んできた道を振り返ってみたら、いままで・現在・これからが交差している感じがして、とても不思議な体験となりました。

張　尋（北京日本学研究センター）

何回検討して日本語の学習活動に対するモチベーションが明るくようになります。これから、自分の人生の価値を求めるモチベーションをはっきり知ってもっと良い自分を見つけていきます。

張　満霞（河南大学）

今回、北京日本語学センターの研修生として皆様と一緒に議論しながら考える活動から大変勉強になりました。自分の日本語勉強の過程を振り返って、勉強の意味、勉強を続ける気持ちについてずっと考えて、徐々に明らかになって、大切な経験となりました。

鄧　潔（湖南大学）

今回の授業を通して、改めて自分が日本語を選んだ理由を考えました。いつもこれからの話を考える私達にとって、出発点を振り替えてみるチャンスは滅多にないと思います。アニメ好きから教師へ、一見何のつながりのない話だったが、実ははっきりと結びついていることが気づき、本当に良かったと思います。

ホウ　レンギ（チベット民族大学）

三週間の集中講義を通じて、言語教育に対して自分の中における理解を更新したという心得がありました。更に、自分がこれから修士論文のテーマ、将来したい事業についても改めて考えさせられました。原点に戻ってなぜそれをしたいかと常に自分に尋ねることが習慣のように増強させたと感じています。そうしたらきっとこれまでのない自分が見られると信じています。この集中講義に受講させていただき、誠にラッキーで感心したと思います。

雷　林（北京日本学研究センター）

その一ヶ月で、みんなと相談しながら、最初から今まで日本語勉強を支えてくれていることを考えて本当に勉強になりました。それから、日本語が好きな気持ちを抱えて、前に進めようと思います。

呂　亜君（中国海洋大学）

学び手の日常と教育研究を結ぶ

：北京日本学研究センター「日本語教育学特殊研究」の一カ月　レポート集

発　行　2017 年 4 月 13 日

発行所　北京日本学研究センター2017 年度春学期「日本語教育学特殊研究」

編集兼発行人　細川英雄